

日本タンゴ・アカデミー機関誌

TANGUEANDO EN JAPON

No. 32
2013

タンゲアンド・エン・ハボン

TANGUEANDO EN JAPÓN

Número 32, julio de 2013

日本タンゴ・アカデミー 機関誌

タンゲアンド・エン・ハポン 第32号 (2013年7月)



1935年6月24日
メデジン空港で飛行機に搭乗直前のガルデルとその一行

日本タンゴ・アカデミー

TANGUEANDO EN JAPÓN

第32回 (2013年7月)

(タンゲアンド・エン・ハポン)

目次

	頁
会長挨拶	島崎長次郎 4
日本タンゴ・アカデミー 2013年上期活動実績	5
《報告》NTA2013年全国会員の集い.....	山本幸洋 8
アカデミー行事アルバム	12
タンゴ・セミナーのプログラム・コメント CLASE DE TANGO (タンゴ教室)	
第81回 「タンゴ黄金時代を彩った3人の女性歌手の足跡を辿る」	コメンテーター：齋藤富士郎 15
第82回 「I 初期のタンゴ作詞家たち、II タンゴはアローラスから始まった???	
.....	コメンテーター：高場将美 24
「東京リンコン・デ・タンゴ」レポート	福川靖彦 28
第21回 「関西リンコン・デ・タンゴ」	
レポート	鈴木忠夫 35
プログラム	39
第12回 「中部リンコン・デ・タンゴ」	
レポート	丹羽 宏 42
プログラム	47
風営法とタンゴダンスについて.....	三浦幸三 50
タンゴ・アーカイブを作ろう	海江田禎二 52
神戸発・上田・山本タンゴ写真館 (1 1)	
「アストル・ピアソラ・キンテート日本公演から」.....	上田 登・山本雅生 57
<愛好家インタビュー>-石島 識さん-	聞き手…西川 薫 59
日本初上陸のタンゴ・バンド	
-草創期の日本のタンゴ界と巴里ムーランルージュ楽員-.....	島崎長次郎 63
タンゴ作詞家列伝 第3回 F.ガルシア・ヒメネス/G.コリア・ペニャロサ/ J.ゴンサーレス・カスティージョ	高場将美 69
現代タンゴ群像 (1955 ~ 1990) 第3回 フェルナンド・テル.....	西村秀人 75
“基本が違う” タンゴの音作り	齋藤一臣 82
カルロス・ガルデル -1-	大澤 寛 (訳) 85
マヌエル・ピサロ研究 (前篇)	齋藤富士郎 96
シリーズ・資料再見 (1) フランシスコ・カナロ年表	編集部 105
映画に見るアルゼンチン・タンゴ模様	
~そのアーティスト、タイトル、バイレなどをめぐって~ その3	飯塚久夫 110
こんなレコード/CDを聴いています (3) 数に関するタンゴを拾い出す	小林謙一 114
全国リレー随想 (12) 函館の空の下、タンゴは流れる	上村 要 117
東京・春・音楽祭にてオルケスタ・アウロラのコンサートを聴く	鈴木一哉 122
平和の風に乗せて オルケスタYOKOHAMA	齋藤富士郎 125
CD紹介 Orquesta Aurora / Piazzolla...Amor	吉村俊司 128
編集後記	130

Índice

SALUDOS DEL PRESIDENTE	CHOJIRO SHIMAZAKI	4
ACTIVIDADES DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN (De enero a junio de 2013).....		5
«INFORME» “Reunión anual 2013 de los socios de NTA”	TAKAHIRO YAMAMOTO	8
ALBUM DE LAS ACTIVIDADES DE LA ACADEMIA.....		12
COMENTARIOS SOBRE “CLASE DE TANGO”:		
Vol.81 HISTORIANDO CON LOS TRES CANTANTES FEMENINAS DE LA ÉPOCA DE ORO..	COMENTARISTA:FUJIO SAITO	15
Vol.82 (1) LOS PRIMEROS LETRISTAS DEL TANGO		
(2) ¿EL TANGO EMPEZÓ CON EDUARDO AROLAS?	COMENTARISTA:MASAMI TAKABA	24
REPORTAJE SOBRE “RINCÓN DE TANGO” EN TOKIO	YASUHIKO FUKUKAWA	28
“RINCÓN DE TANGO” EN EL OESTE No.21		
REPORTAJE	TADAO SUZUKI	35
PROGRAMAS.....		39
“RINCÓN DE TANGO” EN LA REGIÓN CENTRAL No.12		
REPORTAJE	HIROSHI NIWA	42
PROGRAMAS		47
LA LEY SOBRE NEGOCIOS DE ENTRETENIMIENTO Y EL BAILE DEL TANGO	KOZO MIURA	50
VAMOS A HACER EL ARCHIVO DE TANGO	TEIJI KAIEDA	52
DESDE KOBE: LAS FOTOS DE UEDA Y YAMAMOTO (11) ÁSTOR PIAZZOLLA QUINTETO		
.....	NOBORU UEDA Y MASAO YAMAMOTO	57
ENTREVISTA CON LOS AFIACIONADOS : SR. SATORU ISHIJIMA	KAORU NISHIKAWA	59
EL PRIMER CONJUNTO QUE VISITÓ POR JAPÓN :		
LA PRIMERA ÉPOCA DE TANGO EN JAPÓN Y LA ORQUESTA DE MOULIN ROUGE DE PARÍS ...	CHOJIRO SHIMAZAKI	63
LOS LETRISTAS DEL TANGO (3) F.García Jiménez, G.Coria Peñalosa, J.González Castillo	MASAMI TAKABA	69
IMÁGENES DEL TANGO CONTEMPORÁNEO (1955-1990) (3) FERNANDO TELL	HIDETO NISHIMURA	75
“SE DIFERENCIA MUCHO EN LA BASE” — ¿CÓMO SE HACE EL SONIDO DEL TANGO?	KAZUOMI SAITO	82
CARLOS GARDEL (1)	Traducción : HIROSHI OHSAWA	85
ESTUDIO SOBRE MANUEL PIZARRO (Primera parte)	FUJIO SAITO	96
SERIE REENCUENTRO CON LOS DATOS (1) CRONOLOGÍA DE FRANCISCO CANARO	EL EDITOR	105
EL TANGO EN LAS PELÍCULAS: LOS ARTISTAS, LOS TEMAS, EL BAILE (3)	HISAO IIZUKA	110
LOS TANGOS QUE ESCUCHAMOS (3) TANGOS QUE SE RELACIONAN CON EL NÚMERO	KENICHI KOBAYASHI	114
CADENA DE ENSAYOS (12) BAJO EL CIELO DE HAKODATE SE OYE EL TANGO	KANAME UEMURA	117
ORQUESTA AURORA EN CONCIERTO (LA FIESTA MUSICAL DE PRIMAVERA EN TOKIO)	KAZUYA SUZUKI	122
ORQUESTA YOKOHAMA EN LA BRISA DE LA PAZ	FUJIO SAITO	125
SOBRE LOS CDS NUEVOS: “PIAZZOLLA...AMOR” por ORQUESTA AURORA	SHUNJI YOSHIMURA	128
ANUNCIOS Y NOTAS DE LA REDACCIÓN		130

“全国会員の集い”あいさつ

さらにタンゴの普及と発展のために…

会長 島崎 長次郎



本日は第16回の“全国会員の集い”に当たり、早朝から沢山の方にご出席いただき、誠にありがとうございます。例年ですと銀座のホテル・ラフィナートが定例の会場になっておりましたところ、ホテルが都合で閉鎖になりましたため、今年から郵政関連のこの「メルパーク東京」へ会場を移して開催する運びとなりました。それにしても今日も北は函館市の石島さん、南は福岡市の藤村さんをはじめ、新潟県村上市の相馬さん、広島市の三好さん、姫路市の井上さん、吹田市の吉澤さん、京都市の山田さん、そして、四日市市の吉岡さんなど、全国各地から90余名の皆さんにお集まりいただき、このように盛大に集いが開かれましたことに、まず深く感謝し、心から厚くお礼を申し上げます。

すでにご承知のとおり、当日本タンゴ・アカデミーが発足したのは、皆さんの記憶に残る長野を舞台に開催された「冬季オリンピック」の年、1998（平成10）年のことでしたが、それから数えて今年も早くも満15年というフシメを迎えることになりました。この間に、初代会長の大岩祥浩さんをはじめ、石川浩司さんや、蟹江丈夫さん、それに加えて昨年は関西の芝野史郎さんなど、元役員の方々が相次いで亡くなられ、なんとも寂しくなりましたが、会員皆さんの温かいご支援と、現役員の協力一致の活動により、会員数も徐々に増加し、現在は190名を超え、やがて200名達成も夢ではないところまでまいりました。これも一重に、会員皆さんのご理解とご協力のお陰でありまして、あらためて厚くお礼を申し上げ、今後なお一層のご支援をお願いしたいと思います。

ところで、当アカデミーの主要な事業ですが、お陰さまでほゞ順調に推移しておりまして、後ほど、杉山経理担当理事をはじめ、齋藤・大澤の両編集長からもそれらの説明がありますので、ご理解をいただければ、と存じます。加えて一昨年からは実施してまいりました「ミロンガ」であります。飯塚副会長をチーフに、昨年は新しい会場を確保することができ、内外からも大変な反響を得ることができました。この「ミロンガ」のコンセプトは“踊る人も”“聴く人も”ともに喜び、楽しめることにありますが、昨年の成功体験を一つの契機に、今後の活動の大きな道筋が開かれた、と喜んでいるところであります。

さて今年にはさらにその上に立って何をなすべきか。従来の実績に甘えることなく、さらに“タンゴの普及と発展”のために、役員一同が心を合わせて取り組む決意しておりますので、皆さまのなお一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

なお本日は、会員の足立（Vi）さんの主宰する“オルケスタ・チェ・タンゴ”の演奏などもありますので、是非会員同士の交流などを通じ、今日のこの集いを楽しく、有意義にお過ごしください。よう祈念して、ご挨拶にかえさせていただきます。本日はありがとうございます。

日本タンゴ・アカデミー 2013年上期活動実績

- 2013年日本タンゴ・アカデミー“全国会員の集い”が、3月3日（日）12時30分から「メルパルク東京において85名の参加者を得て盛大に開催されました。詳細は本号所載のレポートをご覧ください。
- タンゴ・セミナー（CLASE DE TANGO）
 - ◎ 第81回セミナー：3月3日（日）、「メルパルク東京」において、“全国会員の集い”に先だって10時30分から12時まで、コメンテーターの齋藤富士郎氏による「タンゴ黄金時代を彩った3人の女性歌手の足跡を辿る」というテーマで、パワーポイントスライドを利用してのお話がありました。
 - ◎ 第82回セミナー：5月26日（日）、東医健保会館において、コメンテーターの高場 将美氏による「Ⅰ 初期のタンゴ作詞家たち、Ⅱ タンゴはアローラスから始まった???」というテーマによるお話がありました。今回は13時30分から休憩を挟んで16時30分までの長丁場を高場氏お一人でカバーされました。長丁場にも拘らず、高場氏の豊富なタンゴ知識とタンゴ理解に基づいたお話は最後まで皆を飽きさせませんでした。参加者は42名でした。
- 東京リンコン・デ・タンゴ（会場：東京原宿「原宿クリスティー」）
 - ◎ 1月28日（月）：寒い日が続く日々でしたが参加者は会員40名、ビジター8名、計48名とまずまずの盛会でした。先ず初登場の宇都宮右太郎さんが「粋なタンゴをキリリと歌う女性歌手」というタイトルでアイダ・デニス、フリャ・ビダル、エルバ・ベロンの3人に追悼を兼ねてニーナ・ミランダの歌を紹介し、次いで大澤 寛さんが「ゆっくりワルツとミロンガを」というタイトルでバルスとミロンガの名曲を紹介されました。最後に特別出演としてバンドネオンの仁詩さんとバイオリンの鈴木慶子さんの2重奏を楽しみました。
 - ◎ 3月19日（火）：「花よりタンゴはまだ早い？」というキャッチフレーズの今回のコメンテーターは宇都宮知子さんと鈴木一哉さんのお二人です。宇都宮知子さんは「魅惑の男性歌手の歌声」というタイトルで美声の男性歌手7人を紹介されました。また鈴木一哉さんは「ウバルド・デリリオとバンドネオン奏者たち」というユニークな切り口による考察を含めて7曲紹介されました。最後は今回初めての試みである名曲5人選で久保田寿子さん（非会員）、大橋嶽男さん、脇田富水彦さん、島崎長次郎さん、桜井征夫さんが推薦する「エル・チョコクロ」名演集を楽しみました。参加者は会員37名、ビジター5名、計42名でした。
 - ◎ 5月21日（火）：今回のキャッチフレーズは「端午の節句過ぎてもまたタンゴ」で、コメンテーターは佐藤 進さんと杉山滋一さんのお二人です。佐藤さんのお話は全7曲すべてネット配信で入手された音源によるという初めての事例で、最近の音楽配信の状況の紹介も含めた興味深いお話でした。杉山さんは「懐かしの“東芝エンジェル・OWシリーズ”再聴」というテーマでOW-1001からOW-1062に至る7枚の10吋LPから7曲を紹介されました。名曲5人選では弓田綾子さん、佐藤 進さん、笠井正史さん、鈴木啓子さん、吉岡達郎さんの推薦で「チケ」の名演の紹介がありました。参加者は会員33名、ビジター7名の計40名でした。

● 関西リンコン・デ・タンゴ

第21回関西リンコン・デ・タンゴは6月23日（日）13時より神戸三宮の例会場「サロン・ド・あいり」にて開催されました。今回は昨秋亡くなられた芝野史郎氏を偲ぶ特別企画ということで、プログラムは芝野氏のラジオ関西放送「深夜のタンゴ喫茶店」の録音を2編、「アストロリコ・トリオ」の演奏と芝野氏の思い出話、それに島崎長次郎N T A会長による「S Pレコードによる回想コンサート」の3件による構成となっています。詳細は本号掲載の鈴木忠夫氏によるレポートをご参照ください。

● 中部リンコン・デ・タンゴ

第12回中部リンコン・デ・タンゴは5月12日（日）13時より西村秀人N T A理事を迎えて、四日市市「文化の諏訪駅」において開催されました。第1部はS Pレコードコレクターとして有名な名張市在住の澤田義寛氏（非会員）による「稀観原盤による『フランシスコ・プラカニコ』作品集、第2部は西村秀人氏による「タンゴ希少音源集～故・石川浩司氏へのHomenaje～」で、「歴史になったタンゴ」を堪能しました。第3部は「島田由美子とフェリスタンゴ・トリオ」の生演奏で、こちらは「今に活きるタンゴ」をたっぷり楽しみました。参加者は会員11名、ビジター50名の計61名と過去最多でした。詳細は本号掲載の丹羽 宏氏によるレポートをご参照ください。

● 機関誌「タンゲアンド・エン・ハポン」31号が1月に発行されました。

● 副機関誌「タンゴランディア」26号が4月に発行されました。

● 会員動静

● 理事会・役員会

- * 1月18日（金）：現在の会員数は192名との報告がありました。その他、定例の会計報告、東京リンコン・デ・タンゴでのアンケートの集計報告、機関誌編集状況の報告に続き、3月3日の全国会員の集いの計画と役割分担を話し合いました。N T Aのスペイン語表記についてACADEMIAの前に定冠詞LAをつけることにしました。
- * 2月5日（火）：現在の会員数は187名になったとの報告があり、それに続き定例の会計報告、機関誌編集状況の報告がありました。また東京、関西、中部リンコン・デ・タンゴの予定日程を決定しました。来る3月3日の「全国会員の集い」に向けて役員の業務分担を討議しました。更に今年も「第3回N T Aミロンガパーティー」を開催する方針となりました。次回役員会は3月25日を予定しています。
- * 4月1日（月）：3月25日の予定が本日に延期されました。新入会者は1名、退会者は無く、現在の会員数は190名との報告がありました。それに続き、会計入出金状況と機関誌編集状況、中部リンコン・デ・タンゴと関西リンコン・デ・タンゴの日程の報告があり、また東京リンコン・デ・タンゴ、次回タンゴ・セミナーの日程を決定しました。更に3月3日の「全国会員の集い」の結果報告がありました。
- * 6月7日（金）：新規入会者と退会者はそれぞれ1名で、現在の会員数は190名との報告がありました。それに続き、会計入出金状況、機関誌編集状況、中部リンコン・デ・タンゴと関西リンコン・デ・タンゴの開催状況と東京リンコン・デ・タンゴ及び次回タンゴ・セミナーの日程を決定しました。又、第3回N T Aミロンガパーティーの計画、ホームページの運営改善についても討議しました。更に問題となっている風営法の現状についての説明がありました。

● 編集会議

- * 2月5日（月）：役員会に先だってタンゲアンド・エン・ハポン誌31号の反省と32号編集企画、タンゴランディア2013年春号の編集状況の報告があり、それに続き全般的編集方針の議論がありました。
- * 4月1日（月）：役員会に先だってタンゴランディア2013年春号の詳細な編集作業を行いました。
- * 6月7日（金）：役員会に先だってタンゲアンド・エン・ハポン32号とタンゴランディア2013年秋号の編集状況の説明と将来計画を討議しました。

第3回ミロンガ・パーティーについて

N T Aでは一昨年、昨年に引き続き今年もミロンガ・パーティーを開催する計画を進めています。今回は第3回となります。開催日は10月12日（土）を予定しています。開催場所は昨年と同じ麹町の「いきいきプラザ一番町」のカスケード・ホールです。詳細は追ってご連絡いたします。

= 誤り訂正 =

本誌30号の拙稿「2度の世界大戦とタンゴ」の中で下の左の画像をマリオ・メルフィとして紹介しましたが、その後の調査の結果、これは同姓同名の別人とわかりました。正しくは下の右の画像がバンドネオン奏者のマリオ・メルフィです。ここに慎んでお詫びを申し上げますと共に、訂正をお願いいたします。

齋藤 富士郎



(誤)



(正)

《報告》NTA2013年全国会員の集い

山本幸洋(東京)

NTA発足以来、長年親しんだ銀座ラフィナートから芝メルパルクに会場を移し、日本タンゴ・アカデミー全国会員の集いが今年も盛大に行われた。第一部タンゴ・セミナー出席者86名、懇親会出席者は85名とやや少なめだったが、重厚なインテリアのセミナー会場と明るくカジュアルな懇親会会場のコントラスト、そして生演奏、バイレも相まって素晴らしい雰囲気であった。

81回目となるセミナーは、タンゲアンド・エン・ハポン編集長でもある齋藤富士郎理事による「タンゴ黄金時代を彩った3人の女性歌手の足跡を辿る」。ひな祭りというだけあって、気の利いたテーマである。音だけではなく、スライドと動画を駆使した齋藤さんのプレゼンテーションは実に楽しく、メルセーデス・シモーネ／アスセーナ・マイサーニ／リベルター・ラマルケというタンゴ黄金時代を彩った3人の女性歌手の足跡を、ポイントを押さえた素晴らしい構成で解説していただいた。ロシータ・キローガとアダ・ファルコーンを泣く泣く外した理由の説明が誠にC調であり、会場の笑いを誘っていたのも流石である。これで続編も決まったようなものである。

懇親会は、島崎長次郎会長の挨拶、杉山滋一理事の会計報告、機関誌の方針説明（齋藤富士郎、大澤寛両編集長）に続き、大貫孝三会員のご発声で杯をあげた。料理も美味しく、そこここで歓談の輪が広がっていた。新しく入会された皆さんの紹介と、遠方からお越しの皆さんの紹介を経て、今年のナマ演奏は、オルケスタ・“チェ・タンゴ”、タンゴ暦50年のヴァイオリン奏者足立忠男さんをリーダーとし、20余年の活動歴を誇る、腕に覚えある、3 Bn / 3 Vn / Pf / Cbのオルケスタである。軽快な「パ・ケ・バイレン・ロス・ムチャーチョス」に始まり、「ビーダ・ミア」「ラ・トランペーラ」などなど名曲が次々に繰り出され、つつい円卓を端っこに追いやりバイレが始まる。そう、これぞアカデミー会員の集い。あっという間に熱気を帯びてくる。

「ノチェーロ・ソイ」で中締めとなった後、オルケスタは二人の掛け持ち奏者を残し、タンゴ アリエントというクアルテートに衣替え。あの東日本大震災の後に、被災地での演奏で絆を深め結成された小編成楽団だ。バンドネオン／フルート／ギター／ベースとくれば、タンゴ創世記の軽やかな弾み。終演後、フルート奏者にお話を伺ったところ、ドミンゴ・ルーリオの「パ・ケ・バイレン・ロス・ムチャーチョス」を参考にしているとの由。やはり、このような演奏家が出てくるのは心強い。最後は再びチェ・タンゴ。そして両編集長による閉会の辞。再会を祈念してお開きとなった。

Mercedes Simone ～タンゴの貴婦人～

略歴

- 1904年4月21日、ブエノス・アイレス州ラ・プラタ市郊外のビジャ・エリサ (Villa Elisa) に生まれる
- 夫のバプロ・ロドリゲスとその仲間のロンゴの音楽に帯同し、ロンゴの急病の代役として歌ったことが契機となって歌手の道進むことになった
- 1926～27年頃、ブエノス・アイレス デビューを果たす
- 1927年12月15日にビクトルに初録音→1937年まで
- 1936年～1942年、オゾン録音
- 1950年～1953年、UK録音
- 1966年、Hy Riに最後のLP録音
- 生涯にわたってラジオ放送でも活躍
- 1990年10月2日 逝去、享年86歳



5/10-5/11/13 2013.1.13

Azucena Maizani ～La Nata Gaucha～

略歴

- 1902年11月27日、ブエノス・アイレス市のリバダビア病院で生まれる。父親のルイス・ホセ・マイザニは楽器の組立・研磨職人であったらしい
- 1921年にF. カナロが出演していたピガリにアマチュアとして出演するも、それだけに止まった
- 1923年にナショナル劇場に出演し、大成功
- 1923年～1928年、1934年～1935年とオゾンに、1929年から1931年まではブルンスウィックに録音以後の録音は発売的
- 1962年、引退ステージ
- 1970年1月15日 逝去、享年67歳



5/10-5/11/13 2013.1.13

Libertad Lamarque ～タンゴの女王～

略歴

- 1908/9年11月24日、ロサリオで生まれる。父親のガウデンシオは板金加工業者で、立志伝中の人でもあった。経済的には不自由じゃなかったらしい
- 1924年、ブエノス・アイレスのナショナル劇場で初舞台
- 1926年、ビクトルに初録音
- 1933年、映画界入り
- 1946年～1955年、メキシコ滞在
- 1955年にアルゼンチンへの帰郷を果たすが、実質的にはメキシコが活動の拠点であった
- 2000年12月12日 逝去、享年92歳



日本タンゴ・アカデミー 平成24年度収支報告書 単位：円

(2012年 1月 1日～2012年12月31日)

*収入の部

前期繰越金	3,897,497	(内 前年度170名 ¥2,395,000)
会費、入会金	393,000	2012年会費、中途入会など 1月 1日以降入金分
特別会費	302,000	懇親会参加費
〃	370,430	ミロンガ参加費
〃	4,000	セミナー・ビジター参加費
〃	72,900	リンコン、機関誌販売収入など
当期収入合計	1,142,330	
前受年会費	2,376,000	次年度(2013)入会金・会費 169名分

*収入の部合計 7,415,827

*支出の部

事業費	1,890,101	懇親会、セミナー、リンコン、ミロンガ、HPWeb費用など
機関誌発行費	1,706,341	4回発行、印刷、発送、編集企画会議費用など
会議費	220,348	理事会開催会場費など
事務局運営費	278,838	会員名簿、会員証、広報案内文書、コピー・発送費など
当期支出合計	4,095,628	

*支出の部合計 4,095,628

*次期繰越金 3,320,199

平成25年(2013) 1月23日

監査の結果、適正かつ正確であることを認めます。

監事 佐藤 進



監事 西川 薫



日本タンゴ・アカデミー 平成25年度予算書

(単位：円)

(2013年 1月 1日～2013年12月31日)

*収入の部

前期繰越金	3,320,199	(内、2013年前年度繰越 2,376,000円 169人分)
会費、入会金	313,000	2013年会費、入会金、1月 1日以降入金分
特別会費	725,000	懇親会、セミナー、リソコソ、ミロンガ、ビクター会費など
当期収入合計	1,038,000	

*収入の部合計 4,358,199

*支出の部

事業費	1,750,000	懇親会、セミナー、リソコソ、ミロンガ、HPWeb 費用など
機関誌発行費	1,700,000	4回発行、印刷、発送、編集会議費用など
会議費	120,000	理事会開催会場費など
事務局運営費	150,000	通信連絡案内文書作成、ハガキ封筒など
当期支出合計	3,720,000	

*支出の部合計 3,720,000

*次期繰越金 638,199



タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

Clase de Tango

第81回タンゴ・セミナー

2013年3月3日

タンゴ黄金時代を彩った 3人の女性歌手の足跡を辿る

～ Mercedes Simone, Azucena Maizani,
Libertad Lamarque ～

コメンテーター：齋藤 富士郎

(1) Mercedes Simone (21/04/1904～02/10/1990) : タンゴの貴婦人

参考資料：① TANGUEANDO EN JAPÓN No.14 (julio de 2004) pp.74-87

② Robert Gutiérrez Miglio, “EL TANGO Y SUS INTÉRPRETES”

pp.187-202 (Corregidor 1994)

(1-a) RCA Víctor期 (1927～1937, 1943)

● DOMINIO (支配力) (E.Vardaro – L. Rubistein) 47092 (G. 22/05/1929) (CTA-811)

● CANTANDO (歌いながら) (M. Simone) Youtube画像 (1932～33) (映画「Tango」1933より)

(1-b) Odeón期 (1936～1942)

● NO QUIERO VERTE LLORAR (あんたが泣くのなんか見たくない)

(R. Sciammarella – A. Magaldi)

11316 (G. 17/06/1937) (CD-1100)

(1-c) Víctor (México) 期 (1945～1946, 1958)

(1-d) TK期 (1950～1953)

● MUCHACHO (若者よ) (E. Donato – C. E.Flores)

S 5137 (G. 1952)

(1-e) Sonolux期 (1959)

(1-f) H y R期 (1966)

● DANDY (ダンディ) (A. Irusta – R. Fugazot – L. Demare) H y R 7037 (G. 1966) (CD-1140)

(2) Azucena Maizani (17/11/1902~15/01/1970) : ラ・ニャタ・ガウチャ

参考資料 : ① TANGUEANDO EN JAPÓN No.10 (agosto de 2002) pp.92-99

② Robert Gutiérrez Miglio, “EL TANGO Y SUS INTÉRPRETES”

pp.100-128 (Corregidor 1994)

(2-a) D.N.Odeón第1期 (1923~1928)

● PADRE NUESTRO (我が父) (E. Delfino – A. Vacarezza)

伴奏 : フランシスコ・カナロ楽団

11001 (G. 1/1924) (CTA-847)

(2-b) Brunswick期 (1929~1931)

● NOCHE TRÁGICA (悲劇の夜) (A. Huergo – S. Sosa)

2127 (G. 1930) (CD-1286)

(2-c) RCA Víctor (España録音) 期 (1931)

● BOTINES VIEJOS (古い長靴) (J. De Dios Filiberto – A. Vacarezza)

Youtube画像 (1932~33) (映画「Tango」1933より)

(2-d) Odeón第2期 (1934~1935)

(2-e) RCA Víctor (Estados Unidos録音) 期 (1938)

(2-f) Odeón第3期 (1939)

(2-g) RCA Víctor期 (1942~1943)

● COPA DE AJENJO (アブサンのグラス) (C. Pesce – J. Canaro) (G. 8/01/1942) (RCA CAL-3176)

(2-h) Orfeo期 (1953~1955)

(2-i) Showrecords (1937, 1946, 1955)

● LA CANCIÓN DE BUENOS AIRES (ブエノス・アイレスの歌)

(A. Maizani – M. Romero)

Showrecords LP2 (G. 1955)

(2-j) Voxor期 (1959)

(2-k) Copacabana (Brasil) 期 (1961)

(3) Libertad Lamarque (24/11/1908~12/12/2000) : タンゴの女王

参考資料 : ① TANGUEANDO EN JAPÓN No.16 (julio de 2005) pp.48-67

② Libertad Lamarque “Libertad Lamarque autobiografía”

Discografía (Javier Vergara Editor 1986)

(3-a) Víctor 録音 (1926~1933, 1938~1945, 1948, 1950, 1956, 1966~1967, 1972)

● TANITA DE LA PROA (船首のイタリア娘) (V. Martínez Guitiño – S. Merico)

47106 (G. 17/06/1929) (RA 5221)

● BESOS BRUJOS (妖しいくちづけ) (A. Malerba – R. Sciammarella)

Youtube画像 (映画「Besos Brujos」1937より)

● MALDITO TANGO (邪悪なタンゴ) (O. P. Freire – L. Roldán) 60-0560 (G. 04/10/1944) (CTA-832)

(3-b) Cuba録音 (1946,1955)

(3-c) España録音 (1961)

(3-d) México録音 (1946,1953~1960, 1962~1963, 1965~1966, 1969~1970, 1972~1973, 1976,1979, 1990)

● MOCOSITA (モコシータ) (G. H. Matos Rodríguez – V. Soliño) ARCANO DKL 1-3140 (G. 1963)

(3-e) Buenos Aires録音 (1988)

● DISTANCIA (遠くに) (A. Cortez)

RCA TLP 60301 (G. 4/1988)



ステージ



ラジオ



映画



パワーポイント・スライドを使って説明する齋藤 富士郎氏



会場風景

タンゴ・セミナー 2013年3月3日
(当日説明資料)

タンゴ黄金時代を彩った3人の女性歌手の
足跡を辿る
～Mercedes Simone, Azucena Maizani, Libertad Lamarque～

コメントーター： 齋藤 富士郎

タンゴ・セミナー 2013.3.3

1

Mercedes Simone
～タンゴの貴婦人～

略歴



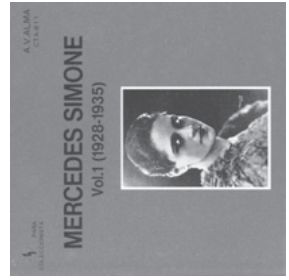
- 1904年4月21日、ブエノス・アイレス州ラ・プラタ市郊外のビジャ・エリサ (Villa Elisa) に生まれる
- 夫のパブロ・ロドリゲスとその仲間のロンゴの巡業に帯同し、ロンゴの急病の代役として歌ったことが契機となって歌手の道を進むことになった
- 1926～27年頃、ブエノス・アイレス デビューを果たす
- 1927年12月15日にピクトルに初録音→1937年まで
- 1936年～1942年、オデオン録音
- 1950年～1953年、HK録音
- 1966年、HYRIに最後のLP録音
- 生涯にわたってラジオ放送でも活躍
- 1990年10月2日 逝去、享年86歳

タンゴ・セミナー 2013.3.3

2

～Victor期(1927～1937,1943)～
DOMINIO (E. Vardaro – L. Rubinstein)
47092 (G. 22/05/1929) (CTA-811)

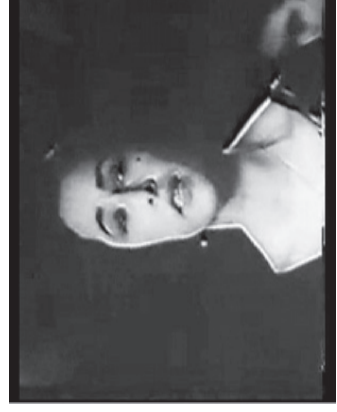
- 天賦の歌唱力が導くままに成功の道を突き進む



タンゴ・セミナー 2013.3.3

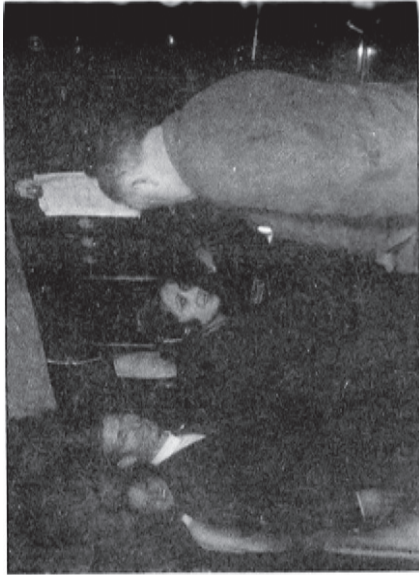
3

CANTANDO (Mercedes Simone)
(YouTube 画像から、映画「タンゴ」の一場面)



タンゴ・セミナー 2013.3.3

4



ラジオ・スプレンドェイの制御室に入り込んだメルセデス・シモーネ

タンゴ・セミナー 2013.3.3

5

～Odeón期(1936～1942)～

NO QUIERO VERTE LLORAR

(R. Sciammarella – A. Magaldi)

11316 (G. 17/06/1937) (CD-1100)

- ・ オデオン期のシモーネが完成度の極致にあることは衆目の一致する所



タンゴ・セミナー 2013.3.3

6

～tK期(1950～1953)～

MUCHACHO (E. Donato – C. E. Flores)

S.5137 (G. 1952)

- ・ 録音当時の年齢は50歳前後で若さを売り物に出来る時期は過ぎているが、それを全く感じさせない円熟の一言で尽きる境地を現出



タンゴ・セミナー 2013.3.3

7

～H y R期(1966)～

DANDY (A. Irueta – R. Fugazot – L. Demare)

H y R 6015 (G. 1966) (CD-1140)

- ・ 「枯れた葉」の見本とも言えるSimoneの晩年の傑作。艶めかしさはかえってVictor時代よりもこの方があるかも。



タンゴ・セミナー 2013.3.3

8

Azucena Maizani ～La Ñata Gaucha～

略歴



- 1902年11月27日、ブエノス・アイレス市のリバダビア病院で生まれる。父親のルイス・ホセ・マイサニは楽器の細工・研磨職人であったらしい
- 1921年にF. カナロが出演していたピガルにアマチュアとして出演するも、それだけに止まった
- 1923年にナシオナル劇場に出演し、大成功
- 1923年～1928年、1934年～1935年とオデオンに、1929年から1931年まではブルンスウィックに録音以後の録音歴は散発的
- 1962年、引退ステージ
- 1970年1月15日 逝去、享年67歳

タンゴ・セミナー 2013.3.3

9

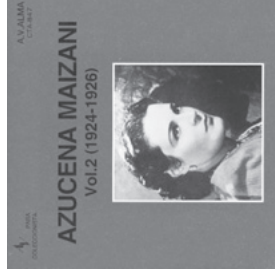
～D.N.Odeón第1期(1923～1928)～

PADRE NUESTRO

(E. Delfino – A. Vacarezza)

伴奏:F. カナロ楽団 11001-B (G. 1/1924) (CTA-847)

- アコースティック録音なので大声を張り上げるような歌い方であるのはやむを得ない。歌唱技術的には未だ発展途上であるが、声は良い
- この期間にF. カナロがマイサニと87曲も録音しているのは驚異である



タンゴ・セミナー 2013.3.3

10

～Brunswick期(1929～1931)～ NOCHE TRÁGICA

(A. Huergo – S. Sosa)

2127 (G. 1930) (CD-1286)

- マイサニが27～29歳と、最も脂の乗り切った時期
- 教訓的な事をドラマティックに歌う歌唱スタイル



タンゴ・セミナー 2013.3.3

11

BOTINES VIEJOS

(J. De Dios Filiberto – A. Vacarezza)

(YouTube 画像から、映画「タンゴ」の一場面)

- マイサニはこの曲を録音していない。
- バックの指揮者はフィリベルト自身



タンゴ・セミナー 2013.3.3

12

~RCA Víctor 期(1942~1943)~
COPA DE AJENJO
 (C. Pesce – J. Canaro)
 (G. 8/01/1942) (RCA CAL-3176)

- 声に加齢による変化が始めるが、歌唱力は衰えない



←アブサンと
専用スプーン

タンゴ・セミナー 2013.3.3

13

~Showrecords (1937, 1946, 1955)~
LA CANCIÓN DE BUENOS AIRES
 (A. Maizani – M. Romero)
 Showrecords (G. 1955)

- かつての美声は望むべくもないが、迫力ある歌い振りや振り仮名を飛ばせる



タンゴ・セミナー 2013.3.3

14

Libertad Lamarque
 ~タンゴの女王~

略歴

- 1908/9年11月24日、ロサリオで生まれる。父親のガウデンシオは板金加工業者で、立志伝中の人でもあった。経済的には不自由なかつたらしい
- 1924年、ブエノス・アイレスのナシオナル劇場で初舞台
- 1926年、ビクトルに初録音
- 1933年、映画界入り
- 1946年~1955年、メキシコ滞在
- 1955年にアルゼンチンへの帰国を果たすが、実質的にはメキシコが活動の拠点であった
- 2000年12月12日 逝去、享年92歳

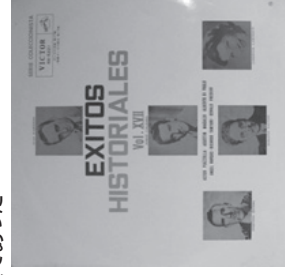


タンゴ・セミナー 2013.3.3

15

~Victor 録音~
LA TANITA DE LA PROA
 (V. Martínez Guitiño – S. Merico)
 47106 (G. 17/06/1929) (RA 5221)

- ラマルケの歌手としての初仕事となった曲。オリンダ・ボサン、マリア・テレサ・ポルダとの共演であった



タンゴ・セミナー 2013.3.3

16

BESOS BRUJOS

(A. Malerba – R. Sciammarella)
(YourTube画像から、映画「Besos Brujos」の一場面)



タンゴ・セミナー 2013.3.3

17

～Victor 録音～

MALDITO TANGO

(O. P. Freire – L. Roldán)
60-0560 (G. 04/10/1944) (CTA-832)



タンゴ・セミナー 2013.3.3

18

- この時代のラマルケの歌は映像を通して聴き手に訴えるスタイルと言える

～Mexico 録音～ MOCOSITA

(G. H. Matos Rodríguez – V. Soliño)
ARCANO DKL 1-3140 (G. 1963)



タンゴ・セミナー 2013.3.3

19

- ラマルケ55歳前後の録音で、声は若い時よりも当然衰えているが、淡々とした歌い振りはむしろ好感をもたせて受け取れる。ラマルケのメキシコ録音はもって聞き直されてよいメキシコ録音なので伴奏に違和感を感じるのはいやむを得ない

～Buenos Aires 録音～ DISTANCIA

(A. Cortez)
RCA TLP 60301 (G. 4/1988)



タンゴ・セミナー 2013.3.3

20

- ラマルケ80歳の時の録音。80歳でこれだけ歌えれば立派である



Clase de Tango

第82回タンゴ・セミナー

2013年5月25日

I 初期のタンゴ作詞家たち II タンゴはアローラスから始まった???

コメンテーター：高場 将美

I 初期のタンゴ作詞家たち

- アンヘル・ビジヨルド *Ángel Villoldo (Buenos Aires 1861 - 1919)*
ヴァラエティ・アーティスト（おしゃべり、歌、ギター、ハーモニカ）、民衆詩人、印刷工。1903年『エル・ポルテニート』の作詞作曲で有名になる。作曲では『エル・チョコクロ』（03年?）、作詞では『ラ・モローチャ』（05年）が特に有名。
 1. **El tachero remendón** 鑄掛け屋（1910年代後半） 作曲：アンヘル・ビジヨルド
歌・ギター：アンヘル・ビジヨルド
 2. **El porteño** エル・ポルテニート（ブエノスアイレスっ子）（1903年） 作曲：アンヘル・ビジヨルド
歌・おしゃべり：アルフレード・ゴビ Alfredo Gobbi
- パスクワール・コントゥールシ *Pascual Contursi (Buenos Aires 1888 - 1932)*
他人の曲に歌詞を付けてうたうアーティスト、後にサイネーテ（庶民的な芝居のジャンル名）台本作家。1915年から、モンテビデオのキャバレーで自作歌詞を歌い、「タンゴの歌」という新ジャンルの創始者となった。
 3. **Ventanita de arrabal** 場末の小窓（1927年） 作曲：アントーニオ・エスカターソ Antonio Scatasso
歌：カルロス・ガルデル Carlos Gardel
- サムエル・リンニグ *Samuel Linnig (Montevideo 1888 - 1925 Buenos Aires)*
サーカス団員を経て、演劇評論家（!）、劇作家。1920年上演のサイネーテ（共同執筆）に挿入したタンゴ曲『ミロンギータ』が絶賛される。生涯に書いたタンゴの歌詞は3曲だけ。
 4. **Melenita de oro** 長い金髪の子（1922年） 作曲：カルロス・フローレス Carlos V. Geroni Flores
歌：フロリアル・ルイス Floreal Ruiz フランシスコ・ロトゥンド楽団 Francisco Rotundo
- マヌエル・ロメーロ *Manuel Romero (Buenos Aires 1891 - 1954)*
サイネーテ作家、後にレビューやキャバレーのディレクター、映画脚本家・監督。1922年のサイネーテに挿入した『パトテロ・センチメンタル』が最初のヒット曲。長いあいだ、たくさんの歌詞を書き、有名曲も多い。
 5. **Las vueltas de la vida** 人生の変転（1928年） 作曲：フランシスコ・カナーロ Francisco Canaro
歌：チャルロ Charlo
- セレドニーオ・フローレス *Celedonio Esteban Flores (Buenos Aires 1886 - 1947)*
民衆詩人。1910年代後半に雑誌に寄稿したルンファルド（アルゼンチン・ウルグアイの都市スラング）による詩『マルゴ』を、ガルデルが気に入って節を付けて歌い（21年録音）、次いで『マノ・アマノ』が大好評（23年録音）。

後には詩集も出版した。

6. El bulín de la calle Ayacucho アジャクーチョ通りの隠れ家 (1925年)

作曲：ホセー・セルビーディオ José Servidio

歌：カルロス・ガルデル

●アルベルト・バカレーサ *Alberto Vaccarezza (Buenos Aires 1886 - 1954)*

サイネーテ作家の最高峰、アルゼンチン演劇人協会の会長にまでなった。裁判所につとめていて、そこで出会ったおもしろい話を劇にしたのが劇作の初め (1903年上演)。21年のサイネーテに挿入した『忘却の盃』が、タンゴ曲としては最初のヒット作。

7. Talán... talán... タラン・タラン (1924年) 作曲：エンリーケ・デルフィーノ Enrique Delfino

歌：カルロス・ガルデル

●ガビーノ・コリア・ペニャローサ

Gabino Coria Peñalosa (La Paz, Mendoza 1881 - 1975 Chilécito, La Rioja)

詩人、文筆家。15才のときからブエノスアイレスに出て、文筆・ジャーナリスト活動。1920年の『白いスカーフ』が、タンゴ作詞のはじめ。30年代半ばから、地方に引退して、ブエノスアイレスともタンゴとも無縁の人生を過ごした。

8. Caminito カミニート (小径) (1926年) 作曲：フワン・D・フィリベルト Juan de Dios Filiberto

歌：イグナーシオ・コルシーニ Ignacio Corsini

●フランシスコ・ガルシーア・ヒメーネス *Francisco García Jiménez (Buenos Aires 1899 - 1983)*

文筆家。1920年の『銀狐』が、最初のタンゴ作詞。いつも作曲者からの依頼で、すでに出来上がった音楽に乗せて作詞した。後年、タンゴに関するおもしろい読み物をいくつか出版している。

9. Tus besos fueron míos あなたのキスはわたしのものだった (1926年)

作曲：アンセルモ・アイエータ Anselmo Aieta

歌・ギター：アルベルト・マストラ Alberto Mastra

●ホセ・ゴンサーレス・カステイージョ *José González Castillo (Buenos Aires 1885 - 1937)*

劇作家。社会性をもった戯曲などで、アルゼンチン文学史上の重要人物。タンゴの作詞は、1922年の『ソプレ・エル・プーチョ』が最初。息子カトゥロも、はじめ作曲家、父の死後は作詞家になって、タンゴの重要人物になった。

10. Silbando 口笛を吹きながら (1925年)

作曲：セバ스티アーン・ピアーナ/カトゥロ・カステイージョ Sebastián Piana / Cátulo Castillo

歌：カルロス・ガルデル

II タンゴはアローラスからはじまった???

エドゥアルド・アローラス *Eduardo Arolas (Buenos Aires 1892/2/24 - 1924/9/29 Paris)*

市の南部バラカス地区に生まれ育つ。両親と兄はフランス南西部ペルピニャン生まれ。兄にギターの初歩を教わり、8才のころから、父の店 (食料品店兼酒場) を手はじめに演奏活動をはじめ。共演したバンドネオン奏者からすすめられて14才のころからバンドネオンを弾くようになる (小型のコンサートラという楽器から始めた)。あちこちの酒場で、小編成で演奏するのと平行して、19才のころから3年間、ラ・ボカ地区の音楽塾で読譜・和声法などを勉強した。1912年 (20才) に初録音。

バンドネオン演奏家としては、左手低音部の「嘆き声」、右手でのオクターヴ奏法のフレージング、両手での平行メロディ奏法、レガート奏法の発明あるいは開発者となった。ラウレンス *Pedro Láurenz* は、「わたしたちバンドネオン奏者は、全員アローラスから発生した」と言っている。強弱の表情・音量の大きさは、伝説になっている。

作曲家としては、その場のインスピレーションで、弾きながら音楽を創り出すタイプだった。和声は単純だが意外性をもって、とてもおもしろい。それを書き留める時間があったくないので、同僚に楽譜を書かせたという。出版楽譜は、専門家がピアノ譜に形を整えたもの。

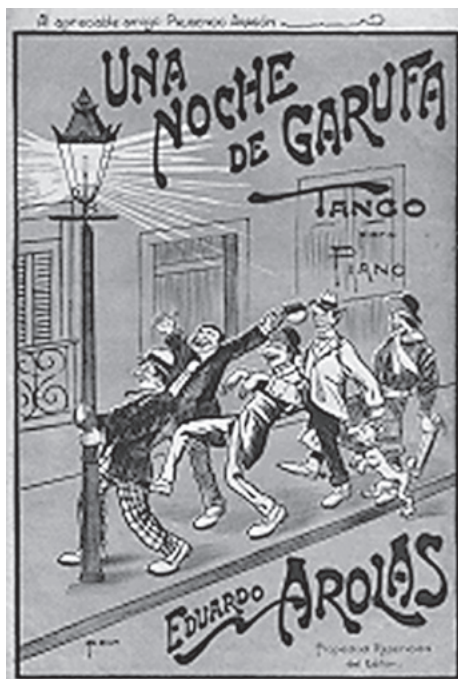
楽団の編曲 (楽譜に書いたわけではないが)・指揮者としては、彼のバンドネオン演奏の美学を反映して、流れのよい (リズム一辺倒ではない) 表情に富んだタンゴ音楽、アルゼンチン〜ウルグアイの地方色を超えた表現をつくった。彼の演奏スタイルは、4つ年下のコピアーン *Juan Carlos Cobián* (アローラス楽団でピアノとギターを弾いていたときがある)、そして、さらに4つ年下のデカロ *Julio De Caro* (コピアーン楽団のヴァイオリン奏者。アローラスのグループに入ったこともある) に直接、大きな影響を与えた。すなわち、現代タンゴの源泉である。

アローラスは、ブエノスアイレスとモンテビデオで活動の後、1920年にパリに渡り、スペインにも行き、高級ダ



ンスホールで演奏をつづけた。経済的にはずっと裕福だったが、25才のときの心の痛みが、彼の命を32才で奪った。

1. **Cosa papa** コーサ・パパ (すばらしいもの) (1919年)
エドゥワルド・アローラス楽団
2. **Una noche de garufa** 酒宴の一夜 (1911年)
カルロス・ディサルリ楽団 Carlos Di Sarli (1931年録音)
3. **Rey de los bordoneos** ギター低音の王者 (1912年)
エドゥワルド・アローラス楽団
4. **Maipo** マイポ (1918年)
*マイポは、チリの首都近くの地名です。1818年に、ここでチリとアルゼンチンの(まだ両国は独立してはいなかった)土地っ子連合軍が、スペイン王国の軍を、激戦で破り、南アメリカの独立に大きな一歩を記しました。
ペドロ・マフィア楽団 Pedro Maffia (1936年録音)
5. **Derecho viejo** デレーチョ・ビエホ (1916年)
オスバルド・プグリエーセ楽団 Osvaldo Pugliese (1945年録音)
6. **Retintín** レティンティン (1917年)
ビクトル・グラニャ楽団 Víctor Graña
(第1バンドネオン・編曲: マクシモ・モーリ Máximo Mori ピアノ: ロベルト・シカレー Roberto Cicaré コントラバス: アリエール・ペデルネーラ Ariel Pedernera) (1960年代録音)
7. **Volcán** ボルカーン (火山) (1910年代後期)
オスバルド・レケーナ (ピアノ・ソロ) Osvaldo Requena (200?年プライベート録音)
8. **Nariz** ナリース (お鼻) (1912年)
ラ・ジュンタ・トリオ La Yunta trío (pf. Mayra Hernández, cb. Gabriel Rodríguez, bn. Sergio Astengo) (編曲: セサル・サニョーリ César Zagnoli) (2010年ライブ)
9. **Marrón glacé** マロン・グラセ (別題: モニート) (1917年)
*モニートは競走馬の名前です。その馬の馬主に曲を献呈したので (これで多額のご祝儀がもらえる)、この名前に変えて楽譜出版しました (表紙に馬の似顔絵を載せて)。
エドゥワルド・アローラス楽団
10. **La cachila** ラ・カチーラ (1921年)
トロイロ=グレーラ4重奏 (バンドネオン+ギター) Aníbal Troilo - Roberto Grella (1953年録音)



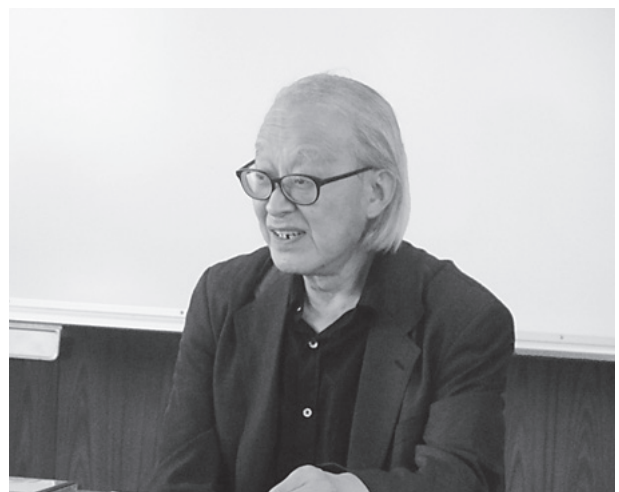
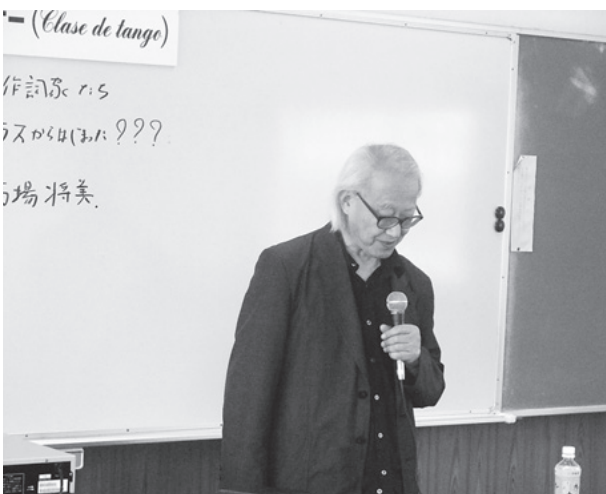
“Una Noche de Garufa” の楽譜表紙
(<http://todotango.com>)



1913年頃のクアルテト・エドゥワルド・アローラス。後列:
ティト・ロカタグリアータ (バイオリン)、グレゴリオ・アスト
ウディジョ (フルート) 前列: エドゥワルド・アローラス (バ
ンドネオン)、エミリオ・ゴンサーレス (ギター)
(<http://analiarego.com.ar/blog/?p=591>)



1918年のオルケスタ・エドゥワルド・アローラス。モンテビデオ、ロド公園において。
 後段左から：フリオ・ゴンサーレス（バイオリン）、「ターノ」エスポーシト（バンドネオン）
 中段左から：ホセ・リスッティ（ピアノ）、ホセ・ケベード（バンドネオン）、フリオ・デ・カロ（バイオリン）
 下段左から：ラファエル・トゥエゴルス（バイオリン）、エドゥワルド・アローラス（バンドネオン）、ホセ・アルミラル（チェロ）（<http://migueldiel.pagesperso-orange.fr/arolas.htm>）



コメンテーターの高場 将美氏

「東京リンコン・デ・タンゴ」



レポート：福川 靖彦

東京「原宿クリスティー」にて

「リンコン デ タンゴ」レポートの掲載は、「Tangolandia」から「TANGUEANDO EN JAPÓN」にかわり、「リンコン」の内容もそれにふさわしいものにしようと頭を痛めています。日本タンゴ・アカデミーが主催する「セミナー」と並んでもう一つの大事な行事なのですが、どなたにも参加してただいてタンゴのすそ野を広げてゆきたいという目標を胸に頑張っています。今やタンゴ界も以前のように薄暗い中でじっとレコードを聴くというスタイルは過去のものとなりました。私達にはこの愛するタンゴをどのように次世代につなげて行くのかという命題がつきつけられているように感じられてなりません。

第68回 2013年1月28日 於 原宿クリスティー

出席者 48名

今年初めての「リンコン」です。この冬は例年になく寒い日が続き出足が心配されましたがそれも杞憂に終わり会場は満員、外の寒さと会場の熱気との温度差は大変なものがあります。私達にとってプログラムのマンネリ化が一番恐ろしいところですが、出演者の御協力もあってそこそこの内容が維持できているような気がします。今日は初めての試みでもある「仁詩と鈴木慶子」デュオの特別出演を予定しました。

第1部

コメンテーター：宇都宮右太郎

テーマ：「粋なタンゴをキリリと歌う女性歌手」

AÍDA DENIS アイダ・デニス

1. PASIONAL (パシオナル) フランシスコ・トゥロポリ楽団指揮 (1956年)

2. LÁGRIMAS DE SANGRE (血の涙) フランシスコ・トゥロポリ楽団指揮 (1955年)

JULIA VIDAL フリア・ビダル

3. MANO A MANO (五分五分) ギター コンフント (1954年)

4. DESDE EL ALMA (心の底から) ギター コンフント (1954年)

ELBA BERÓN エルバ・ベロン

5. ARRABALERO (下町娘) ロベルト・ニエヴァス・ブランコ楽団指揮 (1957年)

6. Y A MÍ ¿QUÉ? (私は平気さ) アニバル・トロイロ楽団 (1962年)

追悼 NINA MIRANDA ニーナ・ミランダ

7. ANDATE CON LA OTRA (あの女と出て行って) ドナート・ラシアティ楽団 (1975年)



宇都宮右太郎さんは、妹さんの知子さんとともにタンゴファンとしては大ベテラン。他のレココンではコメンテーター経験十分ですが、不思議なことにリンコンには初めての登場です。特に唄ものがお好きで、今日はその得意な中から女性歌手の特集を聴かせてくださいました。日本のタンゴファンは歌をあまり聴かない（ベテランのファンに多いようです）のですが、これは言葉の問題があるのでしょうか。1940～50年代は歌の時代とも言われ、素晴らしい歌手が多数生まれました。中にはまだまだ現役で多くの聴衆を集められる人もいます。今日は3人の歌手の特集でしたが、それぞれ素晴らしく歌のタンゴの再認識をした思いでした。

第2部

コメンテーター：大澤寛

テーマ：「ゆっくりワルツとミロンガを」

1. CORAZÓN DE ORO (黄金の心)
2. MILONGA DE MIS AMORES (我が愛のミロンガ)
3. FRANCIA
4. A MIS MANOS (俺の両手に)
5. DESDE EL ALMA (心の底から)
6. DUELO CURDA (酔っぱらいたちの通夜)
7. LÁGRIMAS Y SONRISAS (涙と笑い)

Francisco Canaro
Domingo Rulio Conjunto
Quinteto Don Pancho
Alberto Marino
Ricardo Tanturi
Jorge Vidal
Rodolfo Biagi

大澤寛さんはNTA機関誌「Tangolandia」の編集長として、お馴染みの方です。スペイン語の先生としての長い経験を活かされたタンゴ歌詞の対訳は、単なる和訳でなく原語の雰囲気をよく伝える詩になっていて、私などは常日頃感服しているところです。是非全タンゴ歌詞の対訳全集を完成していただきたいものです。今日は歌のタンゴではなく、ワルツとミロンガを特集してくださいました。従来ワルツとミロンガには素晴らしいものが多く、もっともっと聴かれるべきでしょう。



第3部

特別出演：「仁詩、鈴木慶子」ドウオ

1. NUEVE DE JULIO
2. FLOR DE LINO
3. VIAJE DE BODAS

4. LOS MAREADOS

バンドネオンの仁詩君とバイオリンの鈴木慶子さんが組むのはこれが初めてとのことで、どんな音になるのか期待とちょっぴり心配もしましたが、モダンながらも美しい音楽を聴かせてくれました。鈴木慶子さんは今年からNTAに入会して、従来のクラシックに加えてタンゴ奏者としての活躍がおおいに期待されるところです。



第69回 2013年3月19日 於 原宿クリスティー

出席者 42名

今年に入ってからお客様の数がやや伸び悩んでいるようです。今日もビジター7名を含めてやっと42名のご参加をいただきましたが、主催側としてはやきもきです。何が原因かはっきりとはわかりませんが、プログラムのマンネリ化でないことを祈るばかりです。毎回新しい実演をやってゆくのは相当無理があって、何かそれに代わるものと考えていたのですが、たまたま役員会からの提案で「名曲5人選」という企画をしばらく続けてみようということになりました。これは一つのタンゴの名曲を5人のゲストに思い思いに語っていただくという企画です。ふだんコメンテーターをやるのはどうも、という方でも一曲なら話をしていただけるという狙いもあって、新しい方々が登場してくれました。第1回目の今日の名曲は「エル チョクロ」です。どんなお話が聞けるか楽しみです。

第1部

コメンテーター：宇都宮知子

テーマ：「魅惑の男性歌手の歌声」

1. ADIÓS CORAZÓN (さよなら愛しい人)
アルマンド ゲリコ 唄 フルビオ サラマンカ楽団 (1957年)
2. CARNABAL DE MI BARRIO (我が街のカルナバル)
アンヘル パルガス 唄 エデルミロ ‘トト’ ダマリオ (1956年)
3. DESPUÉS DE CARNAVAL (カーニヴァルのあとで)
ウーゴ マルセル 唄 オスバルド フレセド楽団 (1959年)

4. MAÑANA ZARPA UN BARCO (明日は船出)

ロベルト ルフィノ 唄 C. デイ サルリ楽団 (1942年)

5. MAR Y CIELO (ボレロ) (海と空)

フリート ロドリゲス 唄 ギタートリオ (1953年)

6. LA VI LLEGAR (やってきた女)

ホルヘ マシエル 唄 オスバルド プグリエーセ楽団 (1961年)

7. AHORA NO ME CONOCES (もうお見限りね)

アルベルト モラン 唄 オスバルド プグリエーセ楽団 (1952年)



宇都宮知子さんは、前回コメンテーターをお願いした右太郎さんの妹君です。オシドリ兄妹という言葉があるかどうかは知りませんが、いつもとても仲良くタンゴ活動に精を出しているのをよくお見かけします。そして今日は男性歌手特集です。前回、今回とお二人でよく話し合っ
てプログラムを作られたのがよく分かります。今日の歌手達は歌のタンゴ全盛期に一世を風靡した人ばかりで、前回に続いて歌のタンゴは良いものだなあと
思い知らされました。

第2部

コメンテーター：鈴木一哉

テーマ：「ウバルド デ リオとバンドネオン奏者たち」

1. A PEDRO LAURENZ (ペドロ ラウレンスに捧ぐ) UBARDO DE LÍO y su Grupo
2. EL AFRICANO (アフリカ人) CUARTETO 2X4
3. TACONEANDO (靴音高く) PA' QUE BAILEN LOS MUCHACHOS
4. A PEDRO MAFFIA (ペドロ マフィアに捧ぐ) ANÍBAL TROILO CUARTETO
5. ÍNTIMAS (心に秘めて) C. ORTIZ y U. DE LÍO
6. GALLO CIEGO (盲の雄鶏) NUEVO QUINTETO REAL
7. MAL DE AMORES (恋わずらい) QUINTETO REAL

鈴木一哉さんはNTAの中でも実力ある若手の一人です。多忙な現役の仕事の合い間にタンゴを聴いたり、NTAの役員をされたり、その活躍ぶりには頭が下がります。今日のプログラムはギターの名手ウバルド デ リオをからめた演奏家たちの特集でした。当然演奏は1950年代から2000年くらいまでのものですが、意外ですが新鮮な切り口でまとめられ、改めてウバルド デ リオの名人ぶりを堪能できました。このへんは鈴木さんの面目躍如といったところでしょうか。



第3部

名曲5人選：「エル チョクロ」

コメンテーター：5人の皆さん

久保田寿子さん（非会員）

大橋嶽男さん

脇田富水彦さん

島崎長次郎さん

桜井征夫さん

フランシスコ カナロ

ファン ダリエンソ

キンテート ホセ リベルテラ

ダニエル コラン アコーデオン ソロ

カルロス ディ サルリ

今回から始まった新しい企画です。できるだけ多くの皆さんにお話しいただくという主旨から始めましたが、この曲、この演奏にける思いをそれぞれに語っていただいて、楽しいプログラムになりました。次回は「チケ」の5人選を予定しております。



第70回 2013年5月21日 於 原宿クリスティー

出席者 40名

「東京リンコン」も70回目の開催になりました。皆様のご協力のたまものと主催者側一同深く感謝しております。近頃タンゴファンの減少が懸念される中で、なんとかこのまま頑張っていきたいと意欲を燃やしつつ知恵をしぼっています。今回は会員が33名と少なかったのですが、新しい会員外のお客様が7名いらっしゃいました。ちょっとさみしい気がしながらも反面頼もしい気持ちにもなっています。プログラムの内容も少しずつでも変化をつけてゆかねばと思っています。皆様からのご提案お

待ちしています。

第1部

コメンテーター：佐藤 進

テーマ：最近のCD事情

今回佐藤さんにはこちらからお願いして、上記のテーマでプログラムを作っていただくことにしました。われわれには馴染みの「ムトウレコード店」が閉鎖になるなど、タンゴレコードファンにとってはなんともお先真っ暗な時代になってきてしまいましたが、もともとはアルゼンチン本国でも良いものが出てこないという事情によるところが大きいようです。そんな中でも佐藤さんはインターネットを駆使して世界中からCDを購入されています。今日はその辺のノウハウと最新のCDについて語っていただきました。



- | | | |
|---|-------------------|--------|
| 1. JULIÁN (フリアン) | パブロ・アグリ四重奏楽団 | 2011年 |
| 2. AMAR Y CALLAR (愛と沈黙) | ロス・マンシフェスタ楽団 | ? |
| 3. EL CHOCLO (エル チョクロ) | カティーカ・レイニ (vn) 独奏 | 2000年代 |
| 4. MILONGA DE LA ANUNCIACIÓN
(受胎告知のミロンガ) | タンゴ&フレンド | 2007年 |
| 5. ENSUEÑOS (エンスエニョス) | オルケスタ・カミニート | 2011年 |
| 6. SE DICE DE MÍ (わたしの噂) | クラウディア・アルマーニ (歌) | 2011年 |
| 7. MALA JUNTA (悪い仲間) | セステート・メリディオナル | 2011年 |

第2部

コメンテーター：杉山滋一

テーマ：懐かしの東芝エンジェル・OWシリーズ 再聴

第2部は大ベテランの杉山さんです。私たちと同年代の方ですが、日本で発売になったタンゴレコード（特にLP, EP）は全てお持ちになっていて、何をお尋ねしてもすぐ回答を頂けるというレコードの生き字引みたいな方です。一曲一曲のデータまで記憶されているのには脅威を感じます。今日はわれわれが駆け出しのころお世話になったエンジェルレコードの、それも25センチ盤からの特集で、持ってきていただいたレコードジャケットともども懐かしいものばかりでした。



1. SENTIMIENTO GAUCHO (牧童堅気) OW-1001

フランシスコ・カナロ楽団 A. アレナス 唄

2. PASIONAL (激情) OW-1005

オスバルド・プグリエーセ楽団 A. モラン 唄

3. IVETTE (イベッテ) OW-1010

ロベルト・フィルポ四重奏楽団

4. EL INTERNADO (囚われ人) OW-1014

キンテート・ピリンチョ

5. HACELO POR LA VIEJA (年老いし母のために) OW-1020

A. デ・アンジェリス楽団 A. ラロック唄

6. SILBANDO (口笛を吹きながら) OW-1025

オスバルド・フレセド楽団 H. パチェコ唄

7. DON ORLANDO (ドン・オルランド)

エクトル・バレラ楽団

録音は全て1951、52、53年 タイトルはレコード表記そのまま

第3部

名曲5人選：「チケ」

1. 弓田綾子さん

ニコラス・ダレッサンドロ

2. 佐藤 進さん^(*)

エストレージャス・デ・ブエノス・アイレス

3. 笠井正史さん

イグナシオ・コルシーニ

4. 鈴木啓子さん

キンテート・パッファーデ・リオ

5. 吉岡達郎さん

オスバルド・プグリエーセ

(*) 予定していた吉田義之さんのご都合が急にわるくなったので佐藤さんにピンチヒッターをお願いしました。

皆さんそれぞれの演奏にかける思いを語っていただきましたが、四日市の吉岡さんは「チケ」の演奏はこの演奏につきると力説されていました。



第21回 関西リンコン・デ・タンゴ・レポート

— 鈴木 忠夫 —

関西リンコン・デ・タンゴが2013.6.23(日)にいつもの神戸三宮「サロン・ド・あいり」で開催された。今回は昨年10月に逝去された「芝野史郎さんを偲ぶ」特別企画で未亡人の芝野統子さんもご出席の予定だったがご体調がすぐれぬとかで欠席された。ご心労をお察し申し上げ早いご回復を祈りたい。

神戸ポルテニア音楽同好会会長の山本雅生さんの開会挨拶に続いて、日本タンゴ・アカデミー会長島崎長次郎さんより故芝野史郎さんを偲ぶ言葉があった。要約すると「彼は我々タンゴファンの大切な仲間で先生でもあった。彼はタンゴについて調べ上げたことは全部公開した。彼ほど熱心なタンゴファンはいない。そして彼ほどタンゴファンに恨まれた人はいない。彼ほどあちこちで喧嘩した人はいない。それなのに今日の此の店始って以来の参加者は何なんだ、奥さんのお目に掛けられなかったのは残念だが、彼もきっと驚き喜んでいることだろう。私もNTA会長としてお礼申し上げるとともに芝野に成りかわってお礼申し上げる。」(40人位が限度のキャパシティに何と58人！)

何しろ何かと話題が多かった芝野さんのこととて、タンゴファンの氏への人物評価は分かれるところだろうが芝野さんは間違ったことは見過ごせないたちで、レココンなどで解説者がちょっと事実と違った事をいうと忽ち「それは違う」と口を挟まれるので往々にして論争を起こして敬遠されがちだったようだが、これも芝野さんの頑固とも言える一本気な性格が災いして損をされていたように思う。

今となるとこれらもかえって懐かしい思い出となって、この大勢の集まりになったと信じる。

プログラム第1部は<芝野史郎さんが出演された“AMコーベ”「深夜のタンゴ喫茶店」より>と題して、約15年前に半年間続いたラジオ番組で、芝野さんが司会され毎週ゲストを招きゲストの持参したタンゴを聴くという趣向だった。その中から①1998.12.21放送、②1999.2.1放送の2回の録音を聴く。①のゲストはアストロリコの門奈紀生さんで芝野さんはアストロリコの後援会長だったこともあり気心の知れたお二人だ。門奈さんの3曲はブグリエーセとピアソラを敬愛されご自身バンドネオン奏者でアストロリコの実質的な企画制作者の二人だ。此の放送の4年前の阪神大震災で亡くなったタンゴ仲間の熊谷公孝氏を偲び、氏がもたらした当時では貴重だったレコードを聴くという構成だった。

プログラム第2部は<芝野さんを偲ぶ「アストロリコ」のエピソードとライブ>と題して現在最も充実した活動を続けるアストロリコがトリオで追悼演奏するという(無料!!)有難いお申し出だ。ビオリン麻場利華さん、ピアノ平花舞依さん、バンドネオン門奈紀生さんのトリオで演奏に先立ち例の如く、スポークスマンの麻場さんが芝野さんとアストロリコの馴れ初めを語った。それによるとマエストロ以外はタンゴ初体験という彼女たちを、かぶりつきから睨めまわす恐ろしい男それが芝野さんだった。以後段々親しくなり、無二の犬猿?となって毒舌をたたき合う仲になったようだ。アストロリコのアルゼンチン行きにも再三同行して、彼の地のアーティストに引き合わせたり、何かと面倒を見るなど芝野さんの細かい心遣いぶりから、見かけによらない人柄がうかがえる。

演奏に入って1曲目は「カフェ・ドミンゲス」これは先ほどの「深夜のタンゴ喫茶店」のテーマ曲でもあり神戸では必須曲だ。2曲目は芝野さんが主宰された楽団「ロス・チャムジョス」にちなんで「エル・チャムジョ」2曲続けて演奏、イヤー 矢張り生演奏はすばらしい。

以降の曲目はプログラムを参照して頂くとして麻場さんの芝野さんの思い出をもう一つ。

「去年のアストロリコ神戸公演の終了後ロビーにいたらあたふたと芝野さんが近づいてきて「今日のアンの『ロ・ケ・ベンドラ』のソロはフランチェニの音しとったで」と滅多にない褒め言葉に私はついいつもの口調で「何か悪いものでも食べたの？、それとも・・・」と云ったら芝野さんは平然と「私はガンヤ」と云って去って行かれました。後でその翌日入院され、間もなく亡くなられた、と聞いて私は何ということを書いてしまったのだろうと自分を責め続けました。」

会場を大笑いさせながら涙ぐむ麻場さんだった。芝野さんもきっと天国で笑っていただろう。

それにしてもこの日のトリオの演奏は素晴らしかった。楽器が皆歌っていた。

プログラム第3部は<畏友：芝野史郎氏に捧げる>と題して島崎長次郎さんが芝野さんと掛け合いで行ったレココンや「オレのこれをやるからオマエのあれをくれ」といった芝野さんとの取引で得た思い出の貴重盤やら芝野さんがこよなく愛したレコードなどを聴いた。島崎さんいわく「こうして聴いてみると彼がいかにセンチミエント溢れるタンゴが好きだったかがよくわかる。彼は硬派の変わり者に見られがちだが実際は私たちと同じタンゴを熱愛する心優しい人だったのだ」全く同感。

法事などで故人の思い出話が盛り上がるのはえてして故人の悪口を云っている時だ。しかも皆で大笑いしている。誰も故人を憎んだり、恨んだりはしていない、なつかしんでいるのだ。

山本雅生さんの閉会の言葉「故人をボロクソに云う人がもっといると思ったが・・・」充分でした。

終了後例によって吉澤義郎さんにご苦勞願って参会者一同の集合写真の撮影をした。

その後有志での懇親会となりゲストを囲み、夕食をとりながらの歓談が7時過ぎまで続いた。

追記：「島崎長次郎NTA会長より」

彼はしあわせ者です。門奈さんのアストロリコの友情出演を含め、これほど多くの皆さんが集まった追悼コンサートになるとは、多分彼も予想しなかったことでしょう。

日本タンゴ・アカデミーを代表して、私からも厚くお礼を申し上げます。

最後に芝野さんのご冥福を祈り、あわせて、これまでの長い間の活躍をたたえて、全員で拍手を送ってお別れをしましょう。 **全員拍手！！**

第21回関西リンコン・デ・タンゴ出席者 昼の部 NTA会員15名 非会員43名
懇親会 全員で21名



開会の挨拶をする山本雅生さん



故芝野史郎さんを偲ぶ島崎会長



第14回関西リンコン・デ・タンゴでの
芝野／島崎SP名盤掛け合いトークで
の一場面（2009/11/15）

第11回関西・リンコン・デ・タンゴで
のクレデンザで聴く芝野／島崎掛け合
い名迷盤あれこれ（2008/5/18）





芝野さんの「人徳」を反映して、関西リンコン・デ・タンゴ始まって以来の盛況、会場のキャパシティは40人が限度であるところに何と58人の参加者があった



第21回 関西リンコン・デ・タンゴ 2013年6月23日(日) 於:神戸三宮「サロン・ド・あいり」

(写真撮影: 吉澤義郎)

<プログラム>

***** 第 1 部 *****

芝野 史郎さんが出演された“AMコーベ”の「深夜のタンゴ喫茶店」より

- | | | | | |
|---|--|-------------------------------------|------------------|----|
| 1 | 1998年12月21日の放送から | ゲスト | 門奈 紀生 さん | |
| 1 | FELIZ NAVIDAD
幸福なクリスマス | J. D'Arienzo J .Polito E .Rodríguez | | 芝野 |
| | | 演奏 ファン・ダリエンソ | 歌 ホルヘ・バルデス | |
| 2 | AVE MARÍA
アベ マリア | Franz Schubert | | 芝野 |
| | | 演奏 エルネスト・パファ | | |
| 3 | ZUM
スム (店の名前) | A. Piazzolla | | 門奈 |
| | | 演奏 オスバルド・プグリエセ | | |
| 4 | RECUERDO DE BOHEMIO
レクエルド デ ボエミオ | E. Delfino | 門奈 | |
| | | 演奏 A・ピアソラ L・フェデリコ A・リオ R・メデーロス | | |
| 5 | LA BICICLETA BLANCA
白い自転車 | A. Piazzolla H. Ferrer | | 門奈 |
| | | 演奏 アストロリコ | 歌 大浦みずき | |
| 6 | LA CUMPARSITA
ラ・クムパルシータ | G. H. Matos Rodríguez | | 芝野 |
| | | 演奏 P・マフィア P・ラウレンス | | |
| 2 | 1999年2月1日の放送から | ゲスト | 上田 登 さん 山本 雅生 さん | |
| 1 | LUNES
月曜日 | F. G. Jiménez J. L. Padula | | 上田 |
| | | 演奏 Q・ピリンチョ | | |
| 2 | LA CANCIÓN DE BUENOS AIRES
ブエノスアイレスの歌 | A. Maizani O. Cufaro M. Romero | | 山本 |
| | | 演奏 F・カナロ | 歌 E・ファマ | |
| 3 | JUEVES
木曜日 | R. Rossi U. Toranzo | | 芝野 |
| | | 演奏 J・ダリエンソ | | |
| 4 | ASÍ ES EL TANGO
これがタンゴと云うものさ | E. Donato U. Toranzo M. Manzi | | 芝野 |
| | | 演奏 E・ドナート・イ・ス・ムチャーチョス | | |
| 5 | TARDE
タルデ | J. Canet | | 上田 |
| | | 演奏 F・ロムート | 歌 M・モンテロ | |
| 6 | LA CUMPARSITA
ラ・クムパルシータ | G. H. Matos Rodríguez | | 山本 |
| | | 演奏 A・ダゴスティーノ | 歌 T・ガルシア | |
| 7 | LA CUMPARSITA
ラ・クムパルシータ | G. H. Matos Rodríguez | | 芝野 |
| | | 演奏 F・プラカニコ | | |

芝野さんを偲ぶ「アストロリコ」のエピソードとライブ

- | | | |
|----|---|--|
| 1 | CAFÉ DOMÍNGUEZ
ドミンゲスコーヒー店 | Ángel D'Agostino |
| 2 | EL CHAMUYO
おしゃべり | Fco. Canaro |
| 3 | UNIÓN CÍVICA
ウニオン・シビカ（市民連合） | Domingo Santa Cruz |
| 4 | SUR
スール（南） | Aníbal Troilo Homero Manzi |
| 5 | ROMANCE DE BARRIO (vals)
下町のロマンス | Aníbal Troilo Homero Manzi |
| 6 | SILUETA PORTEÑA (milonga)
ブエノスアイレスの影法師 | N. L. y J.V. Cuccaro O. N. E. Noli |
| 7 | SILBANDO
口笛を吹きながら | Cátulo Castillo Sebastián Piana
J.Gonzáles Castillo |
| 8 | PATOTERO SENTIMENTAL
感傷の不良少年 | Manuel Jovés Manuel Romero |
| 9 | MILONGA
ミロンガ | Ástor Piazzolla |
| 10 | LA CUMPARSITA
ラ・クンパルシータ | G.H.Matos Rodríguez |



バンドネオン：門奈紀生さん、バイオリン：麻場利華さん、ピアノ：平花舞依さん

畏友:芝野史郎氏に捧げる

その思い出をたどって

サロンド・あいり
島崎長次郎

◆ 2人で楽しんだ、掛け合いによる「SP名迷盤コンサート」

- 1) 第11回「関西リノコン(2008年5/18)」
=神戸三宮“サロンド・あいり”
“今日の締めくくりはこの「ラ・クンバルシータ」(SP)で”
①島崎～ニコラス・ダレサンドロ6重奏団
②芝野～ピアノコ・パチーチャ楽団



クレデンザを挟んで、島崎氏と芝野氏 (鈴木忠昌氏撮影)

- 2) タンゴ・クラブ“ノチェーロ・ソイ”(2008年11/08)
=新橋“Cafe HIMIKO”
“おすすめ、日本録音のこの1枚”
① 島崎～ブエノスアイレスの歌 淡谷のり子
② 芝野～エル・アコモード Orq. Tip. コロムビア



～ 芝野史郎 × 島崎長次郎 ～

◆ 私の手元に眠る芝野さんからの“貴重盤”

- ① ヌンカ フランシスコ・ロムート楽団
- ② 道化師の心 ロベルト・マイダ(歌)
- ③ ラ・クンバルシータ オラシオ・ベトロッシ楽団



◆ 芝野さんがこよなく愛したレコードから

- ① マダム・イボンヌ エドガルド・ドナート楽団
- ② ノビエシータ (いとしい人) Orq. Tip. ロス・プロビンシァノス
- ③ ラ・クンバルシータ カジエタノ・プグリス楽団



第12回 「中部リンコン・デ・タンゴ」レポート

丹羽 宏

第12回「中部リンコン・デ・タンゴ」（以降、中部リンコンと略記）は5月12日（日）13時より、西村秀人 理事ご夫妻を迎えて、三重県は四日市市内の交流サロン「文化の諏訪駅」で開催した。当日の中部地方は見事な五月晴れ。静岡県光廣会員をはじめ、愛知県など1時間以上の隔地からの参加者も含め61名（会員 11名、ビジター 50名）と過去最多の参加者が会場を埋めた。前回同様、ローカル地での開催というハンディを払拭する意味もあって、リピーターの方々にはグループでの参加をお願いして来た。各種親睦会、旧カフェ「フェリシア」の盟友、歌手仲間、演奏者仲間、社交ダンス仲間、三重県のタンゴ同好会などである。

趣旨にご賛同頂けたことが好結果に繋がったようである。3部からなるイベントの進捗内容を陸上トラック競技に準えるならば次のようになるのではなかろうか。

1920年～30年代のピカ盤S Pレコードで逸る気持の場内を惹き付けるスタート・ダッシュ、ラジオの生演奏をエア・チェックした音源等で高揚感を一気に盛り上げる直線ライン、80分に亘る生演奏によりラスト・ストレッチを廻ってゴール・インする……将に「歴史になったタンゴ」と「今に生きるタンゴ」を併せ技で堪能することが出来た。

【第1部】 希観原盤による「フランシスコ・プラカニコ」作品集

名張市 澤田義寛さん

恒例の「会員によるレコード・コンサート」に代って、三重（四日市、津）と大阪のタンゴ同好会で毎月の解説を担当されている澤田義寛さんに初めて登場頂いた。

5000枚近いというS Pコレクションの中から、テーマを特定したプログラムを作り解説されている。今回はこの豊富な音源の中から、お好みというフランシスコ・プラカニコの単独作品のみを8曲厳選された。勿論、国内プレスの本盤が出ていないものである。皿回しをしながら使用する盤面とレーベルを確認したが、ヴィクトルの2枚以外は全てマイナー・レーベル（PAMPA、Brunswick、ORFEO、Columbia、Electra）で殆どが超美麗盤だった。

澤田さん特有の関西弁ながらパキパキした口調と、上方落語ならぬユル・キャラ口調が混在した話ぶりに、場内は笑いが絶えなかった。

1曲目はPampa盤の「パンパ」と洒落たようだが、1950年代初頭のC. デマリア楽団をいい音で聴けた。2曲目は「マードレ」、「母の日」を意識した選曲のようだ。お好みというBrunswick盤によるアスセナ・マイサニの歌が登場した。マイサニの艶話で会場はどよめいた。この後は、メルセデス・カルネの「メンティーラ」、ファン・サンチェス・ゴリオ楽団の「コリエンテス・イ・エスメラルダ」、アルフレッド・ゴビ楽団でホルヘ・マシエルが歌う「ソンプラス」と続いた。6曲目はアンセルモ・アイエタ楽団、1930年録音の「テ・オディオ」をこれほど低ノイズで聴いたのは初めてだった。7曲目は強力推薦曲、フランシスコ・ロムート楽団による「インディフェレンシア」である。ロドルフォ・

ピアジの作品に有名な同名異曲があるが、F. フロージョの作品は格調も高くロムート楽団の端正な演奏と相俟ってもっと聴かれてもよい曲であろう。

最後はフランシスコ・プラカニコ楽団の数少ない自作自演録音の1曲、「ノ・ボルベラス・ア・トゥ・バリオ」で「プラカニコ作品集」を締めた。なお、この時期の楽団（6重奏）メンバーには、バンドネオンがG. クラウシとD. スカルピーノ、バイオリンがM. フランシアとE. バルダロ、コントラバスがA. モンカガッティという凄腕が揃っていた。遠路からのSP盤の携行に感謝。

【第2部】 タンゴ希少音源集 ～故・石川浩司氏へのHomenaje～

理事 西村秀人さん

まずは「稀少音源特集」と「4年前に逝去された故・石川浩司氏に敬意を表する副題」との関わりについて、解説者の当日のコメントを拝借しながら少し紙面を割くことと致したい。

副会長という要職にあった故人は、早い段階からインターネットの利用に取り組み、「タンゴの部屋」というサイトを立ち上げ、タンゴ情報の発信と啓蒙に注力された。これによって、若い世代のミュージシャンやファンとのコミュニケーションをとられたことは特筆される実績と言えよう。多くのファンの方々も異論はないと思う。

昨年に至って、遺品を受け継いだ家族から関係者を通じ、「資料を含めたコレクションを逸散させずに有効利用して欲しい」という切なる相談が解説者に持ち込まれたという。自分（解説者）では全てを引き受けて維持するのは難しいが、引き継げるものは保存することになると共に、逸散させないことを前提にして、アルゼンチンでの寄贈先を探して話を進めて来たとのことであった。

『些細な音源情報であってもグルーピングして残されなかったら、自分も含めてファンはオープンに耳にすることが出来なくなる』という解説者の思いから、早速これらの遺品情報を基に組み立てられたプログラムが今回の【第2部】という訳である。

ここからは本題のプログラムにつき、筆者が始めて聴く音源やサプライズ音源を特記してみたい。全12曲のタンゴは音源のタイプにより、

レコードの稀少盤より、ラジオ放送録音より、来日アーティストのライブ録音から

という3つに分類されている。最後の区分「Bonus Tracks」は本題に直接関係のないお楽しみ企画である。

最初は「レコードの稀少盤より」という区分で、1曲目はホルヘ・フェルナンデスが主宰した「4重奏団」による「ロ・アン・ビスト・コン・オトラ」をDisc Jockeyの17cm盤で聴く。ピアノの「ホセ・パスクアル」を迎えての演奏で、歌の曲ながら凄くいい。他面の「ティエラ・ネグラ」も聴きたくなかった。恵まれない演奏家人生を送った一人と言われる、このバンドネオン奏者が67年に残してくれた将に貴重な音源である。



在りし日の石川浩司氏

2曲目はエピソードが面白く語られることの多いフランシスコ・ラウロの指揮になるロス・メンドシーノスの演奏で、「シエテ・パラブラス」。この楽団が残した音源にはヴァルス等が多いので、タンゴで特集を組むには苦勞する楽団である。タンゴは壺を心得た演奏で唸らせてくれる。

続いては、ラジオ放送録音よりという二つ目の区分。所謂、ラジオで生演奏した楽団のエア・チェック録音で、正規録音が残されていない演奏が多いのが特色の区分と言えよう。

同じ曲でもリピート部分など微妙に異なるところが面白いし、現地アナウンサーのコメントやスタジオの拍手が入ったりして臨場感が楽しめる。エンリケ・アレシオ楽団による「ラ・カチーラ」は59年頃の放送らしいが、正規には録音しなかったのが貴重音源であろう。

レオ・リペスケル楽団が67年頃にラジオ・エル・ムンド局から放送した「ミロンゲーロ・オイ」は当時まだ新曲だった。なお、レオ・リペスケルは“最初のタンゴ室内4重奏団”や“クアルテート・ロス・ポルテニートス”のようなスタイルの異なる小編成楽団も率いていた。この区分最後の曲は「ラ・クンパルシータ」。1961年にホアキン・ド・レジェス楽団がラジオ・エル・ムンド局から生放送した演奏が音源となっているが、54年にTKレコードで作った音源と異なる演奏なので、クンパル・ファンは眼が輝く。曲紹介のバックに流れる第一バンドネオン奏者、マキシモ・モーリによる「レクエルドス・デ・ボエミア」を東の間楽しむ事が出来た。生放送の意外性であろうか。

三つ目の区分は来日アーティストのライブ録音から。

選曲されている5曲は70年前後の諸々のコンサート会場におけるライブ音源である。何れも音質がクリヤーでバランスよく音録りされているのでコントロール・ミキサー端子で収録されて献呈されたデモ音源であろう。

最初はエクトル・バレーラ楽団による、後にも先にも1回だけの来日公演時の演奏で「エル・ジョロン」。バレーラはこの曲を録音しなかったが、当時は国内で人気のあった曲なのだろう。

続いては、69年に来日したキンテート・リアルによる「ベンタニータ・デ・アラバール」。

今回のプログラム中、最大のサプライズと言えようか。履歴不詳の女性歌手フリエタ・シニとデュエットしているのは、解説者によれば「エンリケ・マリオ・フランチャーニ」らしいとの事である。それらしい雰囲気や司会者のコメントや会場のざわめき等から推し量ることが出来る。

さらにサプライズは続く。次はファン・ダリエンソ楽団の演奏で歌うアルベルト・エチャグエの「アディオス・ムチャーチョス」である。歌詞の内容からすれば、捲し立てて歌うエチャグエとの相性は100%ないと思えるのだが。勿論、双方のレペルトリオにはない曲。

このコーナーの4曲目もツアー演奏会ならではの「ファン」と「ファン」の組み合わせである。

職人芸のピアニスト、ファン・リッソを相手にしたファン・カンバレリのマジック・バンドネオンには引き込まれてしまう。最後は来日のために再結成されたフランチャーニ＝ポンティエル楽団が「荒城の月」をサービス演奏する。ビックリ・マークで楽しんだ「タンゴ稀少音源特集」はここまでである。

最後の2曲はBonus Tracks（タンゴ国際化100周年）という打出しで2曲聴いた。

グローバル化100周年ということで、取り上げられた曲目は艱難辛苦の末に欧米での成功をもとに社交ダンスの骨格を作り上げた「アイリーン・カッスル夫妻」のミュージカル・コメディに使われた「サンシャイン・ガール・タンゴ」である。第一次大戦直前の話である。

後年、この実話をもとにアメリカRKO映画（F.アステア＝G.ロジャース主演）が作られたことはよく知られている。ヴィクター・ミリタリー・バンドによる1913年の演奏は当時のアルゼンチン・タンゴでもそうであるが、行進曲風である。そして100年後の演奏として選曲されたのは、オルケスタ・

エスクエラ・デ・タンゴによる、曲名もずばり“エミリオ・バルカルセ”最後の作品、「オルケスタ・エスクエラ・デ・タンゴに捧ぐ」である。タンゴを志す若いミュージシャンの登竜門的な存在になっている、この実践スクールの演奏でプログラムを締めて頂いた。

【第3部】 「島田由美子とフェリスタンゴ・トリオ」の生演奏

中部のタンゴ・ファンからの熱い要請を受けて、昨年春の第10回に続き、同じトリオのメンバーで登場してもらった。1時間余りをタップリ楽しませてもらった。

このトリオはバンドネオンの島田由美子とDuo Refre（デュオ・レフレ）がタンゴを演奏する機会にはジョイントしている。Duo Refreはコントラバスの丹治清貴とピアノの長井美香によって結成されたグループ。クラシックに限らず多くの音楽分野で二つの楽器の魅力をアピールするためである。昨今は小川紀美代や仁詩とツアー・ライブを行うなど活発に活動している。

ここでプログラムのお話を少々しておきたい。「フェリスタンゴ4重奏」が持っている豊富なレパートリーも、トリオとなるとその楽器構成からして種々不自由なアレンジ・パートが出現するためか、自ずと曲目が制約されるようである。しかし、前回に取り上げなかった曲を5曲入れているところは大いに注目したい。

「ピアソラ・タンゴ」は2曲と前回より少ないが、ミロンガも含めた所謂「古典タンゴ」は「ヌエバ・プントス」、「アディオス・アルヘンティーナ」、「シルエタ・ポルテーニャ」、「エル・アコモード」などレパートリーを増やして入れ替えたのだ。ただ、「エル・アコモード」が原稿と異なり、「名曲タンゴ・メドレー」にすり替わってしまったのはやや残念。

演奏内容では、クラシック畑との掛け持ちながら、コントラバスとピアノが前回よりタンゴのフィーリングを的確にアピールしていたのを、会場はお気付きだった筈である。勿論、アレンジ面で随所にショート・ソロを配したことにも依るが、室内楽などで会得した奏法を、タンゴ演奏へ巧妙に取り入れていた。今後が楽しみなDuo Refre（デュオ・レフレ）である。

アンコール曲がまた楽しかった。偶然か否かは分からないが、G. H. マトス・ロドリゲスの作品から、「ラ・クンパルシータ」と「アディオス・アルヘンティーナ」の2曲がこの順に登場した。地域に根ざした演奏グループだけあって、終始場内から掛け声が飛び、ステージとの掛け合いで熱くも和やかなライブとなった。

【母の日プレゼント】

5月の第二日曜日は母の日。全61名の参加者の内、女性の方々は26名と半数近くの席を埋めて頂いた。「中部リンコン」では初めての試みではあったが、タンゴの曲名に「母」や「母のイメージ」が入った演奏や歌を纏めて編集し、ささやかながら参加女性にプレゼントした。



【リンコン懇親会】

リンコン終了後は駅前のカフェ・バールに場を移してのリンコン懇親となった。吉岡会員の進行により光廣会員（静岡県磐田市）はじめ、来四に1時間以上も要する隔地参加者も含めて16名がフリー・オーダーで実に愉快的ひと時を過ごした。



澤田義寛氏



会場となった四日市市「文化の諏訪駅」



西村秀人氏



満席となった会場



フェリスタンゴ・トリオの演奏

懇親会風景 (右端は磐田市から来られた光廣威克さん^{たけかつ})



<プログラム>

【第1部】<SPレコード演奏>

13:05-14:10

希観原盤による「フランシスコ・プラカニコ 作品集
中部リンコン解説初登場 名張市 澤田義寛さん

1. パンパ～草原～ PAMPA

Carlos Demaría y su Orquesta Típica<Pampa PS-5014>
(カルロス・デマリア楽団)

2. 母 MADRE(詞: Verminio Servetto)

Azucena Maizani con Orquesta<Brunswick 2131>
(歌:アスセナ・マイサニ)

3. いつわり MENTIRA(詞: Celedonio Esteban Flores)

Mercedes Carne con Orquesta<Brunswick 2207>
(歌:メルセデス・カルネ)

4. コリエンテスとエスメラルダ CORRIENTES Y ESMERALDA(詞: Celedonio Esteban Flores)

Juan Sánchez Gorio y su Orquesta<ORFEO 6002>
(フアン・サンチェス・ゴリオ楽団)

5. 暗闇 SOMBRAS(詞: Verminio Servetto)

Alfredo Gobbi y su Orquesta Típica, con Jorge Maciel<Víctor 60-1901>
(アルフレッド・ゴビ楽団、歌:ホルヘ・マシエル)

6. 君を憎む TE ODI(詞: Celedonio Esteban Flores)

Orquesta Anselmo Aieta<Columbia A5306>
(アンセルモ・アイエタ楽団)

7. 冷淡 INDIFERENCIA(詞: F Frollo)

Francisco Lomuto y su Orquesta Típica, con Fernando Díaz<Víctor 37418>
(フランシスコ・ロムート楽団、歌:フェルナンド・ディアス)

8. あなたは町に戻らない NO VOLVERÁS A TU BARRIO

Orquesta Típica Francisco Pracánico<Electra 737>
(フランシスコ・プラカニコ楽団)



フランシスコ・プラカニコ楽団

【第2部】 会員レコード・コンサート／

14:10-15:30

タンゴ稀少音源集～故・石川浩司氏への Homenaje 日本タンゴ・アカデミー理事 西村 秀人

レコードの稀少盤より

- ① 魅せられし心 Lo han visto con otra (Horacio Petrossi)

演奏: ホルヘ・フェルナンデス四重奏団 Jorge Fernández y su cuarteto <Disc Jockey 17cm, 1967?>

- ② 七つの言葉 Siete palabras (Juan Maglio Pacho-Alfredo Bigeschi)

演奏: フランシスコ・ラウロとロス・メンドシーノス Francisco Lauro y su Orq. Los Mendocinos

歌: アルヘンティーノ・オリベル canta Argentino Oliver <RCA Víctor 78 rpm, 1952><ラジオ, 1967?>

ラジオ放送録音より

- ③ ラ・カチーラ La cachila (Eduardo Arolas)

演奏: エンリケ・アレッシオ楽団 Enrique Alessio y su orquesta típica <ラジオ、局不明、1959?>

- ④ 今日のミロンゲーロ Milonguero de hoy (Leopoldo Federico-Osvaldo Requena)

演奏: レオ・リペスケル楽団 Leo Lipesker y su orquesta <ラジオ・エル・ムンド、1967?>

- ⑤ ラ・クンパルシータ La cumparsita (G.H.Matos Rodríguez)

演奏: ホアキン・ド・レジェス楽団 Joaquín Do Reyes y su orquesta típica <ラジオ・エル・ムンド、1961>

来日アーティストのライヴ録音から

- ⑥ 泣き虫 El llorón (Ambrosio Radrizzani)

演奏: エクトル・バレーラ楽団 <1971>

- ⑦ 場末の小窓 Ventanita de arrabal (Antonio Scatasso-Pascual Contursi)

演奏: キンテート・レアル 歌: フリエタ・シニ & ??? Quinteto Real, cantan Julieta Zini y ...<1969>

- ⑧ さらば友よ Adiós muchachos (Julio Sanders)

演奏: フアン・ダリエンソ楽団 歌: アルベルト・エチャグエ

Orquesta Juan D'Arienzo, canta Alberto Echagüe <1968>

- ⑨ タンゴ・メドレー Selección de tangos (varios)

(Hacelo por la vieja / Amurado / Mi dolor / Criolla linda / Recuerdo / Canaro en París)

演奏: フアン・カンパレリ&フアン・リッツォ Juan Gambareri & Juan Rizzo <1969>

- ⑩ 荒城の月 Luna en el viejo castillo (Rentaro Taki)

演奏: フランチーニ=ポンティエル楽団 Orquesta Francini=Pontier <1973>

Bonus Tracks (タンゴ国際化 100 周年)

- ⑪ サンシャイン・ガール・タンゴ Sunshine Girl Tango (Paul A.Rubens)

演奏: ヴィクター・ミリタリー・バンド Victor Military Band 1913-03-11

- ⑫ オルケスタ・エスクエラ・デ・タンゴに捧ぐ A la Orquesta Escuela de Tango (Emilio Balcarce)

演奏: オルケスタ・エスクエラ・デ・タンゴ Orquesta Escuela de Tango 2013(発売予定)

—————ステージ整備&懇親・休憩 約30分間—————

【第3部】 FELIZ TANGO・TRIO EN VIVO

16:00—17:10

生演奏：島田由美子とフェリスタンゴ・トリオ〈三重県〉

島田由美子～バンドネオン

長井 美香～ピアノ

丹治 清貴～コントラバス

《演奏者の都合により曲目は変更する場合があります》

1. 孤独の歳月 AÑOS DE SOLITUDE (Ástor Piazzolla)
2. リベルタンゴ LIBERTANGO (Ástor Piazzolla)
3. ポルテニヤの影法師 SILUETA PORTEÑA milonga (N.L.Cuccaro=J.V. Cuccaro)
4. エル・アコモード EL ACOMODO (Edgardo Donato)
5. 真赤な太陽 SOL CALIENTE (Nobuo Hara)
6. フェリシア FELICIA (Enrique Saborido)
7. 速度計の9ポイント NUEVE PUNTOS (Francisco Canaro)
8. 老虎 TIGRE VIEJO (Salvador Gruppillo)
9. 夢の中 ENSUEÑO vals (Antonio Sureda)
10. エル・カブレ ～野鳥名～ EL CABURÉ (Arturo de Bassi)
11. きっちりと COMME IL FAUT (Eduardo Arolas)
12. パンチョス・バー PANCHOS BAR (Raúl Ruiz Moreno)

《会員の声》



風営法とタンゴダンスについて

元・日本アルゼンチンタンゴダンス教師協会会長
一般社団法人 日本舞踏教師協会相談役 **三浦幸三**

昨年、大阪のサルサクラブが無許可で営業したとして風営法違反容疑で摘発され経営者が逮捕、起訴されたことに端を発しダンスを風営法の規制対象から撤廃させる運動に発展しました。

運動は風営法の「ダンス」規制条項の削減を求めるレッツダンス署名推進委員会を立ち上げ全国にその署名を求めて展開されてきました。タンゴダンス界にもサルサダンス界からの共闘依頼に共鳴、風営法でタンゴが踊れなくなるとの懸念にタンゴダンス界も参加、一般市民にも呼びかけて署名の数は平成25年1月現在10万名を超えたようである。ダンス人口500万人と言われている総意が欲しいところだが多くは無関心を装っている。むしろ踊っているタンゴダンスファンやサルサダンスファンには何の罪も無い。サークル同好会活動として踊る場合には何ら風営法には抵触しないはずです。風営法撤廃や改正等の法律は国会で決定されるので、ダンス界において規制反対の政治連盟でも組織し賛成の与野党国会議員との連携を図ってお願いしたらよいと思う。

昨年、平成24年11月21日に「風俗営業等の規制及び業務の適正化に関する法律施行令の一部を改正する政令」が公布された。10万人を超えた規制反対の運動が功を奏したと思いのほか、かえって厳しいものとなっている。

改正の内容は、国から委託されていたダンス教師を認定する団体が、従来は2団体「全日本ダンス協会連合会（全ダ連）」と「日本ボールルームダンス連盟（JBDF）」のみだったが、「ダンスの教授に関する講習の実施に関する業務を適正かつ確実に実施することができる」と認められる法人」と改正されて2団体以外でもダンス教師認定試験を行うことが出来るように緩和されたように思えるが、そう簡単な話ではないらしい。

法改正の真意はタンゴやサルサに非ず。関係者や警察庁OBの方から聞いた話では、ダンス界の派閥争いの結果、教師資格認定試験を2団体以外にも無認可で施行する任意団体が行い混乱を招いているので、2団体以外にも枠を広げるかわり施行面で規制を明確にしたようである。法人資格の全国組織を持った2団体と同等に全国的な教師試験を施行できる組織となると簡単な事ではない。

日本のタンゴダンス界では創業20数年、今まで勧告や逮捕された話は無かった。創業第一号は読売文化センターのタンゴダンス教室で講師を担当された故小林先生を始めその他の施設でタンゴダンス教室を開いた多くの第一期教師陣は全員ダンス教師認定資格者であった。その後、後継のタンゴダンス教師の多くが無資格のアマチュアであることに気づかず公安委員会や警察は今日まで黙認状態が続いている。深夜0時以降のミロンガ開催もまた然り。スタジオ開設の場合においてもオーナー及び教師は認定資格者でなければ認可されない。

ダンス教室を開設し経営指導するには風営法施行規則の条件に合えば教室の設置は誰でも出来る

が、それには公安委員会への認定申請によって許可されなければならない。また、世界タイトルを得た選手の場合には必然的に申請によってダンス教師認定資格を得ることが出来ると云われている。

タンゴダンス界の現状では風営法違反とされています。

社交ダンスでは数多い種目の中でもペアダンス以外は、接客と異なりダンススポーツやヒップホップ等は風営法から適用除外となるようです。タンゴダンスは適用となりますので現状では教師は公安委員会認定に係わる講習及び試験に合格した者でなければならないとされています。厳密にはミロongaを営業のリボンのように不特定に接客し踊る場合でも教師資格が必要と言われております。

現状の問題解決の方策としては、法の規制撤廃は難しいと思われるので次のことを提案したい。

- 1、独立したタンゴダンスの教師認定資格制度を確立させ国家公安委員会の許認可を得る。
- 2、現在行われているダンス教師認定試験科目にタンゴダンス種目を加え受験科目の選択が可能とすること。
- 3、外国人講師については当該の在日大使館の推薦を得た上期限付きで国家公安委員会の許認可を得る。
- 4、また、タンゴダンスの普及に貢献している同好会やサークルの指導員にはアマチュア指導員資格制度を創設し資格（License）を与えることで教師への道も開け、また社会的な信用信頼も得られると思う。

現在タンゴダンス関係者により現状打破の解決策を鋭意考慮中と言われております。

2013/03/01 記

>>> 新刊紹介 <<<

「TRANSIT 21号 美しきアルゼンチン」

（株）講談社から上記のタイトルの講談社MOOK 第21号が2013年6月6日付で発行された。内容は一口に言って「アルゼンチンのすべて」であり、アルゼンチンの地理的状况、独立から統一国家に至る迄の歴史、軍事独裁政権時代を重点に置いた現代政治史、過去の豊かであった時代から経済破綻に至る迄の経済史が簡潔にまとめられており、アルゼンチンを理解する上で大変助けになる。またカナロ、デ・カロ、ダリエソ、ピアソラを始め、チェ・ゲバラやマラドーナなど、アルゼンチンを代表する人物の紹介記事も豊富である。更にアルゼンチン文学やアルゼンチン映画の紹介もされている。全体的には文章よりも写真の占める割合が大きく、「読む雑誌」よりも「見る雑誌」の性格が強く、それだけ「役に立つ」とも言える。要領よくまとめられたトラベル・ガイドも付いており、これからアルゼンチンに旅行してみようという人々には大変便利な書物である。但し、タンゴに関する記述はあまり多くなく、全202頁のうちの6頁どまりであるが、これは書物の性格上やむを得ないだろう。定価は1800円で、Amazonで購入可能である。



《会員の声》

タンゴ・アーカイブを作ろう

海江田 禎二 (市原市)

1. はじめに

タンゴに親しんですでに60年が過ぎました。

この間、仕事や子育て、家のローン返済などでやむを得ず、タンゴから離れた時期もありましたが、タンゴへの愛着はいつも心に燃え続け、現在でも口ずさむメロディはタンゴ、外出には欠かせないウォークマンにも大半の曲はタンゴ、そして、愛用のパソコンに向かうテーマもタンゴ関連という日々を送っています。(時々クラシック、ジャズ、そして日本歌謡にも浮気してはいますが…)



このような日々を送るさなか、ひとつ、気になることがあります。それは、このタンゴが、今後衰退の方向に向かいつつあることがどうも防ぎ得ないのではないかという不安です。

どの音楽にも栄枯盛衰はつきもので、衰退はタンゴだけではないのですが、それでも、この愛すべきタンゴが、近い将来、過去の遺物となり、忘れ去られるのではないか、これからの世代の人たちにとって、あの名曲、名演が全く聴けなくなる日が訪れるのではないかという危惧が拭えないのです。これが私だけの危惧にとどまれば幸いです。年来の知人にもこの不安が付きまとっているとの声を聞きました。また今日、世にあふれるいろいろなジャンルの音楽も、タンゴの響きを耳にするチャンスはごくわずかで、時たま聴くタンゴも、ピアソラであったり、アルゼンチンからの新譜紹介も、心に染み渡るタンゴは本当にわずかとなりました。

一方、今の若き世代も、タンゴなる単語は耳にすることはあっても、その実態は知るすべもありません。ピアソラの曲は聴いたことはあっても、プグリエセの名曲名演“ラ・カチーラ”は知らず、“ラ・クンパルシータ”は知っていても、デマレの名曲“マレーナ”は一度も耳にしたことがないのです。

これは、彼ら若き世代の過去の音楽への無関心さだけを攻めることはできません。なぜなら、そのような音源は、現在、これだけの情報過多の時代にあっても、耳にすることはできず、また、求めることもできない状況にあるからです。タンゴについていえば、この音楽は、いまだに、世界最遠の地でしか十分には耳にできない、ローカルな文化なのです。

こうした状況は、単に音楽文化の盛衰の一現象だと、目をふさぐことはできない、むしろ、こうした状況を作り出しているのは、ほかならぬわれわれタンゴファンであり、また、先輩達ではなかったのだろうかという思いを禁じえないのが、私の想いです。

そこで、このような状況を少しでも改善するために、タンゴファンとしていままなすべきことは、このすばらしい「タンゴ」という音楽を、若き世代に少しでも身近な存在にしておくこと、そして、過去

の名曲名演を、いつでも、負担なく、耳にすることのできる環境を作ること、これが大切ではないのかと思います、拙文を認めたという次第です。

2. タンゴを永続させるために

音楽ファンは、好みがどのようなジャンルであれ、CDやレコードの形で何がしかの音源を持ち、聴きたいときに、聞きたい場所でそれを楽しんでいます。

たとえば私は、タンゴ（に限らず、所有しているすべての音源）を、パソコンを通じてハード・ディスクに保管しておき、室内なら、これもパソコンを通じてステレオで、また屋外の場合は、聴きたい曲目をウォークマンに転送して、いつでも聴けるような環境を準備しています。（今の若い世代は、これにスマホが加わります）

こうしておく、どのような曲目でも、わずか数秒以下で、直ちに再生することができ、また、同一曲の聴き比べや、同じ楽団の録音年代の異なる同一曲も、直ちにアクセスして聴くことができます。

また、よく聴く歌のタンゴは、歌詞とその和訳を同じパソコンに保存しているため、それを読み出し、歌詞を目で追いながら曲を聴くことも容易です。（最新のウォークマンも同じ）

こうした環境は、多少のパソコンに通じた人であれば、あるいはMP3形式ウォークマンを日常利用している人であれば、容易に準備できるものです。また、音源ですが、これも一般の音源を提供している企業は、100万曲以上の音源をインターネット経由で供給しており、曲あたり100-200円という費用で容易に好きな音楽を楽しめます。

ここでの問題は、タンゴという音源がどの程度インターネットで入手できるかということです。特に、まずタンゴに親しむ第一歩となる、いわゆる名曲名演は、現在どうすれば入手できるのかですが、残念ながら、これほどの音源豊富な供給企業でも、まず、入手不可能といわざるを得ないのが現実です。また、音源があっても、それが名曲であったり、名演であったりという情報をどのように手に入れるかも、大きなネックになると思われます。すなわち、これだけ、音楽を楽しむ環境が現在整ってはいても、ことタンゴについて言えば、いまだに暗黒時代であるといわざるを得ないのです。

このような状況下では、いかにタンゴを普及させるべきかを考えても、その方法はありませんといえぬのではないのでしょうか。何らかの方法で、音源を身近な存在にしなければ、これからタンゴを楽しみたいという人々にとって、楽しむ方法がないということになります。かといって、その音源を現タンゴファンに求めようとも、一般には、その方法も知らない・わからないという状況にあります。

このように考えると、まず、誰でもが、すばらしいタンゴの名曲や名演をすぐにアクセスできる環境をつくる、すなわち、タンゴ・アーカイブを作って、普遍的な曲や演奏ならば、誰でもがアクセスできるようにして、タンゴ普及の一端としたい、では誰がやるのか、これは、日本全国ネットをもち、識者も多い日本タンゴアカデミー（NTA）がそれを行わずして、誰がやるのかといわざるを得ないでしょう。

もちろん、そのためには、立ちどころ多くの障壁を乗り越える必要があります。著作権の問題、音源提供の問題、インターネットでアクセスできる環境作り、これらに要する費用調達、さらにはシステム維持管理など、また、文献や歌詞和訳等など多くの問題点をクリアしなければならないと思います。

しかし、タンゴ普及というタンゴファンのもうひとつのテーマを考えると、乗り越えなければならぬ障害ではないのでしょうか。

3. タンゴ・アーカイブを作ろう

タンゴをこれからも安定して聴ける環境とそれを支える愛好者の維持、増大を図る上で、代表的なタンゴ、そして著作権も切れ、いわば文化遺産としての位置づけを持つこれまでの名曲・名演を、タンゴファン、広くは音楽ファンに楽しんでもらうためには、それらの音源が、たとえばインターネットで、誰もが容易にアクセスできる環境づくりがまず必要です。

また、タンゴ各曲に付随する各種データも、そのタンゴを詳しく知り、聴き込む上では必要な情報であり、これもまた、音源と同様に、簡単にアクセスできるシステムが必要となります。

以下、それぞれにつき、筆者の考えを述べてみます。

3.1.音源・アーカイブ

まず第一に、タンゴ音源を、アーカイブ（文書館）化し、無料（または維持のための最小限の費用負担も可）でそれを利用するシステムを作る必要があります。音源は、著作権が有効なものとしてすでに切れているものがあり、ここで取り上げる音源は、後者の音源です。

幸いにして、タンゴの名曲名演といわれているものは、1960年以前のもものが多く存在し、SP盤であるために、音質にやや問題があるにせよ、歴史的、文化的な価値は十分に保たれています。これら音源（SP盤）は、現実には、国内タンゴファンが所有しており、ここに述べたタンゴ文化の保存・普及のため提供してもらえるかどうかの好意に依存するところが大ではありますが、この音源を、たとえばmp3やwav形式で保存することから始めます。

これらの音源は、比較的高齢者のファンが所有されているのが普通で、万一の場合、この貴重な音源が散逸、紛失することも考え合わせますと、あまり時間的に余裕があるとはいえないのが心配です。多大の労力と費用を投じてアルゼンチンから入手した貴重な音源であるため、SP盤というハードウェアはともかくとして、録音されている音源だけでも保存したいところです。

これまで、こうした音源は、篤志家のタンゴファンが復刻盤を出されることで普及されている曲も多いのですが、それに漏れている曲も多く、希少価値がある限り、できるだけ音源保存に努める必要があります。もちろん、アルゼンチン本国には、同等な音源があるでしょうが、まず、国内での音源を考えることが、費用、手間の点でも最善と思われます。この音源利用については、できうる限り、寄付の形がベストでしょうが、謝礼も考慮しなければならないでしょう。これは、どうしてもNTAでのある程度の子算処置が必要だと考えます。

なお、この音源利用には、著作権が切れていることが条件ですが、利用に対し、どのような法律上の制約があるのか、寡聞にして筆者はほとんど知識を持ち合わせていません。また、著作権の切れていない音源についても、その所有者の好意による提供が受けられる音源があるのかも不明ですが、もし、普及のための提供があり得るのであれば、ぜひその折衝を行って欲しいと思います。

提供された音源がアーカイブとして使用可能であれば、アーカイブ化につき、手順を作成し、その作業を会員諸氏のボランティアにお願いしなければなりません。そのための調査や事務処理等もまたボランティアにより行うこととなります。

こうして細部を検討しますと、実施すべき事柄が多くなりますが、幸い、会員数は増加していることでもありますので、可能な部分からの作業に取り掛かってはどうかと思います。この作業には、プレーヤーやアンプのほか、パソコンへの入力変換アダプタが必要になりますので、全会員へ依頼することはできないかと思いますが、これらの機材を所有している会員に、まずはボランティアをお願いすることになります。

もし、この活動を行うことになれば、プロジェクトチームを編成し、取り組むことが理想ですが、いかがでしょうか。また、理想に走らずとも、まずはボランティア活動的に、余力のある方々が時間と交通費を提供していただき、例えば都内のある場所に参集して、アーカイブ登録作業を行うことから始めるのもよいかと思います。理想を追わず、てみじかに行えることから着実に取り組めば、塵も積もればで、やがては登録される曲数も増え、また、その利用者も、漸次増えるのではないかと考えられます。

3.2.文献・アーカイブ

次にアーカイブ化の対象となるのは、タンゴにまつわる種々の文献です。

レコードやCD、カタログ、プログラムに始まり、新聞や雑誌の記事、書籍など、数多くの文書が、タンゴファンの本棚、レコード棚、机や引き出しの片隅に眠っているのではないのでしょうか。あるいは、コンサートで入手した貴重なサイン、アルゼンチン訪問時に入手した記事断片など、多くの文書がファンの手元にあります。現在は、こうした文献は容易に電子化し、圧縮ファイル化して、DVDやハードディスク、あるいはクラウドコンピューターへの保存が可能です。万一の消失に備え、バックアップ化も少ない費用で行えます。この登録作業も、前述のボランティア活動で行います。また、スペイン語や英語の文献は、これも可能な限り、ボランティア精神で取り組み、和訳の労力提供をいただける方々を募って和文に置き換えれば、ベストと言えます。

3.3.楽譜、歌詞、写真アーカイブ

楽譜、歌詞、写真の類も前項に準じます。

言語による文献と同じく、あるいはそれ以上に写真も個人的に所有され、いわば死蔵化しているものが多いと思われます。また楽譜や歌詞については、著作権切れのそれも、これから次第に多くなると思われます。一方、ピアノやギター、電子楽器など、個人的に楽しむ人たちも増加しています。こうした方々へのアーカイブされた楽譜提供もあってはいかがと思われます。

4. アーカイブの作成と普及

これらの文書をアーカイブ化する上で、まずは多くの原資料を電子化する労力が必要となります。

しかしながら、この労力も、我がタンゴアカデミーの会員にとっては大いなる味方となってくれます。大半の会員が、既に社会的貢献を終え、長年のタンゴへの情熱をこれからも燃やし続けたいと願っている人たちであり、タンゴを楽しみつつ、今後の継続、発展を夢見て、いささかでもアーカイブ化に貢献でき、かつ、そのアーカイブを大いに利用できることは、これ以上の喜びは、我々タンゴファンには出会えないのではないのでしょうか。

アーカイブの利用、普及については、一私案ですが、著作権なしの場合、基本は会員諸氏は必要経費の支払い程度の実費負担をお願いし、また会員外の方々にはネット販売による支払いと同額（基本は1曲あたり100円から200円程度）の負担をお願いしてはと思います。

5. おわりに

日本でタンゴが隆盛をみた1950-55年頃に青春を送り、その虜になった世代のオールドファンは、齢既に70歳以上、熱情を燃やして聴きこみ、また集めた音源や文献の数々も、こうしたファンの後期高齢化（いやな言葉ですが）に伴い、かつての情熱も次第に薄れ、かつ、収集してきた音源は散逸の一途を辿っています。

どのような希少価値のある音源も、タンゴに興味を寄せない一般の方々にとっては無用の長物か、場合によっては、ゴミ以下の存在でしかありません。

音そのものは、データ化、デジタル化により、品質をほぼ損なわず、長期間の保存は可能ですが、その媒体は劣化、あるいは破損の一步をたどります。これを阻止することは不可能です。

音にせよ、映像にせよ、財産として後世に残すべく、消失、散逸する前にデータ化して保存し後世に伝えることが現在に生きる者の義務であるとするなら、タンゴについても、私どもNTAメンバーの果たすべき義務だと思えます。

このアーカイブ化作業に取り組む過程で、必要となるデータ格納機器等の財産管理、あるいはアーカイブ音源頒布に関連する費用管理のため、場合によってはNTAの法人化も必要になるかもしれません。

いささか思い上がった意見を述べましたが、意を汲んでいただき、NTA役員の方々に対し、できるだけ早くタンゴアーカイブ化の実現に取り組んでいただきたいと思います。

おわり



《神戸発・上田・山本タンゴ写真館(11)》

—アストラ・ピアソラ・キンテート日本公演から—

＜1984年 大阪公演＞

写真・資料提供：上田 登氏、山本 雅生氏



ステージ



F. スアレス・パス



パブロ・シーグレレル (左) と A. ピアソラ



藤沢嵐子 (ゲスト歌手) と A. ピアソラ



エクトル・コンソレー



O.ロベス・ルイス (左 ギター)



ラウル・ラビエ



左から：山本雅生さん、宮本協和さん、^{やすかず}A. ピアソラ



P. シーグレ



A. ピアソラ

石島 識 (函館市) さん

聞き手 西川 薫

<アカデミー入会の頃>

西川 去る3月初旬のアカデミー“全国会員の集い”以来ですが、お元気で何よりです。今日は石島さんとタンゴの関わりについてお話を伺いますので宜しくお願い致します。

石島 いやいや、こちらこそ宜しくお願いします。

西川 貴方は当アカデミー発足当時の会員ですが、入会の経緯はどんなことで…

石島 後ほど触れますが自分の退職を一つの区切りとして記念コンサートを企画・開催しましたが、その準備段階で故大岩祥浩さんにお世話になった関係でアカデミー発足時に参加しました。

西川 そうでしたか、「全国会員の集い」にお見えでなかったことが過去に一度ありましたが、それ以外は皆勤です。遠方から毎回参加される熱心さには頭が下がります。

石島 タンゴ好きの同好の方々にお会いし、交流することは嬉しいです。設立第一回目の出席懇親会で亡くなったバンドネオンの池田光夫さんと脇田さん、西川さん達とタンゴ談義に花が咲き、閉会後に繰り出した銀座では、お店から「お客さん、もうカンバンです」と追い立てられるまで盛り上がりましたね。

後日池田さんからの手紙で、「タンゴ談義であれほど楽しかったことはなかった」と書いてありました。その後も出席を重ねるにつれ交歓する会員も増えてきて、それだけに参加することがいつも楽しみです。それと…その時期函館は寒いので南へ逃げるのも理由の一つです(笑い)。

西川 その上京中の忙しい日程の中、都内周辺



のタンゴ・ライブも楽しんでいらっしゃるんだ。まずそのバイタリティに脱帽です。では早速ですがタンゴとの出会いはどんなきっかけからでしょうか? 生い立ちを含めまして…

<生演奏でカルチャー・ショック>

石島 昭和11年函館生まれの函館育ちです。戦後、小学校6年生の頃からラジオから流れる多様な外国の音楽に興味を持ち始めましたが、そのうちに藤沢嵐子さんの歌声がどんどん紹介されるようになりタンゴ音楽が一番のお気に入りになりました。

それから数年後の昭和28年の春、当時高校3年でしたが、その頃は歌謡曲、ジャズ、ウエスタン、シャンソンなど何でもありの外来音楽の全盛期でした。

函館にもビッグバンドが続々とやって来ましたよ。ジョージ川口とビッグ・フォー、東京キューバン・ボーイズ、そして早川真平とオルケスタ・ティピカ東京(歌手:藤沢嵐子)は初めてライブで観るアルゼンチン・タンゴ、初めて目にするバンドネオン、あの歯切れの

よいリズムには興奮しました。

一日2回の入替え公演でしたから、なんとかもう一度観ようと多分トイレに隠れていたと思うんです。会場は今はありませんでしたが函館一の繁華街大門(だいもん)にあった“公楽劇場”でした。

入場料は確か300円と記憶しています。当時、公立高校のひと月の授業料は500円でしたから、この300円は高かったあ…その月の授業料を滞納したのは、言うまでもありません(笑い)。



後年、藤沢嵐子さんと(日比谷公会堂1991.4.16)

西川 とんでもない不良高校生だ。親にはどう言っ て繕ったんでしょう(笑い)。

ところで、貴方と知り合っ て驚きましたが、冒頭にお話がありましたお勤めの会社を定年退職するにあたり個人で実現させた「退職記念タンゴ・コンサート」ですが、そのことについてお話し願えますか？

<思い出作りのライブ企画>

石島 道南から北へ旭川や名寄など長い道北の生活を終え函館に帰ってきました。平成7年12月末に無事定年退職、自宅の新築も完成、次は夢にまで見た退職記念コンサートを企画

しました。

阿保郁夫さんとバンドネオンの京谷弘司さんのファンだったので、この二人を呼ぼうと…勤めていた元の職場の仲間や地元のタンゴの先輩達の協力を得ましたので。

西川 動機は何だったんですか。

石島 長い間の夢です。それのみです。で、東京在住の高校時代の同級生に電話したところ、彼の仲間が自分にとっては雲の上の人であった大岩祥浩さんへ「函館にタンゴの馬鹿がいるから宜しく」と相談され、後日大岩さんから直接アドバイスをいただいたことで、阿保さんとトントン拍子に交渉が進みました。

その頃、我々夫婦は熟年大学に通っていました。主催者は高校の同期生で、塾長は函館の名士である函館文化会会長の関輝夫先生でした。5月の開講セレモニーで司会者から受講者全員にその年の目標宣言を促され、自分は「9月13日の金曜日に函館ロイヤルホテルで退職記念コンサートを開催しますので、ご協力をお願いします」と発言してしまいました。

関先生はその場で、「その演奏メンバーは十数年前に招聘したことがあり、五島軒(函館で著名な洋食店)でディナー&ライブを開催したが好評だったので今回の企画には是非協力しましょう」とのこと、大変力強く背中を押して下さいました。

西川 でも、東京から遠い函館まで呼ぶとなるとギャラ以外の諸費用を含めると相当な負担になったでしょうに。退職金をつぎ込んで？

石島 最初はそれなりの出費を覚悟していました。

退職金をつぎ込みましたが、それでも予定していた金額より少なかったです。全部精算するまでにひと月かかりましたが、長い間の夢が叶ったのですからこんな嬉しいことはないですよ。演奏家から、また会場に足を運んでくれた大勢のタンゴ・ファンからも手紙を頂きました。タンゴの演奏会を定期的で開催してくれと。これが縁で定例コンサートにつながりました。

西川 よく奥様が承知したことで…

石島 女房は反対しませんでしたよ、自分で働いたお金だからと。ただし、お客さんが集まらなかったら一流の演奏家を招いて失礼になる、と。ドキッとしましたねえ（笑い）。

西川 新聞に採り上げられたことが潜在的なタンゴ・ファンを惹きつけたのでしょうか、大したものですね。それにしても素晴らしい奥さんですね。



北海道新聞 1996.8.20

石島 ウーン、当日会場は満席で、オープニングの「淡き光に」が流れた時は涙で目が曇りましたよ。

西川 その後もタンゴ・クリスタルや古橋ユキさんらを招聘するなど、個人ではとても不可能と思われるような実り多い経験をされていますね。

さて60年以上に亘ってタンゴと共に歩んで来られたわけですが、こと演奏や曲に関して好んで聴かれる傾向はどのようなものでしょうか？

＜古典もピアソラも国内演奏家も＞

石島 ラジオ番組中心の音楽少年でタンゴも聴

いていましたが、昭和28年、オルケスタ・ティピカ東京のライブ演奏を聴いて一挙に火がついた訳です。SPからLP時代になる時期でした。

その後ダリエンソ、デイ・サルリ、そしてプグリエーセの昭和31年にエンジェルから発売された0W-1005 (LA YUMBA、MALA JUNTA他) など当初はなかなか買えませんでした。

西川 8曲入りで1,500円の時代でしたから（ため息）…やはり古いものがお好きで…

石島 古典の方が多いです。でもピアソラも聴きます。ESCUALO（鮫）とMILONGA DEL ÁNGEL（天使のミロンガ）を対比して聴くと、彼の感性や音楽性が解るような気がします。

ああそうだ、日本のアーティストの音源は殆ど蒐集しております。思い出しては聴いておりますよ。

西川 それは凄い！ 先ほどもちょっと触れましたがそのことに関連して、石島さんは上京すると必ず生演奏、しかも一晩でハシゴすることがあったりで、国内の演奏家との交流も幅広いですね。

石島 いちいち名前は挙げませんが、コンサートを企画した後は来函して頂くことが縁で親しくさせて頂いている方が大勢出来ましたよ。

西川 いい財産ですね。では陳腐な質問になりますが、特に大切にしているレコードとか、思い出の一枚とかは？

石島 一枚だけと言われれば、やはり東芝エンジェル0W-1005の「プグリエーセ傑作集」になります。「ラ・ジュンバ」、このリズム何だっ？と衝撃を受けた記憶があります。

西川 先輩方のお話で想像するのですが、その第一集は圧倒的に好評だったそうですね。

さあ、今、タンゴ・ダンスがブームで当アカデミーでも過去2回ミロンガ・パーティを開催していますが、ご自身は踊られますか？ 脚光を浴びているバイレについて感じるところがありませんか…

石島 実は7～8年前にダンス・シューズをオ

ーダーし、レッスンを受けたことがあります
がとうとうものになりませんでした。落第で
す。



ANGEL OW-1005
「オスバルド・プグリエーセ傑作第1集」

西川 ダンスをなさる方のお話では、“タンゴ・
バイレは難しく考えず基本的なステップを二
つ三つ覚えるだけで、タンゴを聴きながら身
体で感情表現するという楽しみがある”、と
おっしゃいます。すでに入門編・初級編は卒
業しているのでしょうかから再チャレンジし
てはいかがですか。

石島 ウーン、自分のことはさておいて、バイ
レは今盛んですが大変良いことです。バイレ
が盛んになるとバック・バンドが必要です。
そうするとトータル的にタンゴ人口が増えま
す。タンゴ演奏を目指す若いミュージシャン
が育ち、全体的に技術もより向上するでし
ょうし。

タンゴ・ワセダOBのロス・ポジートスなど、
バック・バンドで活躍しておりますね。

西川 ええ、若手が成長していますね。アカデ
ミーが試みた過去2回のミロンガも古橋ユキ
さんのクアルテート、平田耕治さんのガンバ
タンゴ、小松真知子さんのタンゴ・クリスタ
ルが出演するという豪華なもので、好意的な
評価を受けております。今後も継続する予定
ですが、若手演奏家をどんどん招聘すること

も視野に入れていきたいです。

では、これからのタンゴはどのような方向
に向かっていくとお考えでしょうか？



退職記念ディナーコンサート (1996.9.13)

<日本のタンゴの向かう先は…>

石島 解りません。だけど現在日本の若いアー
ティストが活躍しておりますね。技術的にも
素晴らしい演奏をしています。その中に何か
持っている人、出てくるかも？ (ニュー・タ
ンゴ?) 20年後一世を風靡するようなことが、
と期待しています。

西川 色々有り難うございました。最後にアカ
デミーに対する意見・要望などがありましたら
どうぞ。

石島 このたびの会員の集いに出席して感じた
ことは自分も含めて会員の高齢化ですね。若
い世代のタンゴ・ファン、それから演奏家
を含めどう取り組むかが課題でしょう。若い
世代と我々とはものの捉え方、思考も違うだ
ろうし…でも最近「全国会員の集い」に国内
のアーティストが毎回出演、地方からの参加
者にとっては大変喜ばしいことです。アカデ
ミーはこれからも若い世代（アーティストを
含む）を応援していく必要があるのでは？

西川 そうですね、今、当会の世話役も同様の
考えで一歩一歩ですが行動に移しているところ
です。今日は忙しいところ時間を頂戴致し
まして有り難うございました。

(2013.5.28)

日本初上陸のタンゴ・バンド

草創期の日本のタンゴ界とパリムーラン・ルージュ楽員



島崎 長次郎



パリ・ムーラン・ルージュ楽団（左から二人目がモーリス・デュフレ）

わが国にはじめてタンゴが紹介されたのは何時ごろのことだったのだろうか。また、それはどんな経路でおこなわれたのだったろうか。これはファンにとって極めて興味深いことといえよう。

かねていわれてきたように、その先鞭をつけたのは“バロン・メガタ”こと目賀田綱美男爵とされる。氏は1920年から同26年にわたりパリに遊学されてのちに帰国、パリ仕込みのタンゴの踊りを、持ち帰ったレコードとともに披露し、その頃に世界を席捲しつつあったタンゴの何たるかを、はじめてわが国の人々に知ら

しめた。したがって、氏はわが国のタンゴの黎明期にあってその扉を開けた最大の功労者だったといふべきであろう。

しかし、それはシビアにみると上流階級のごく一部の人々に知られたに過ぎず、広く一般に認識されるにはもう一つ違った媒体（メディア）が必要だった。それがレコードだ。昭和に入った直後のわが国では、昭和2年5月の日本ポリドール蓄音器商会を皮切りに、同9月の日本ビクター蓄音器会社、翌3年1月の日本コロムビア蓄音器株式会社、これらが相次いで外国資本との提携で創業すると同時に、まずはヨーロッパにおけるタンゴがリリースされ、これを追うように本場のアルゼンチン・タンゴが徐々に発売され、人々の関心は次第に高まった。ときあたかも画期的な電気式録音方式が採用され、ここでレコード産業は大きな躍進期を迎えることになった。そして、昭和5年、こうした時代を背景に目賀田男爵と親交のあった音楽評論家の森潤三郎が「アルゼンチン・タンゴの踊り方」を出版し、さらに目賀田と森のコンビでレコード会社に発売のアドバイスを行うなどし、タンゴの認知度をさらに高めた。

ところで、これに対しタンゴの楽団活動の最初期はどんな風だったのだろうか。このあたりは故人となった畏友の蟹江丈夫氏の得意の分野で、かつて中南米音楽誌の「タンゴ・エン・ハボン」をはじめ当機関誌などいろいろと述べてこられた。同氏によると日本で最初にタンゴ演奏が行われたのは昭和5年で、東京の九段下にあった「九段ダンス・ホール」に出演していたサロン・アンサンブル・スタイルの楽団だという。だが、実はその楽団の名称もメンバーも不明のままなのが惜しまれる。多分一般のサロン風な楽団が、必要に迫られ見よう見まねで片手間に演奏したものと思われるが…。

未曾有の災害をもたらした関東大震災（1923年）を乗り越え、時代が昭和へ変わると同時に、文化面でもさまざまな面で大きな変化が見られるようになった。まずはラジオ放送が本格化し、映画にトーキーの導入が行われ、レコード界に電気式録音が採用されるなど、急激な発展が人々の生活や考え方を大きく変えてきた。音楽にかかわる面でさらに目立つ現象の一つが、相次ぐダンス・ホールの開設だった。ここで求められるものといえば、まずレコードであるが、やはり究極はナマの演奏ということになり、ジャズとともにタンゴの楽団の需要も俄かに高まり、次第にその活躍の場をひろげていったといえる。

一説によると、昭和6年10月にチェロの松原興輔を中心にした楽団が、東京の日本橋にあった日米ダンス・ホールに出演してタンゴを演奏していた、ともいわれているし、その翌年の昭和7年、これはハッキリしていて新宿の「帝都ダンス・ホール」に出演していたテイト・モンパレス・タンゴ・アンサンブルが「東方の恋」や「蝶々さん」などの6曲をテイチクに録音している。メンバーは、バイオリンの櫻井潔と吉野章、チェロの島田逸平、ベースの浅野太郎、ドラムとボーカルにディック・ミネという顔ぶれだったというが、タンゴのほかにマズルカやパソドブレなども含み、残念ながら録音も悪く、タンゴの演奏もまだまだ稚拙だったといわざるを得ない。この頃の演奏で本格的だったのは、やや後の昭和10年に同じくテイチクから発売になった高橋孝太郎（Vi）指揮のオルケスタ・ロサで、「S.O.S」などはフランシスコ・カナロ楽団の演奏を下敷きにしてはいえ、今聴いても心躍るほどにメリハリの効いた演奏を展開し、短時間のうちによくぞこれほどに本場のタンゴ演奏の骨法を身につけたもの、とあらためて“日本人の器用さ”に驚かされる。



いづれにしても、わが国でのタンゴの演奏は、昭和も一桁の中ごろから後半にかけて、ダンス・ホールを舞台に徐々に行われはじめ、その後間もなく急激に人気上昇の道をたどり、注目の音楽「タンゴ」に成長していった、といえよう。

さて、こうしたわが国のタンゴの動向に大きな刺激をあたえ、ブームの火付け役をしたのが、実は外国からきた楽団だったことをご存知だろうか。それは昭和7（1932）年のことで、やってきたのは「巴里ムーラン・ルージュ楽員」と名乗るグループだ。これは日本に上陸したはじめてのタンゴ・バンドだった。

この楽団は、赤坂の溜池に昭和4年に開設されたダンス・ホール「フロリダ」が、フランスから招聘したもので、昭和7年の3月に来日し、



▲後期のサクライ・イス・オルケスタ

翌々年9月の帰国までの2年6カ月の間、「フロリダ」をメインに活動する一方、ほかに10レーベルにも届く多くのレコード会社で録音を行い、わが国におけるタンゴの普及に計り知れない足跡をしるした。「フロリダ」の津田又太郎支配人の言によると、このダンス・ホールの命名は目賀田男爵によるもので、当時のパリ一流のダンス・ホール・フロリダにあやかってその名を推奨されたとし、東京でも最も広いホールと洗練された諸施設を整え、途中からはジャズとタンゴの楽団を交互に出演させて人気のスポットに築き上げた、といわれている。こうした関わりや流れからみると、好評を博したこの「バリムーラン・ルージュ楽員」の招聘も、パリ帰りの目賀田男爵の推奨によるものと考えてまず間違いないだろう。



当初のメンバーは次の4名になっている。

- | | |
|---------------------|-----------|
| ◇ ギター／バンジョー／楽長 | ジェーン・ジェラル |
| ◇ バイオリン／ホルネット・バイオリン | シャル・パクナデル |
| ◇ アコーディオン | モーリス・デュフル |
| ◇ 打楽器／バンドネオン | ガストン・トーマ |

以上は、日本コロムビアの解説書（昭和7年10月、26981＝「日本橋から」「丘を越えて」）のクレジットだが、この直後にバンドネオンのノビッキーが加わり、さらにピアノのエルブロックが参加したりしてメンバーの顔ぶれも少し変わった。ただし、演奏を聴いているかぎり、あくまでも演奏の主軸はバイオリン（C.Paknadel）とアコーディオン（M.Dufor）で、この両者によって楽団のもつ得もいわれぬノスタルジックなサウンドが紡ぎだされている。

後段のリストにより、手元のレコードでその概要を見ていただくが、タンゴを売り物にしているもの、アルゼンチン・タンゴは僅か3曲で、他は古賀政男の当時のヒット作「酒は涙か溜息か」や「恋ごころ」などのほか、お馴染みの「叱られて」とか「花嫁人形」などといった抒情の名作のタンゴ化を中心に、ワルツやルンバなども加え、あくまでもダンス・ミュージックのセンで押し通している。これは時代の流れやその動向を読んだレコード会社の方針で、本来のタンゴはさておき、当時はわが国の流行歌の黄金期だったため、それを注目のダンス・ミュージック、とりわけタンゴ



にアレンジして聴かせることで幅広い人気を引き出そうとしたのであろう。お馴染みのメロディーのタンゴ化は、多くの共感を呼び、その後のタンゴ好きの日本人を育てるうえで、ともかく大きな役割を果たしたといえる。

その頃のダンス・ホールは、震災前から続く鶴見の「花月園」を筆頭に、首都圏だけを見ても、昭和2年にオープンした日本橋の「東京舞踏研究所（後の日米ダンスホール）」ほか、八丁堀の「国華ダンス・ホール」、人形町の「ユニオン・ダンス・ホール」、そして前出の「九段ダンス・ホール」や「帝都ダンス・ホール」など、まさにダンス花盛りという状況になった。そして、これに伍してとりわけ“高級”を売り物にして注目されたのが、赤坂の溜池の「フロリダ」だった。ジャズを含めたハイカラな音楽の広場であると同時に、ここはバリムールン・ルージュ楽員の活躍を通じ、タンゴにとっても忘れたがたい殿堂であり、かけがえのない発信基地だったことを、あらためて銘記しておくべきであろう。

このバリムールン・ルージュ楽員の帰国後、「フロリダ」はバイオリンの名手、櫻井潔の楽団をその後釜に据え、さらにタンゴ演奏の継続と発展をはかったのでも分かる通り、その後の日本の強固なタンゴの活動路線は、まさにここから始まったといえるからだ。



ところで、録音された貴重なアルゼンチン・タンゴとは、この中の次の3枚だ。

日本ビクター 52450 ママ＝銀座タンゴ（ママ、私恋人が欲しいの）

リーガル 67270 ラ・クンパルシータ（裏面:恋ごころ＝古賀政男作曲のタンゴ）

ニットー 5767 左様なら！（セ・バ・ラ・ビーダ＝命短し）歌：C.パクナデル

この中では、(2)のラ・クンパルシータの出来がよく、この楽団の全レコードの中でも飛びきりの傑作で、録音から80年たった今でも、まったく色褪せず、素朴な哀愁味に溢れ、聴くたびに胸を熱くしてやまない。昭和の時代が遺した忘れがたいラ・クンパルシータだ。

巴里ムーラン・ルージュのレコード概要

(「フロリダ・アルゼンチン・タンゴ・バンド」を含む)

■ [Polydor]

- | | | |
|---------|----------------|--------------|
| 1 3 0 6 | 酋長の娘 (T) | ／赤い翼 (0s) |
| 1 3 7 7 | じっと見つめたその瞳 (T) | ／モダン籠の鳥 (0s) |

■ [King (Polydor)]

- | | | |
|---------|--------|--------|
| K 1 9 8 | マドロス小唄 | ／あすは上陸 |
|---------|--------|--------|

■ [Columbia]

- | | | |
|---------------|--------------------|-------------------------------|
| 2 6 9 6 1 | 影を慕いて (W) | ／酒は涙か溜め息か (T) |
| 2 6 9 6 2 | 私此の頃憂鬱よ (T) | ／美しの宵 (W) |
| 2 6 9 8 1 | 丘を越えて (0s) | ／日本橋から (T) |
| 2 6 9 8 2 | 東京タンゴ (T) | ／浅草行進曲 (T) |
| 2 7 0 3 0 | 荒城の月 (W) | ／ザッツオーケー (T) |
| 2 7 0 4 3 | 唐人お吉 (T) | ／君恋し (Ft) |
| 2 7 1 2 2 | 草津節 (Ft) | ／佐渡おけさ (Ft) |
| × 2 7 1 4 8 | 恋の大阪 (奥山貞吉) | ／恋の大阪 (佐々紅華) = 関種子 |
| 2 7 1 4 9 | 水の京都 (Ft) | ／ (同曲. 喜代三) |
| 2 7 1 5 0 | 美わしの神戸 (T) | ／ (同曲. 中野忠晴 = コロムビア・オーケストラ) |
| 2 7 1 5 9 | あけみの唄 (W) | ／赤い唇 (Ft) |
| 2 7 1 9 3 | 嘆きの夜曲 (Ft) | ／青春図会 (0w) |
| × 2 7 2 5 6 | 独身者タンゴ (0s) | ／落下流石 (T) |
| × 2 7 2 8 2 | 大連シャンソン (0s) | ／古さと (Ft) |
| 2 7 2 9 6 | 祇園小唄 (T) | ／スキーの唄 (Ft) |
| × 2 7 3 2 0 | ヨーヨー時代 = 淡谷のり子 | ／恋ごころ (T) |
| 2 7 4 7 0 | 乙女心 (T) | ／花嫁人形 (T) |
| × 2 7 6 5 1 * | 夢の恋路 = 中野忠晴 | ／エル・アルパソン (T) |
| 2 7 6 8 9 * | 踊ろよアミー (Ft) = 明本京静 | ／おゝ誰故に (Pd) = 明本京静 |
| 2 7 6 9 2 * | 歓喜の歌 (Ts) | ／恋の大島 (T) |
| 2 7 7 2 2 * | 花売り娘 (T) = (川畑文子) | ／ (街の灯. 淡谷のり子 = コロムビア・オーケストラ) |
| 2 7 7 5 1 * | 十九の春 (Ft) | ／希望の首都 (0s) |
| 2 7 8 2 8 * | 旅がらす (W) | ／蒲田行進曲 (0s) |
| × 2 7 9 1 8 | …………… | ／波濤を越えて (0s) |
| 2 8 0 1 1 | かっぽれ (Ft) | ／鴨緑江節 (T) |

■ [Regal]

- | | | |
|-----------|------------------|---------------------|
| 6 7 2 7 0 | 恋ごころ(T) | ／ラ・クンパルシータ |
| 6 7 3 7 3 | 花売り娘(T) = (川畑文子) | ／ジョニー = (川畑とジャズバンド) |

■ [Victor]

- | | | |
|-----------|-------------------|---------------------|
| 5 2 4 4 7 | 恋の鳥(W) | ／別れの歌(Ft) |
| 5 1 4 4 8 | 天国に結ぶ戀(V) | ／花は咲くのに(T) |
| 5 2 4 4 9 | 東京行進曲・銀座の柳(Ft) | ／君恋し・波浮の港(T-V) |
| 5 2 4 5 0 | 夜の酒場に(V) | ／ママ (銀座タンゴ) |
| 5 2 5 2 4 | たそがれて(V) = (四家文子) | ／どうせこの世は(T) = (徳山環) |

■ [Nitto]

- | | | |
|-----------|-------------------|------------|
| S 1 4 1 3 | 宵待草(W) | ／叱られて(T) |
| S 1 4 1 5 | 庭の千草(W) | ／埴生の宿(W) |
| 5 7 4 9 | かえらぬ恋(W) = (川路美子) | ／嘆きの丘(T) |
| 5 7 6 3 | 巴里の思い出[1] | ／巴里の思い出[2] |
| 5 7 6 7 | 宵待草(W) | ／左様なら！(T) |
| 5 9 1 2 | Old Folks at Home | ／Romance |

■ [Teichiku]

- | | | |
|-----------|------------|----------------|
| 1 5 0 6 9 | サーカスの唄(Ft) | ／ほんとうにそうなら(Ru) |
| 1 5 1 1 0 | 日本橋から(Ru) | ／果てなき旅(Ru) |
| 5 0 5 0 0 | 男 心(T) | ／国境越えて(Ft) |
| 0 2 3 1 | 丘を越えて(Ft) | ／桃色のタンゴ(T) |
| 0 2 3 2 | 影を慕いて(W) | ／酒は涙か溜め息か(T) |
| 1 2 7 4 | 〃 〃 | ／ 〃 〃 |
| 0 2 6 0 | お江戸日本橋(Ru) | ／私此の頃憂鬱よ(T) |

■ [Parlophoe]

- | | | |
|---------|----------|---------------------|
| 1 9 7 3 | 幌馬車の唄(W) | ／安來節(Ft) |
| 1 9 9 1 | 遙かな想い(T) | ／霧の波止場(Ft) = (渡辺光子) |

■ [Augon]

- | | | |
|---------|------------|---------------------------|
| A - 2 | 銀座の柳(T) | ／佐渡おけさ(Ft) |
| A - 1 5 | マドロスの恋(0s) | ／(靴屋の大将=Y&Y ジャズ・バンド) (Ft) |

なお、当楽団は2年6カ月滞在の後の昭和9年の秋に帰国するが、アコーディオンのモーリス・デュフルは単身で残り、録音活動などを行ない、数枚のソロ・レコードを残した。その中の1曲にオスバルド・フレセドが1930年に発表した「Por Qué=なぜ？」がある。No. は日本ビクター5 3 6 2 5。

以 上

フランシスコ・ガルシーア・ヒメーネス Francisco García Jiménez

本筋と無関係だが、最初にお断り。——彼のように3つの名前が並んでいたら、スペイン語では最初が個人名、2番目が父の姓、3番目が母の姓というのが通例（例外はあるが）。「ガルシーア・ヒメーネス」でひとつの名字なので、省略してはいけない。国によっては「ガルシーア・J」としていた。でも近年は、スペイン語各国の出版物でも、3番目をラスト・ネームと割り切って「F・G・ヒメーネス」とすることも少なくない。この記事も、彼をヒメーネスとだけ呼ばせていただく。

ヒメーネスは、1899年にブエノスアイレスに生まれた。いわゆる中流家庭の文学少年だった

のだろう、ふつうに会社員となりながら、10代で雑誌に詩を投稿、1928年からコメディの台本作家、ほどなく小説なども雑誌に掲載されるようになった。ただし、文筆では食べられないので、安定した会社づとめ（一般事務）はかなり長くつづけていたと思われる。

大衆演劇と関連したことで、タンゴとの結びつきも深まり、ヴァイオリン奏者のラファエル・トゥエゴルス Rafael Tugols (1889 - 1960) と仲良しになった。1920年に、トゥエゴルスは、新作のタンゴ『銀狐 Zorro gris』(タイトルはもう決まっていた)に歌詞を付けてくれと、彼のグループが演奏しているカフェに、ヒメーネスを呼んだ。当時は、著作権印税のシステムはなかったので、作曲家は出版社に曲を売って、そこからお金をもらっていた。ただし作者に無断の海賊出版がはびこっていた。歌詞付きの出版なら、それが正規のものだと、楽譜を買う人たちもわかる。

ヒメーネスは、作詞をしたことがないシロウトだが、トゥエゴルスは「この青年なら書ける」と見込んだのだろう（ほかに書く人が見つからなかったというのが真相かもしれないが）。この曲はすでに演奏で人気があって、出演カフェには毎晩、海賊出版社にやとわれた音楽家がやってきて、隅のほうでセッセと演奏をコピーして楽譜に書いていたそうだ。この音楽泥棒を罰する法律はなかった。早く歌詞付きの楽譜を出版しなければ！……

ヒメーネスは歌詞が書ける自信はなかったが、トゥエゴルスのたつての頼みに、がんばって、2～3日で歌詞をつけた。

“Cuántas noches fatídicas de vicio / tus ilusiones dulces de mujer, /



como las rosas de una loca orgía / les deshojaste en el cabaret. //
Y tras la farsa del amor mentido / al alejarte del Armenonville, //
era el intenso frío de tu alma / lo que abrigabas con tu zorro gris". //

(まがまがしい悪徳の夜ごと、女であるきみの甘美な幻影の数々を、狂おしい饗宴のバラの花びらのように、きみはキャバレーで散らしてしまった。そして、偽りの愛の道化芝居の終わった後、《アルメノンビル》の店から遠ざかっていくきみの冷え切った魂を、きみは銀狐でくるんでいたのだ)

演奏だけで人気があった曲だが、歌手カルロス・ガルデール Carlos Gardel (1900 - 1935) が録音してくれた。ガルデールは、スタジオにヒメネスを呼んで、歌って聴かせて、「こんな解釈表現でいいかな?」と意見を求めてくれた。新米作詞家ヒメネスは大感激! ガルデールは「まがまがしい fatídico」などの凝ったことばづかいには苦笑していたそう。でも直さなかった。

この後、ヒメネスは数々の一流音楽家の曲に作詞して(つねに音楽先行)最高クラスの作詞家の評価を得た。なかでも、1923年からの、バンドネオン奏者アンセルモ・アイエータ Anselmo Aieta (1896 - 1964) との共作に人気曲が多い(音楽がいいからね、ハハハ)。わたしがいちばん好きなのは、1926年の『行列を追って Siga el curso』だ。その繰り返し部分の歌詞は――

"Decime quién sos vos, / decime dónde vas, / alegre mascarita / que me gritas al pasar: /
-¿Qué hacés? ¿Me conocés? / Adiós... Adiós... Adiós... /
¡Yo soy la misteriosa / mujercita que buscás! /
-¡Sacate el antifaz! / ¡Te quiero conocer! / Tus ojos, por el curso, / va buscando mi ansiedad. /
¡Tu risa me hace mal! / Mostrate como sos. / ¡Detrás de tus desvíos / todo el año es Carnavall!" //

(きみが誰だか教えておくれ、どこへ行くのか教えておくれ。楽しげな仮面のむすめよ、きみは通り過ぎながらほくに叫ぶ――「何してるの? わたしを知ってる? さよなら、さよなら。わたしは、あなたが探してる神秘の女」仮面を取っておくれ、きみを知りたいんだ! きみの両目は、パレードの中を、ほくのときめく思いを探して行く。きみの笑い声はほくを病気にする! きみの素顔を見せてくれ。きみの乱れ歩きを追っていれば、1年じゅうがカーニバル!)

ヒメネスにはブエノスアイレスやモンテビデオの地方色はまったくない、純粋にセンチメンタルな、淡い失恋の歌詞もあって、アイエータ作曲『あなたのキスはわたしのものだった Tus besos fueron míos』(26年)ほかの曲が、いつの時代も少数だが根強いファンを持っている。

彼は、作曲者に頼まれて作詞したので、無理に歌詞をはめこんだ、形は整っているけれど、美辞麗句のみで内容の乏しい曲もかなり多くある。歌詞の付けようがなさそうな曲に、まるでアクロバット芸人のような技巧でことばを乗せて、成功した例に、やはりアイエータ作曲の、タンゴ『迷える魂 Alma en pena』(28年)、ワルツ『白い小鳩 Palomita blanca』(29年)がある。

後年は、長くSADAIC(サダイク=アルゼンチン音楽作詞作曲家協会)につとめていた。広く知られた曲でいちばん新しいのは、ホセ・バツソ José Basso (1919 - 93) 作曲『ロシクレール(黎明) Rocicler』。1983年没。なお、彼は、後年は作詞よりタンゴ関係の著述の仕事の主にしてしたが、これについてはわたしは反感を持っているので、ここでは触れないことにする。

ガビーノ・コーリア・ペニャローサ Gabino Coria Peñaloza

この人を「タンゴ作詞家」と分類するのは、ちょっと見当違いだし、本人にも失礼だろう。

でも、世界でもっとも有名なタンゴ歌曲のひとつ『カミニート（小道）Caminito』の作詞者——これ1曲だけでもタンゴ作詞家の最高の存在のひとりだと言えるのでは？

ペニャローサは、1881年にアルゼンチン北西部のメンドーサ州で生まれ、父方の実家があるサンルイス州で育ったらしい。ともに「クージョ地方」という固有の文化圏・行政区分に属す土地だ。子どものころから文学、とくに詩を愛好し、15才のときから首都ブエノスアイレスに出てきて、雑誌に詩を寄稿する文筆生活(?)をはじめた。漫画も入っているような大衆誌でも、ロマンティックな詩は、読者にたいへん喜ばれていた。とはいえ、採用されて雑誌に掲載されても原稿料は安かったろうし、最初のうちは、母親の実家からの仕送りでくらしていた。彼の母方は、アルゼンチン近代史の地方的英雄の血をひく名家で、経済的ゆとりがあったようだ。



やがて首都の文学・芸術界の第一線の人たちと交際するようになり、画家キンケーラ・マルティーン Quinquela Martín の紹介で、彼の親友だったタンゴ作曲家フワン・デ・ディオス・フィリベルト Juan de Dios Filiberto (1885 - 1964) と知り合った。1920年に、フィリベルトの既成の2曲に歌詞を付けたのが、タンゴ作詞家としての初仕事である。2曲ともカルロス・ガルデルが録音した（彼は結局、ペニャローサ作詞のタンゴ7曲、サンバ1曲を録音した）。

そのうちの1曲『白いスカーフ El pañuelito』は、大草原の恋愛ドラマをうたった歌詞で、今日も愛されている。作曲者フィリベルトは、大草原のイメージはまったく関係なく、メロディを作っていたのだが……きれいに、とても上手に書かれた歌詞ですね。

ここで、話をもっと前に戻そう。

ペニャローサが、20才になったばかりのころ、ブエノスアイレスに住みながら、故郷の地方でも父親の仕事（商人？）がらみで旅をしていたのだが、ラ・リオハ州オルタという町に、かなり長く滞在したことがある。ここは母方の実家があるところ。雨季の出水で、数ヶ月にわたって交通が遮断され（交通機関はラバだった）、足止めされてしまっていたのだ。そのとき、ピアノの上手な少女マリア（本名は今日に至るまで秘められている）と恋に落ちた。

水が引いて、ペニャローサは「すぐ帰ってくるから、結婚しよう」と堅く約束して、この町を離れた。しかし若さゆえの愚かさ——この町に戻ってきたのは1年あまり後になってしまった。彼女はもういなかった。泣きながら、どこかへ行ってしまったとのこと。実はペニャローサの子を宿していたので、その町にはいられなかったのだろう。未婚の母はありえない時代、しかも封建的な、いなかの町だ（ペニャローサは、彼女にも、生まれたという息子にも、一生会えなかった）。ずっと時代が後になるが、スペインの詩人ロルカが書いた『血の婚礼』などの戯曲と似た世界だ。そのせいか、ペニャローサは、ロルカのファンになり、後にできた息子に、ロルカの名前をとってフェデリーコと命名している。

彼女を失って、ペニャローサは泣きながら詩を書いた（1903年とのこと）。小道の風景などまった

く実際のままだ。

*“Caminito que el tiempo ha borrado, / que juntos un día nos viste pasar, /
he venido por última vez, / he venido a contarte mi mal. /
Caminito que entonces estabas / bordado de trébol y juncos en flor, /
una sombra ya pronto serás, / una sombra lo mismo que yo. //
Desde que se fue / triste vivo yo, / caminito amigo, / yo también me voy. /
Desde que se fue / nunca más volvió. / Seguiré sus pasos... / Caminito, adiós” .*

（時が消してしまった小道、おまえは、あの日、わたしたちが通るのを見ていた。わたしがここへ来るのは、これが最後。わたしは、自らの不幸を語るために、おまえのところに来た。

小道、あのときおまえは、クローバーと花ざかりのフンコ（い草の仲間。細い葉の茂みにとても小さな白い花を咲かせる）に刺繍（ししゅう）されていた。わたしは、もうすぐ、ひとつの影になるだろう、おまえと同じ、ひとつの影に。

あのひとが行ってしまってから、悲しく生きるわたし。わが友、小道、わたしもまた行ってしまおう。あのひとは行ってしまってから、もう帰ってはこなかった。わたしも、あのひとの足跡を追っていこう……小道よ、さようなら）

さて、1926年のカーニバルに、ブエノスアイレス市主催の「民謡コンクール」が開催されることになった。フィリベルトは、彼が生まれ育ったブエノスアイレスの場末、ラボーカ地区の貨物列車引込み線が廃止された後に、自然に人の通り道になっていた場所を思い浮かべて（本人の言による。真偽は不明）メロディをつくり、出品することにした。ペニャローサが、23年前に書いた上記の詩を朗読したら、フィリベルトは大感激！ ぜひ使いたいが、メロディの寸法に合わせて、少し書き直してくれと頼んだ。ペニャローサは、絶対に書き直しは拒否したので、仕方なくフィリベルトのほうで、メロディを作り直した。

コンクールでは優勝したが、（たぶん国民歌曲みたいなものを求めていた）聴衆からは悪評をこうむった。どう聴いても民謡じゃない、音楽はタンゴだものね！ 前奏・間奏は、相当に場末っぽい。タンゴが一般社会からは根強い偏見を持たれていた時代だった。

でも、ほどなく歌手イグナーシオ・コルシーニ Ignacio Corsini (1891 - 1967) が気に入って、主演するサイネーテ（大衆演劇）の中でうたったことで、大好評。……やがては世界一有名なタンゴのひとつになったわけだが、そのへんはこの記事の範囲を超えるので省略しよう。

ペニャローサは、その後もフィリベルト作曲のいくつかのタンゴに作詞した。また、1929年には、『マルガリータス（マーガレットの花たち）Margaritas』という曲が、第1回タンゴ歌曲コンクールで名誉大賞を受けた。作曲者フワン・カルロス・ゴンサーレス・モレーノ Juan Carlos González Moreno は、パラグアイ大使の子息で、市電の事故で両足切断されていた、趣味の音楽家だそうだ。

この曲を最後に、ペニャローサは、奥さんとともに、ラ・リオハ州チレシートに引退し、タンゴとも作詞ともまったく関係ない悠々自適の後半生をおくった。1975年、95才で没。

ホセー・ゴンサーレス・カスティージョ José González Castillo

1885年生まれ。この人は、アルゼンチン演劇史のもっとも重要な人物のひとりで、劇作家、劇団監督・演出家として大きな足跡を残している。タンゴ作詞は、副業だった（手抜きをしたわけではない

が)。1910年代には、持ち前の反骨精神から、チリに亡命して極貧生活を送ったりしていたが、1910年代には、アルゼンチンの民衆の伝統、権威に屈しないガウチョの精神をたたえる（政治主張を超えた）劇作・上演で大衆から支持されていた。1915年に、ガウチョの物語を劇化した上演には、今日でいうフォルクローレのアーティストを多数登場させ、大評判だった。このときの出演者に、民謡2重唱ガルデル＝ラサーノ Gardel-Razzanoもいた。

そのころ、オデオン社（これは後の名前だが、便宜上こう呼んでおく）は、ただのレコード会社ではなく、映画館チェーンももっていた。カスティージョは、同社で輸入する無声映画の字幕翻訳もやっていた。そのコネで、ガルデル＝ラサーノのレコードを録音するよう、同社に強力に推薦した。つまりカスティージョは、ガルデルの発見者であり、彼の天才を最初に認めた人だったのだ（まだ、歌のタンゴがなかった時代）。



カスティージョが、タンゴの作詞をした最初は1918年。『わたしの愛情に、あなたは何をしました？ ¿Qué has hecho de mi cariño?』だった。これは自分で上演する劇のために、パチョ Juan Maglio «Pacho» 作曲の『ロジャール・ピガール Royal Pigall』に、歌詞をはめ込んだものだった。

本格的な作詞は、1922年。「タンゴ」という商標のタバコ会社が、コンクールを開いたので、親友の息子のピアニスト、セバステアーン・ピアーナ Sebastián Piana (1903 - 94) が出品するため、歌詞を依頼したのだった。題名はタバコにひっかけて、『ソプレ・エル・プーチョ（吸殻の上に） Sobre el pucho』……なんだ！この題名は？ アルゼンチン＝ウルグアイのガウチョのことばから来た表現で「すぐさま」という意味なんです。

“Un callejón de Pompeya / y un farolito plateando el fango / y allí un malevo que fuma, / y un organito moliendo un tango; / y al son de aquella milonga, / más que su vida mistonga, / meditando, aquel malevo / recordó la canción de su dolor.”

（ポンページャ地区のひとつの路地、そして、ぬかるみを銀色に染める外套、そして、タバコをすっている やくざもの、そして、タンゴを絞り出す手回しオルゴール、そしてそのミロンガのひびきに乗って、彼のうらぶれた人生に加えて、考え込んでいる あのやくざものは、彼の痛みの歌を思い出した）

芝居の脚本のように書かれた歌詞だ。幕が上がると舞台装置が見えて、そこに登場人物の姿。

ブエノスアイレス南部の場末が、生き生きと浮かんでくる。ここから、やくざものを除けば、まるで、後に1940年代に、オメーロ・マンシ Homero Manziが描くことになる「南」の情景そのものだ。それもそのはずで、カスティージョは、ボエード（地区）派というブエノスアイレスの民衆の文学運動（運動というような組織ではないが）の中心人物のひとり、マンシは少年時代からそこで学んだのだ（具体的に何を学んだというのではなく）。カスティージョの息子カトゥロ・カスティージョ Cátulo Castillo も父親の文学サークルに出入りし、マンシの親友でもあった。マンシやカトゥロについては、このタンゴ作詞家列伝でもいずれ（だいたい先のことでしょうが）登場するので、ここでは

名前を挙げておくだけにしよう。

とにかく、カステイージョは、ブエノスアイレスの場末の風景をうたうタンゴの先駆者であり、たいへん大きな影響を残した人だということ。

1924年のオデオン社主催、第1回タンゴ曲コンクールには、息子カトゥロ（当時17才）が作曲して応募した。『たそがれのオルガニート Organito de la tarde』である。それにカステイージョが付けた歌詞は、音楽の魅力のほうが先行しているのか、あまり歌われることがないが、やはり舞台の一場面を思わせる、上手な歌詞で、たぶん夭折した詩人エバリスト・カリエーゴ Evaristo Carriegoの詩の世界に影響を受けている。

1925年には、カトゥロが、まず1パートを作り、残りを、彼のピアノの先生でもあったピアーナが作曲した『口笛を吹きながら Silbando』（題名はまだついていなかったかもしれない）に作詞した。脚本が本業であるカステイージョは、息子やピアーナがまず作曲したものに歌詞を乗せて書いた。この曲は、ガルデールが編曲（とまではいえないけれど）・演出して録音し、不滅の価値を得た。場末の風景の上に、場末の人々が動く舞台を見るようだ。（下の歌詞は、ガルデールがちょっと手直ししたものによる）

*“Una calle en Barracas... al sur, / una noche de verano, /
cuando el cielo es más azul / y más dulzón el canto / del barco italiano.../
Con su luz mortecina, un farol / en la sombra parpadea /
y en un zaguán / está un galán / hablando con su amor... //
Y, desde el fondo del Dock, / gimiendo en lánguido lamento, /
el eco trae el acento / de un monótono acordeón, /
y cruza el cielo el aullido / de algún perro vagabundo /
y un reo meditabundo / va silbando esta canción...”*

（バラカス地区のとある通り、南のほう。ある夏の夜。空がもっと青く、イタリア船の歌声がもっと甘いとき。消えそうな光で、街灯がひとつ影の中でまたたいている。そしてとある玄関先で、色男がひとり、彼の愛するひとと話をしている。

そして、ドック（波止場）の奥のほうから、けだるい嘆き声でうめきながら、こだまが、単調なアコーディオンのイタリアなまりを運んでくる。そして空を、どこかの野良犬の吠える声が横切る。

そして思いに沈むやくざものが、この歌を口笛で吹いていく……）

カステイージョは、演劇・文学界であまりにも大物だったせいか、息子とピアーナしか作詞依頼をされなかった（自分から、そう決めていたのかもしれない）。しかし、数少ないが価値高いタンゴを残して、1937年没。

フェルナンド・テル

por 西村秀人

1953年、アニバル・トロイロが音楽劇出演のために結成したトロイロ＝グレラ四重奏団は、その後のタンゴにおける小編成楽団に新しい可能性を切り開いたとされている。1930年代半ばの古典復興を担った小編成楽団であるロベルト・フィルポ四重奏団（バンドネオン、バイオリン2、ピアノ）とドン・パンチョ五重奏団（バンドネオン、バイオリン2、ピアノ、コントラバス）と比較してみると、一度はティピカ編成の楽器から外れて歌の伴奏専門になっていたギターがソロ楽器として、バンドネオンとの組み合わせでクローズアップされた点が新しかったといえるのかもしれない（必ずしもその後の小編成楽団がいつもギターを組み入れたわけではないが）。

1961年来日したバンドネオン奏者フェルナンド・テルが日本で結成したトリオもその流れを汲むものといってよいだろう。彼以前に来日し、約9ヶ月日本に滞在したバンドネオン奏者ホルヘ・カルダーラは主としてオルケスタ・ティピカ東京と共演し、ラジオにはソロやコントラバスとのデュオで出演しただけで、結局日本で自己のグループを結成するには至らなかったのとは対照的である。

フェルナンド・テルは1921年1月22日、サンタフェ州マリア・スサーナに生まれた。ロサリオで活躍するホセ・サラ楽団で2年活躍したのち、ブエノスアイレスへ上京、ミゲル・パドゥラ楽団、エドガルド・ドナート楽団で短期間すごし、1944年にアントニオ・ロディオ楽団の第1バンドネオン奏者となる。翌年歌手フィオレンティーノの伴奏を担当していたアストル・ピアソラ楽団に参加、そのままピアソラ独立後も一緒に活動し、ピアソラ楽団解散後はフランチャーニ＝ポンティエル楽団に参加、1948年まで在籍した。その後、1959年7月18日まで10年以上にわたってアニバル・トロイロ楽団に参加（1959年ということはおそらくトロイロが体調不良により活動を停止した日付がこの日なのだろう）、その後音楽を辞めてラジオや電化製品販売の道へ進むが、結局1年で音楽界に復帰、来日までは短期間オスバルド・フレセド楽団に参加、ドミンゴ・ルリオの懐古型コンフント、パケ・バイレン・ロス・ムチャーチョスにも、レオポルド・フェデリコが忙しくて参加出来ない時のエキストラとして参加した（パケ・バイレン... の録音に参加していないことはのちに本人から直接聞いている）。

テル来日のきっかけは当時アルゼンチンで暮らしていた山本満喜子氏にテルが日本行きを申し出たことだったようで、1959年からすでにチェロ奏者リカルド・フランシアが日本に滞在していたこともあり、約1年の準備を経て来日となった。1961年7月19日にテルは羽田空港に到着、わずか1週間後の7月24日から3日間、リカルド・フランシアのグラン・オルケスタ名義による2枚目のアルバム「これこそあなたのタンゴだった」にバンドネオン・ソロイストとして参加、ポリドールから翌年4月に発売された。これは結局日本におけるテルとフランシア共演の唯一の記録となった。

1. ポリドールLPP-1099 (25センチ盤)「これこそあなたのタンゴだった」(Tangos para todos) /リカルド・フランシアとグラン・オルケスタ、バンドネオン・ソロ：フェルナンド・テル

(A1)Felicia (A2)El amanecer (A3)La guitarrita (A4)El flete (A5)Mariposita (B1)Re Fa Si (B2)Canaro en París (B3)Del campo y la ciudad (Fernando Tell) (B4)Cuando llora la milonga (B5)La cumparsita

レコードには記載がないが、中南米音楽1962年3月号にはこの録音に参加したメンバー全員の一覧がある。バンドネオンはテルの他に岡本昭と前田照光(「クンパル」のみさらに2名が参加)、バイオリンは浜中美紀夫、仲間美枝子、堀口博雄など全10名(+チェロ1、ビオラ1、コントラバス1)、ピアノは岩崎宏康であった。

来日後テルとフランシアは岩崎宏康を加え「トリオ・ロス・ムチャーチョス」を結成、コンサートなどで活動を開始したが、このトリオはあまり続かなかったようで、録音も残っていない。その後テルはしばらくソロで新宿シャンテなどに出演していたが、1962年春頃から河内敏昭(ギター)、笠原喜三郎(場合によって福島敏夫)(コントラバス)とのトリオを結成、ヤマハ・レコード・コンサート、新宿シャンテ、ラジオ番組などへの出演で広く活躍するようになる。タンゴ歌手の歌唱指導にもあたり、阿保郁夫はこの時テル(およびフランシア)に学んだ歌手の一人である。その後テルは1963年9月2日の離日までに25センチ盤2枚、30センチ盤2枚、数点のソノシートを公式録音として残した。



2. コロムビア YS-3725「タンゴの魅惑」(Fascinación del tango)

(A1)La cumparsita (A2)Canaro en París (A3)Caminito (A4)Don Juan (A5)El llorón (A6)Sentimiento gaucho (B1)Medley: El choclo/A media luz/Adiós muchachos (B2)Felicia (B3)Quejas de bandoneón (B4)Inspiración (B5)El esquinazo (B6)Adiós pampa mía

トリオによる最初のアルバムと思われる(1963年4月発売)。全曲トリオによる演奏で、ギターは河内敏昭、コントラバスは笠原喜三郎(なぜかライナーにはギターとコントラバスが逆に記載されている)。その後まとまった形では再発売されていないが、1971年に発売されたコロムビアXS-119-N「デラックス・ベスト・セレクション16<アルゼンチン・タンゴ編>」(カルロス・バルガスと彼のオルケスタ名義)のうち4曲は上記LPからとったフェルナンド・テル・トリオ、残り12曲は1967年来日記念で日本コロムビアで制作されたアルマンド・ポンティエル楽団のLP収録曲を全曲収録している。シリアコ・オルティス・トリオともトロイロ=グレラ四重奏団とも異なる、テルの名人芸と歌心を中心にしつつ、軽妙さも生かしたトリオの演奏は今聞いても新鮮である。



3. キング SKG-17 (25センチ盤、モノラルはLKF-1341) 「郷愁のバンドネオン」 (Fernando Tell en Tokio)

(A1)Adiós pampa mía (orq.) (A2)La cumparsita(orq.) (A3)Del campo y la ciudad (F.Tell)(trío)
(A4)Adiós muchachos(orq.) (A5)Nihon de Mate Cha O Nominagara (F.Tell) (trío) (B1)Kojo no
Tsuki(orq.) (B2)El choclo (trío) (B3)Mama yo quiero un novio(orq.) (B4)Silueta porteña(trío) (B5)
Pa'que bailen los muchachos (trío)

コロムビアでのアルバムのすぐ後に出たと推測される、キング
での25センチ盤。全体の半分がオルケスタ編成、残り半分がトリ
オ編成になっている。オルケスタといってもバンドネオンはテル1
人のようだ。メンバーは全員日本人のはずだが、アルバムには記
載がない。A3はフランシアのレコードでも演奏していたテル自作
のミロンガで、カルロス・フィガリ楽団のレコードも残っている。
オーケストラもよいが、やはりテル・トリオの呼吸のあった演奏
が素晴らしい。A5はワルツで当時の邦題は「日本で抹茶を飲みな
がら」になっているが、原題はガウチョの好むマテ茶。B5は当時
のライブでも毎回のように演奏しており、師・トロイロの心を汲んだ名演奏である。



4. キング SKG-29 (25センチ盤) 「郷愁のアルゼンチン・タンゴ」 (Nostalgias del tango argentino)

(A1)El huracán(orq.) (A2)Jogashima no Ame(orq.) (A3)Tango Medley(trío): Organito de la tarde/
Yira yira/Derecho viejo (A4)Amagando (F.Tell) (orq.) (A5)Mi dolor(trío) (B1)Nostalgias(orq.) (B2)
Miriñaque(trío) (B3)Tiempos viejos(trío) (B4)Susanita(trío) (B5)Japón, Japón (F.Tell-Makiko
Yamamoto)(orq.)

前作と同じ構成で、半分がオルケスタ、半分がトリオによる演奏。
A4とB5はテルの自作で、A4は日本でトリオによるライブの際に
テーマ曲としても使用していたモダンなタンゴ。B5はワルツでテ
ルの日本語の歌が入る（作詞は山本満喜子）。名曲A5のバンドネ
オン変奏の鮮やかさが光る。B2はウルグアイのアルベルト・マス
トラの傑作で、トロイロ楽団のレパートリーでもあったミロンガ。
小松亮太の2010年のアルバム「小さな喫茶店～東京タンゴ・カフェ」
に収録された「ミリニャーケ」はフェルナンド・テル・トリオの
この演奏を手本にしている。



5. キング SLH-9 「南米への招待」 (Invitation to South America)(1964年)

(A1)Bésame mucho (A2)La cucaracha (A3)Orfeo negro (A4)Carnaval del Brasil (F.Tell)
(A5)Nube gris (A6)Mis noche sin ti (B1)La morocha (B2)Siboney (B3)Carnavalito (El
humahuaqueño) (B4)Perfidia (B5)Cielito lindo (B6)Pa'los acheros (F.Tell)

滞日時の最後の時期、ライナーによればミカドやラテン・クオーターに出演していたというカルテ

ット（トリオ+ドラム）による録音で、発売はテルが離日してからだったはずだ。中南米名曲集なので、タンゴはB1のみ、自作のA4はブラジルのサンバ、同じくB6はアルゼンチンのサンバ。イギリス・ロンドン・レーベルを使っでの発売で、その後全世界で発売される予定とライナーにあるが、実際に発売されたかどうかは不明。ちなみにキング盤には3枚ともメンバーの記載がない。

キングへの録音は、テルの帰国後、25センチ盤2枚から編集する形でミュージック・ホール・レーベルから30センチLPとして発売された。



6. MUSIC HALL 112344 “El tango en Japón”

(A1)Adiós muchachos (A2)Mama...yo quiero un novio (A3) El choclo (A4)Miriñaque (A5)Pa'que bailen los muchachos (A6)Tiempos viejos (B1)El huracán (B2)Mi dolor (B3) La cumparsita (B4)Silueta porteña (B5)Nostalgias (B6) Amagando

以下、テルによるソノシートの録音についてまとめておく。いずれもテル名義の録音としてはレコードより先に世に出ていたと考えられる。



最初の2点はテルが来日前にアルゼンチンで録音した音源である。

a. 歌う雑誌KODAMA 第12号 特集ラテン・ファンタジー (1960年11月号)

K-2 (1) Del campo y la ciudad -milonga- (2) Rosa blanca -choro- (3)Regalon -gato- (4) Canción (H.Stamponi-E.Francini) (5)La copa del olvido (E.Delfino)

1960年11月という非常に早い時点での紹介で、すべてバンドネオン・ソロ。おそらくは山本満喜子氏がテル招聘の協力を求めるために作ったデモ録音のようなものではないだろうか。ソノシート片面に5曲も入っており、それぞれの演奏はかなり短い。自作のショーロ(2)は他に録音のない曲。(4)はただ「カンシオン」となっているが、実際は「アベ・マリアの歌」(Canción de Ave María)である。

b. 別冊ジュークボックス(ディスク社)特選集シリーズ JB-13, JB-22「タンゴ特選集」(1961年5月)

JB-13 (1)La cumparsita (2)Zamba triste (哀愁のサンバ)

JB-22 (1)Tiempos viejos (2)Añoranzas (花のバイレシート)

/ Fernando Tell, su bandoneón y guitarras

これもテルの訪日前に宣伝を兼ねて録音されたものだろう。テルのバンドネオンにエクトル・ダビス(ギター)、リカルド・フェレイラ(ギター)を加えたトリオ編成で、ギターの二人は当時レオポルド・フェデリコのエキストラとしてテルが共演していたパケ・バイレン・ロス・ムチャーチョスの

メンバーである。Añoranzasは同題のフォルクローレの曲がいろいろあるが、これはテル作のバイレシート。これらの録音はアルゼンチンで発売された形跡はなく、日本でもこのシート以外ではみかけない。もともとは定期的に発行されていた別冊ジュークボックスに2回に分けてついていたシートのように、私の所持する「特選集」はそれらからタンゴの演奏だけ4枚を集めたもののようである（ちなみに残り2枚のシートはTK原盤のタニア＝ドナート・ラチアッティ2曲と、フランス録音のジョセフ・コロombo楽団1曲、ペペ・ヌニェス楽団1曲）。

c.日本エンゼルレコード Angel Books 21 「アルゼンチンタンゴ」(1961年12月)

<1>(1)La cumparsita (2)Inspiración

<2>(1)La morocha (歌:藤沢嵐子) (2)Uno (歌:国井敏成)

<3>(1)Mi vieja viola (歌:藤沢嵐子) (2)Silencio (歌:菅原洋一)

<4>(1)Esperar (歌:藤沢嵐子) (2)Luna tucumana (歌:菅原洋一&国井敏成)

／早川真平とオルケスタ・ティピカ東京&フェルナンド・テル

テルの滞日時はちょうど日本でソノシートが多数制作されていた時代であった。その大手の一つであったエンゼルから出たティピカ東京との共演盤。ステージ上ではたびたび共演していたテルとティピカ東京だったが、録音はこのソノシートの8曲のみである。1962年9月に25センチの厚手の両面盤ソノシート、Angel Books C-19「ARGENTINA TANGO ラ・クンパルシータ」として再発された。再発盤では解説にはその名が登場するものの、ジャケットと盤面からフェルナンド・テルの名が消えているのは契約の関係だろうか？

d.コダマプレス KS-76 ステレオ タンゴ名曲全集 I (1962年3月)

<2> (1)Quejas de bandoneón (2)La última copa (歌:阿保郁夫)

e. コダマプレス KS-80 ステレオ タンゴ名曲全集 III (1962年5月)

<2> (1)Corazón de oro (2)Miriñaque

f. コダマプレス KS-87 ステレオ タンゴ名曲全集 補巻 (1962年7月)

<2> (1)Don Juan (2)Sentimiento gaucho

もう一つのソノシートの大手、コダマプレスは1枚2曲×各巻3枚×全4集のタンゴ全集を出しており、そのうち3枚分6曲がテル・トリオの演奏である（その他はオルケスタ・ティピカ東京とオルケスタ・ティピカ・ボルテニヤ）。「最後の盃」はテルの教え子である阿保郁夫の生涯最初の録音である。のちにコダマプレスKS-278「タンゴ入門ベスト17」(4枚組)にbとcの4曲が再収録された。ギターは河内敏昭、コントラバスは笠原喜三郎。



1963年9月2日、フェルナンド・テルは船でアルゼンチンへ帰国した。帰国時のインタビューでは再訪を熱望していたが、残念ながらテルが再び日本の土を踏むことはなかった。帰国後はもっぱらアニバル・トロイロ楽団のメンバーとして過ごし、ラファエル・ロッシ名義の録音で代わりに演奏したりもしていたようだ（トロイロ楽団の晩年の映像ではその姿を確認できる）。

筆者は1987年8月、タンゴ・ツアーでアルゼンチンを訪れた際、ロサリオから来たフェルナンド・

テルと会うことが出来た。その時のツアーにはスペイン語が出来る人が少なかったこともあり（といってもスペイン語を学び始めて2年目の私とて大して話せたわけではなかったが）、移動のバスやパーティーでも隣に座ってくれて、いろいろ話をする機会もあった。当時の私の理解が十分でなかったのので話の内容はそれほど記憶に残っていないが、印象的だったのは1975年にアニバル・トロイロが亡くなり、同じ頃に両親も亡くなったので、その時点で自分の演奏家としての人生は終わったのだ、という趣旨のことを寂しそうに語っていた点だった。当時演奏活動から退いていたはずのテルだったが、私とその旅で購入したバンドネオンを試奏してくれた際には実に鮮やかな指さばきを披露してくれ、まったく衰えを感じさせなかった（と同時に、タンゴではなく、ワルツやランチェラを試奏に選んでいたのが地方出身者らしいなとも思った）。

その数年後、ロサリオホテルを訪ねるつもりでアルゼンチンへ旅行したが、私が体調を崩してしまいロサリオ行きはキャンセルせざるを得なかった。そしてテルは1995年3月28日、自宅で自ら命を絶ったところを近所の人に発見された。几帳面な性格が老いを許さなかったのか、内面に問題を抱えていたのか... 周りの人は誰一人としてその原因を思いあたらなかったという。以来15年以上が経過し、その間私は何度もアルゼンチンを訪れているが、いまだにロサリオを訪れる機会はない。

テルが世を去って5年後の2000年、ロサリオで彼のCDが制作された。彼の手元にあったテープからの編集と推測される。

:e(m)r; (Ediciones Musicales Rosarinas) MMR01 Memoria Musical Rosarina – Fernando Tell (2000)
(1)Amagando (2)La cumparsita (3)El huracán (4)Japón, Japón (5)La última copa (歌:阿保郁夫)
(6)Miriñaque (7)Sentimiento gaucho (8)Susanita (9)Tiempos viejos (10)Corazón de oro (11)El llorón (12)Don Juan (13)Tomando mate en Japón (14)Suiyokai (15)Quejas de bandoneón (16) Palomita blanca (17)Inspiración (18)La trampera (19)Griseta (20)El porteñito (21)Amagando (22)El choclo (23)La tablada (24)Mi dolor

聞いた感じでは (1) (2) が2から、(3) (4) (5) (8) (9) (13) (「日本でマテ茶を飲みながら」のスペイン語) が3から、(5) ~ (7) (10) がコダマ・プレスのソノシートd,e,fから、(11) (12) が1に収録されていたもののように思われる。(14)はタンゴ愛好会「すいよう会」に捧げて作ったテルの



作品を初演した時のヤマハ・ホールでのコンサート・ライヴ録音で、後半に1982年のバンドネオン・ソロ録音をつないでいる。15～24は1982年にロサリオで行われたソロ演奏からの音源である。なお、2006年に同じ番号で再プレスされた際にジャケットがまったく別デザインになっているのでご注意を。日本でのライヴ録音は他にもまだ残されているようなので、いつか陽の目を見ることを期待したい。

これらの録音は日本のタンゴ界に少なからず影響を残したフェルナンド・テルの功績を偲ばせる資料だと思うが、近年ではこのアルゼンチン盤CD以外の復刻がほとんどないのは残念である（日本盤CDとしてはキング録音の「ラ・タンパルシータ」がオムニバスに収録復刻されたものしかないと思う）。

最後に彼の作品について触れておきたい。代表作はビクトリーノ・ベラスケスの詞を得た「行けよ、栗毛の愛馬」(Vamos, vamos zaíno viejo)だろう。オスバルド・フレセド楽団=アルマンド・ガリード歌（1950年12月19日Odeón）、エドムンド・リベーロの名唱（ギター伴奏、1959年1月23日Odeón）がある。テルに会った際、阿保郁夫がこの曲を録音した（京谷弘司タンゴ・トリオ伴奏、1984年7月14日録音、ポリドールH33P-20154として1987年に発売）と伝えたら、テルは満面の笑みで「やった！」とガッツポーズをとったのが今でも忘れられない。他の曲で録音のあるものには「幕が下りる間に」(Mientras caía el telón) (J.Pueblito作詞、アルド・カルデロン歌=イスマエル・スピタルニク楽団伴奏、1953年2月9日RCA-Victor)、「デ・レボータ・ナダ・マス」(De rebote nada más) (アンドレス・チナーロ作詞、マリオ・ブストス歌=アルマンド・ラカバ楽団伴奏、1960年頃TK)、民謡調「ラ・ウエジャ」(La huella) (エドムンド・リベーロ作詞、エドムンド・リベーロ歌、Philips 1972年)、おなじく民謡調の「レガロン」(Regalón) (フアン・ホセ・モサリーニのバンドネオン独奏、アルバム「チェ・バンドネオン」に収録)、母に捧げられた「田舎と都会」(Del campo y la ciudad) (カルロス・フィガリ楽団、1957年Music Hall) がある。さらにSADAICのホームページには“Don Ángel”, “Cuando llegues amor”, “El cielo te está llorando”, “Esquina de mis recuerdos”, “Las manos de Pichuco”, “Sol naciente”, “Suiyokai” など全27曲が登録されている。



タンゴの音作りは“基本が違う”

齋藤 一臣 (横浜市)

つい先日のことです。あるところで齋藤編集長とお話していた際に、突然質問されました。“カルロス・ディサルリやフランシスコ・カナロは、演奏が大変難しいと聞くのですが、それはなぜですか…”，ということでした。これはタンゴ演奏の基本に関する貴重な質問で、さすが！！と感心いたしました。

私もタンゴが好きになって50年、「オルケスタYOKOHAMA」を結成し、この演奏に係って30年、この間にブエノスアイレスにも再三訪れ、巨匠オスバルド・プグリエーセにも直接に教えを受け、苦心しながらも勉強し、体得したことも少なくありません。

そこで、私なりにこの質問にお答えしてみたいと思います。

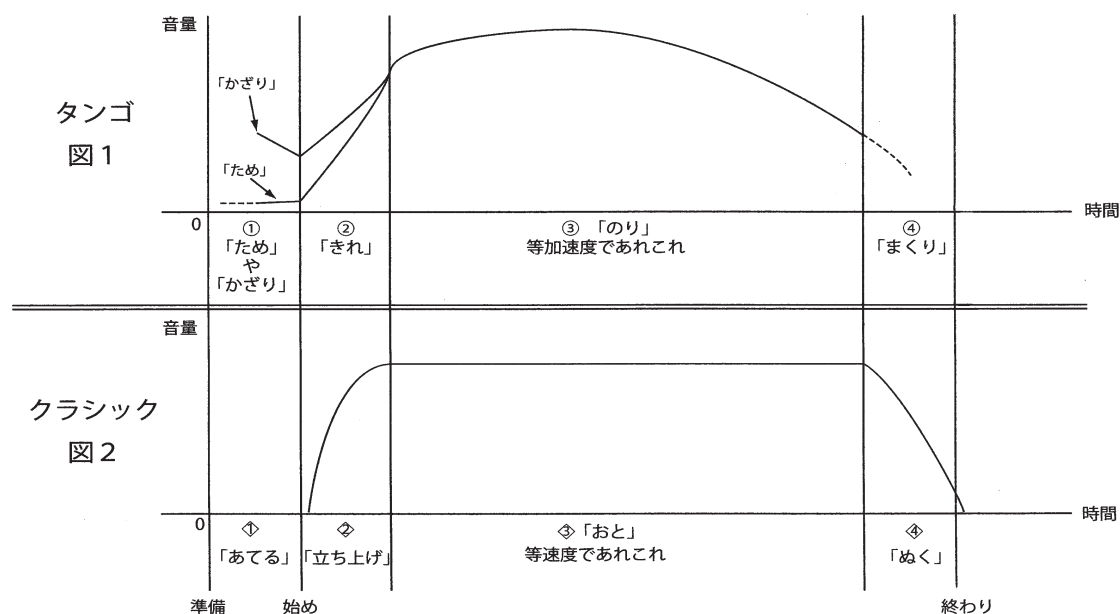


その前に、タンゴ演奏の基本について少し述べておきたいと思います。

まず知っておかなければならないこと、それはクラシック音楽をはじめとするいわゆる一般の音楽と“タンゴ”では音の作りの基本が違うということです。さっそくですが、[タンゴ図1]と[クラシック図2]を比べて下さい。

[タンゴ図1] (以下は「タンゴ」) では、スタッカートであれ、ロングトーンであれ、プレスとプレスの間のフレーズであれ、同じ図で表せます。違うのは③「のり」の部分で音の長さやメロディーだったりします。

タンゴとクラシック音楽の音の構成



そして、①「ため」でぐっと音を引き寄せますが、そのとき、とかく音は正しい拍より前から漏れ出します。また「かざり」は出音の前で各スタイル独特の装飾音を出します。

[クラシック図2] (以下は「クラシック」) の<1>「あてる」は、単に音を出す用意だけです。

「タンゴ」②「きれ」では鋭く、一気に音を持ち上げます。これに対し、「クラシック」<2>「立ち上げ」では、力をぬいて、目指す音量で演奏にはいります。

「タンゴ」③「のり」は「ため」や「かざり」と「きれ」で作ったセンチメントに追い打ちをかけます。いわば、“音量と時間の等加速運動”です。ただし③がフレーズ的时候はメロディーですからこれが波のようになりかえされます。これに対し、「クラシック」<3>「おと」では終り近くまで“等速運動”が続きます。



カルロス・ディサルリのオルケスタ

「タンゴ」④「まくり」は、はじめの「ため」や「かざり」でつっかけたぶん、音の終りは早くします。これがいうところの「まくり」です。これに対する「クラシック」<4>「ぬく」は、<2>の「立ち上げ」でやや遅れる分、最後も正しい拍よりやや遅く力をぬいて終ります。

本来メロディー楽器のはずのバンドネオンやバイオリンが、今述べたことをきっちりとやらないとタンゴの真髄に迫るビートには絶対にならないと思います。



フランシスコ・カナロのオルケスタ

さて、ここで冒頭の質問についてですが、プグリエーセ・スタイルなどのダイナミックなものは、かなり雑な演奏でもなんとなく聴けることもあります。また、ピアソラ・スタイルに至っては、メロディーだけを追って処理することも出来ます。ところが、ディサルリ・スタイルは、特に、リズムだけでも極端に鋭く、前述のことを徹底的にしなければなりません。その上、1小節・4拍を1拍ずつ使い分けしなければならないのです。しかも音量を2・4拍など、極端に小さくし、まさに「禁欲的演奏」を強いられます。その結果なのでしょう、ディサルリ楽団では、たびたびメンバーが集団で脱走し、バイオリンのロベルト・ギサードだけが戻ってくるのだそうです。

次にフランシスコ・カナロ楽団の演奏スタイルについてもふれておきましょう。率直に言って、カナロ自身は名演奏家とはいいいにくいバイオリン奏者だったといえます。しかし、それだけに音の響に憧れ、その追求に精進したといえます。あの金粉をまぶしたようなキラキラした音色がその到達点だったといえましょう。それは前述の奏法だけではだめです。力を抜く、つまり“力まない”ことなのです。バンドネオンでは空気を激しく入れたり出したりするにもかかわらず、力を抜くとは、一体どうするのでしょうか。それは重力です。楽器（バンドネオン）の右手と左手の重さを巧みに使って、あの独特の響を生み出すのです。…だから難しいのです。もう数年前になりますが、カナロ楽団を名乗ってホルヘ・ドラゴーネが来日したとき、バンドネオンは全員老人だったのをおぼえていますか。

その際、私とその理由を尋ねたところ、“若い人では、カナロの響きがつくれないから”といわれたのを覚えています。タンゴとは、ことほどさように微妙な音楽なのです。

ご存じの通り、昨今のタンゴ界では、世界中がプグリエーセ・スタイルもどきや、ピアソラ・スタイルもどきが横行しています。それほど演奏は簡単なのかといえば、実はその逆でプグリエーセ・スタイルもピアソラ・スタイルも演奏はきわめて難しいのです。ただいえることは、拍の作りの根本は、どのスタイルでも同じ、ということです。

タンゴを演奏する者は、私も含めて、ひたすらビート（拍の作りや、のり）について、もっと勉強しなければなりません。タンゴはそれほど奥が深いといえます。

わが愛する“タンゴの似合う街横浜”で活動を続けて30年、多くの皆様のご支援を受けて「オルケスタYOKOHAMA」もさらに前進を続けるつもりです。

（「オルケスタYOKOHAMA」代表）



オルケスタYOKOHAMA

カルロス・ガルデル

Carlos Gardel



大澤 寛 (訳)

(訳者まえがき)

- ①この邦訳の対象としたのは2005年7月21日Clarín 社発行の Tango de colección (20巻) の中の「Carlos Gardel」である。本文の各章(第1章から第8章まで)には小見出しがあるが、全体のタイトルは単に「Carlos Gardel」となっている。各章の筆者は異なる。
- ②原文でカッコ、横線、斜体が使用されている箇所は訳文もそれらに対応させている。
- ③カッコ書きで訳注(*印)を付けたものは活字を小さくしてある。
- ④訳文での人名・地名などの表記で良く知られたものは(ガルデル、ボルヘス、ブエノス・アイレスなど)原則としてカタカナ書きとし、それ以外はカタカナ表記したあとにカッコでローマ字表記した。
- ⑤ガルデルの渾名についてもEl Morocho やEl Mudo を文中でいちいち説明せず(特別な場合を除き)ガルデルで統一した。

第1章と第2章の筆者はJorge Güttling

第1章 神話 謎の無い神はいない



1935年6月24日、メデジン空港(コロンビア共和国)の航空機事故現場の瓦礫の中で一人の男の命が尽き、そしてあの神話が生まれた。ラ・プラタ河沿いの地域を起源とする不滅の神話すなわちカルロス・ガルデルである。歴史や伝説は、幾世代にもわたるアルゼンチン国民の永遠のアイドルの人生にいつまでもついて回る要素に過ぎない。しかし、その神話は、あの運命的な事故の記念日が来るたびに勢いを取り戻すように見える。あの事故の71回目*(*この本の発行は2005年7月)の記念日が近づき、そして確信は深くなるばかりである。この現象についての諸説を検証することは、この点に於いて、間違いである。神話的な問題と全く純粋なお喋り

りとを隔てる壁はとても薄いものだから。

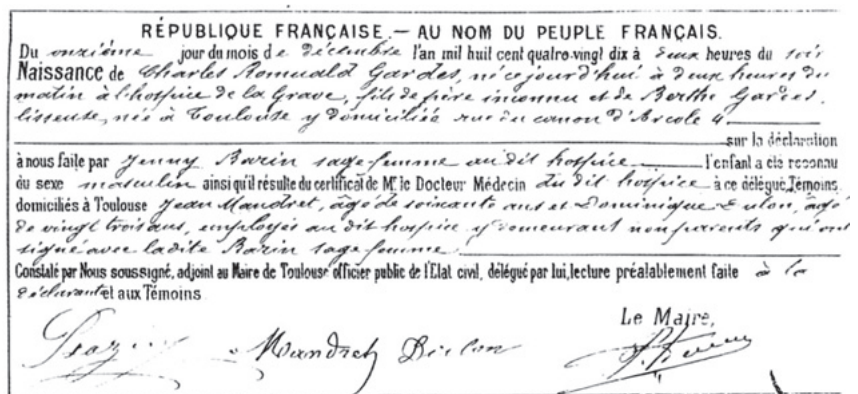
先ず第一に、ガルデルは熱心な論評の対象であった。晴れやかな笑顔、タキシード、帽子、フロックコート、ポマードで撫でつけた髪、適度に誇張された巻き舌のRの発音など。次に、ガルデルは単なるアイドルを遥かに超えた存在であった。敬愛される芸術家であり、どんなに関心の対象の異なる多様な地域社会からも、それらを代表する市民として選ばれる存在であった。我々は、ずっと昔から、あるひとつの奇跡に対する淡い、無益な、殆んど屑か欠片みたいな期待を抱いている。

我々は、我々の多様な願いを纏め上げるリーダー像を求める中で、毎日のようにもう一人の、或いは何人ものガルデルを発見するための聖別を行っている。しかし、カーボンコピーが本物のガルデルの生んだタンゴの歴史を繰り返せると信じる人々も、人々の共通の願いを磁石のように同一方向に寄せ集めたら、そのもう一人のガルデルが街角を曲がって現れると信じる人々も、最早それほど多くはない筈だ。誰も、時計職人のように正確には、過去が何時始まるのかは判らない。しかし、我々は初めて白髪に気が付いた時のように、過去と言うものを運命として受け入れなければならない。今日でもカルロス・ガルデルは、我々に共通の過去というものの決定的な一部分なのだ。蓄音器からでも最高級のオーディオ装置からでもよい。ガルデルの声は、幸せな過去の最後の目配せのように、いつでも湧きあがって来る。この長続きのする現象は儀式と化し、ガルデルの生誕（12月11日）と逝去（6月24日）の記念日毎に、明らかに密度の濃さを増すことになる。ガルデルの声は、多くのメディアを通じて幾何学的に増幅されてゆく。一方で、彼にまつわる逸話の数々は、アーカイヴの中から無情なまでに古い決まり文句を繰り返して行くことになる。

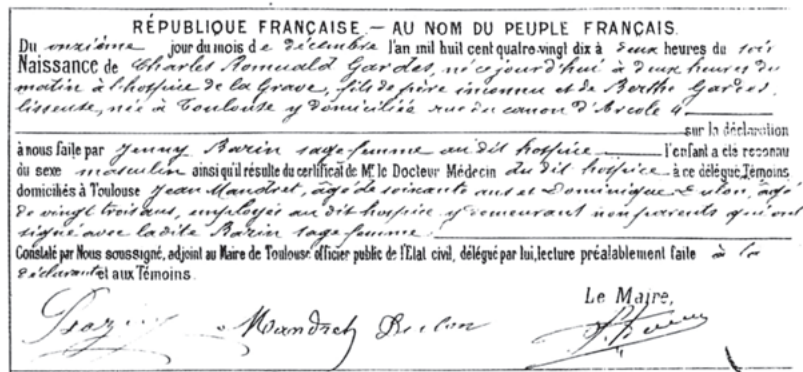
ガルデルの偉大さを測るには、別の尺度が必要だ。彼は、ジャンルの全てを律する法の編纂者であった。ガルデルが取り上げるまで、タンゴ-カンシオン*（*物語性のある歌詩を持つ歌うタンゴ。“歌謡タンゴ”）と言うものは存在していなかった。このことからガルデルは原初的（彼は流派を作らなかったし、彼が残したものは全てが流派をなした）であると同時に古典的であると理解されなければならない。このことは、選ばれた人たちが持つ両義性である。

ガルデルは、ガルデル自身にそうしようという意図は無いままに、彼の新しい領域に現れる全ての新しい声に対する天然の敵対者であった。さらに、敢えて彼の真似をしようとするものに対しては破壊者でもあった。

ガルデルの伝記は数百を数えるだろう。一般に、念入りに寄せ集められたコピーはいつも、既によく知られた点や、未だ明るみに出されていないガルデルの個人的な人生の航跡の幾つかの局面を取り出して強調することで終わっているものだが、最も信頼すべき伝記類、即ちガルデルの同世代の人々によって書かれたものでさえ、ガルデルの人物を描いてはいない。その理由は多分、誰のどのような人生であっても、それを完全に裸にして世間に公開することは決し



トゥルーズ市発行のガルデルの出生証明書。1行目に1890年12月11日の日付が、2行目にCharles Romualdo Gardesの手書き文字が見える。



1890年12月22日に登録された認知証明書（出生証明書と同一に見える）。出処：Julián y Osvaldo Barsky, "CARLOS GARDEL LA BIOGRAFÍA", (Taurus,2004)

て出来ないものだからだ。

さらに、ガルデル本人が市民生活における自身の足跡の幾つかを意図的に曖昧なものにしようとしたし、他人の容喙し難い複雑なものに変えようとしたように思える。タンゴの世界のもう一人の傑出した人物であるフリオ・デ・カーロ (Julio De Caro) は、間違いなくガルデルについての知り得る全てを知っていた人たちの一人だが、この仮説を裏付ける発言をしている。“何が起きたかと言えば、ガルデルは神秘性というものに信仰を捧げていたのだ”と。神秘性の無い神は存在しない。



幼少期のカルロス・ガルデル



ガルデルの母のベルタ・ガルデス

ガルデルの一生を調べることは、例えば、貧しい幼年期に由来する苦しみと惨めさや、時代と場所—アバスト (Abasto) という街区—とが共通に持つ混乱、さらには早い時期からの盗みにも似た詐欺師の暮らしを予想させることになる。自身の過去についてガルデルが被せた暗い幕は出生の記録から始まる。誕生日が祝われた回数は少なかったが、それらも異なる日付で行われた。ウルグアイの人たちはガルデルはタクアレンボ* (* Tacuarembó ウルグアイ東部の同名の州の州都) で生まれたものとし、その記録を公式なものとして宣言している。系統立てた資料の集積から言えることは、ガルデルは1890年の12月11日にフランスのアルタ・ガローナ* (*Alta Garona 仏語ではHaute Garonne=上ガロンヌ) のトゥルーズ市 (Toulouse) で生まれ、シャルル・ロミュアルド・ガルデス (Charles Romuald Gardes) と名付けられた。母親はベルタ・ガルデス (Bertha Gardes) 父親は不明*である。(*幾つかの説があるが、この筆者は“不明”としている)

ベルタ・ガルデスと息子のシャルルがアルゼンチンに入国登録した記録が、古い‘移民ホテル’ (Hotel de Inmigrantes) のファイルに残っている。幼年期はアンファン テリーブル* (*フランス語enfant terrible 恐るべき子供、やんちゃ坊主) として初めて町の歴史に刻まれ、ドン・ボスコのサレジオ会が運営する小学校 (Colegio Don Bosco) に入学、そこでアルゼンチンのもうひとりの神秘性を持つ人物であり、原住民の血を引く、あのセフェリーノ・ナムンクラ*と同窓になった。

(*Ceferino Namuncurá 1886年8月26日生。1905年5月11日没。アルゼンチン政府のパタゴニア侵攻に最後まで抵抗した原住民マプーチェ族の酋長の血を引く。聖職者を志すが病弱だった。サレジオ会は転地療養のため彼をイタリアに送る。ローマ法王ピオ10世の知遇を得るが19歳でローマで客死。現在でもパタゴニア北部地方を中心に尊崇されている。ちなみにサレジオ会は先住民と白人の区別なく教育機関を運営した。この本の終章近くの年譜にも出て来る。以上Wikipediaなどを参照した)

そして、引退生活を送る怠け者たちと働き者の移民たちが、新天地アメリカを実現するという共通の願いのために努力しているこの地に、我々が彼の歌を聴く喜びに優先させて語ろうとしていることのために、少年ガルデルは最終的に錨を下ろし住まいを定めたのだ。

間もなくガルデルは街を流して歩くことからラジオやレコードに、酒場から映画のセットに、アバストから中心街へ、さらに中心街からパリへと歩を進める。これが国中に最も広く流布されているガルデルの波乱の物語である。数年の間にガルデルは、生き方についても感情の面においても、或いはそれらを総合した全体として、ひとつの時代のアルゼンチン人を代表するシンボルに変身した。

そしてまたガルデルは、ポルテーニョ*たち、練達した港湾労働者としての、悩みを抱える人間としての、さらには移民から不利益を被るものとしての、あるいは大草原地帯から追放された犠牲者としての、これらは発展途上にあって拡張する当時のブエノス・アイレスという町に不可避の現象だったが、こうしたポルテーニョたちの願望の中で、そしてその中でもとりわけ、湿度が高くて滑りやすい1920年代から30年代のあのブエノス・アイレスで暮す、ガルデルと同じように過去の痕跡を持たず、明確な境界を定めないでただ何とか暮してゆく無名のポルテーニョたちの、同時代的なものを表す正統な代表となった。

(*ポルテーニョ; porteño と言う語は繰り返し出て来る。‘港の’、‘港町の’、そして ‘そこに住む人々’、この場合 ‘ブエノス・アイレスという港町に住む人々’ をいう。語感としては ‘浜っこ’ だが ‘ブエノス・アイレスっこ’ では長過ぎて訳語として馴染まないでそのまま ‘ポルテーニョ’ とする)

ガルデル自身がそこで生きねばならなかったアルゼンチンという国の劇的な状況の中でのガルデルの確かな個性が、時の経過とともに一段と強まり、そして彼に付きまとう甘い画像は、ただアートとしての価値しか持たないものだが、同じく時と共に消え去って行く。

我々が関心を持つガルデルは手の届くところに居る。記憶の糸を堅く張ろう。そうすれば我々の心の中の凧は、彼の唯一の芸の魅力だけに向かって高く昇って行くだろう。大衆に人気のあるひとりの歌手についての練り上げられた伝説もまた唯一のものでなければならない。優れた作家、ジャーナリスト、外交官でありタンゴ通であるエンリケ・エストゥラスラス*(* Enrique Estrázulas 本文のEstraulasは誤植。第4章には正しくEstrázulasで出て来る) なら、ガルデルに関する大衆の情熱的な全ての評価を要約して言うだろう。“もし誰かが、バッハが好きでガルデルは嫌いだというなら、その人物はバッハが嫌いなのだ”と*。

*Enrique Estrázulas自身が、Clarín 社発行の雑誌 “Ñ” の2005年7月18日号の第10頁に俳優のアンソニー・クインの言葉として引用している。“Al que le gusta Bach y no le gusta Gardel, a ése, no le gusta Bach”

第2章 ガルデルの一生 歌の起源と方向性

我々はいま、アルゼンチン国民の全てが持つ約束の合言葉について、疑いを入れぬ一市民について、毎日に歌が上手くなる歌い手について、そして名詞として生まれ形容詞として死ぬという終わりの無い寓話の主人公についての物語をしているのだ。不滅の声、カルロス・ガルデルについて語ろう。そうすれば全ての物語は失われた時代に合わせて反響するだろう。2003年にユネスコは、聴覚によって編纂された短い名簿を飾る数々の名前、すなわちベートーベン、マリア・カラス、エンリケ・カルーソ、モーツァルトという人々と並んで、ガルデルの声を人類文化遺産に指定した。こうした名前は、我々が、なによりも先ず、一人のタンゴの歌い手について語っていることを思い出させてくれる。

ガルデルに関りのある或ることを手早く (原文斜体 al toque) 語ろう。ひとつの物語が、幾つかある

中のひとつなのだが、シャルル・ロミユアルド・ガルデスが、1890年の12月11日に、フランスのトゥールーズに在るセント・ジョセフ・ド・ラ・グラヴ（Saint Joseph de la Grave）病院で誕生したことを示している。そして2年少々経った後の1893年の3月10日に、この少年は母親のベルタ・ガルデスと一緒にブエノス・アイレスに現れる。二人はウルグアイ通りの貸し部屋に落ち着く。数か月してアバストに引越す。アイロン掛けが仕事だった母親のベルタは、或るフランス人の女性に、その仕事をするように雇われた。息子はドン・ボスコ小学校に通ったが、さしたる事件も起こさずに初級課程を修了した。人から羨ましがられるほど字が上手かった。何でも上手く書いた。悪戯っ子だったが、音楽に魅力を感じて、劇や行進の唱歌隊に入った。様々な雑役をこなしたが、中でもコロソ劇場の舞台道具係があった。舞台の裏から、ティッタ・ルッフオ*のような抒情的な大歌手の声を聴く機会に恵まれた。ガルデルはとても鋭い聴覚を持っていて、後に自分の歌に取り入れることになる抒情的な味わいをそこから汲み取ったのだろう。

(*Titta Ruffo オペラ歌手。ガルデルはルッフオやカルーソの歌い方を真似るのが上手かったという。todotango「Gardel y la lírica」より)



青年期のカルロス・ガルデル

ガルデルは安い酒場や芝居小屋の舞台で土着の民謡的なものや、シフラ、エスティロ、サンバなどを歌い始めた。1911年にホセ・ラサーノ（José Razzano）と知り合い、後に彼と共に歩むことになる。プロとしての経歴が始まるのだ。1917年に「Mi noche triste（我が悲しみの夜）」を歌い、さらに後に「Margot（マルゴー）」を歌いタンゴ・カンシオン（tango-canción “歌謡タンゴ”）というジャンルを産み出す。そして常にタンゴを歌うことに専念するために、アルゼンチンの内陸の民謡的な歌からは離れて行くことになる。

ガルデルは自身の姿形・スタイルを造り出して行く。118キロあった体重を75キロまで減らして、独自のイメージを産み出す。この努力は、成功することによって忠実に報われる。1923年にはスペインでのデビューを果たし、その翌年にはブエノス・アイレスからラジオ放送による最初のコンサートをライブで行い、ガルデルの評判はさらに広がって行く。1928年は再びヨーロッパに行きパリを征服する。ガルデルの声、身振りや姿形は熱狂を呼んだ。映画会社のパラマウントと契約し、1931年に映画「ブエノス・アイレスの灯」（Luces de Buenos Aires）が封切られてガルデルの国際的な映画俳優としてのキャリアが始まる。2年後には、ほんの短期間ブエノス・アイレスに滞在した後アメリカ合衆国に渡り「下り坂」（Cuesta abajo）「ブロードウェイのタンゴ」（El Tango en Broadway）「タンゴ バー」（Tango Bar）および「想いの届く日」（El día que me quieras）を撮影する。ガルデルの抒情的な歌詞の殆んど全てをアルフレド・レ・ペーラ（Alfredo Le Pera）が作詞したのだが、彼もまたメデジン空港の大惨事で、ガルデルと共に、33歳の生涯を閉じる。1935年6月24日午後3時のことであった。

ガルデルの人生に起きた出来事は、時の経過とともに特殊な展開を見せる。悪意のある隠蔽から生じる不透明さがあり、状況証拠や、データの改竄、全ての分析の可能性を潰した怠慢などである。さらにまた“ブエノス・アイレスのタンゴの歴史家”とでも呼びたい人々の側による、ある種の強迫観念がある。彼らは、彼らのための完全に閉鎖的な世界には相容れない、あらゆる仮説的な可能性を軽

視した。

完全なデータの裏付けのない、ガルデルのフランス生まれ説（原文斜体）に関する何種類もの仮説のひとつを語ることは、いつも礼を失することになる。データが完全であることを追求する人たちは、必ず別の材料を、その材料が読者に音楽行脚の愉しみを紹介する目的に適わないものだとしても、持ち合わせている筈である。こういう前提のもとに、ガルデルがウルグアイ生まれだとする説のひとつを、一見して口伝の物語以上の確証を持たないように見えるものだが、紹介しよう。身分証明の盗用に立脚するものである。この説によればガルデルは、1882年から1887年の間にウルグアイのタクアレンボで、カルロス・エスカヨラ（Carlos Escayola）という軍人と彼の15歳の義妹との間の非嫡出子として誕生した。世間に恥をさらすのを避けてエスカヨラは、ブエノス・アイレスからやって来たベルタ・ガルデスというフランス人の娼婦に、この子を渡した。彼女は後にその子をブエノス・アイレスに連れて行き、アバストで暮すことになる。このようにして、世に知られた（幼児期、学童期、活動の初期、経歴*）（*原文もカッコに入れてある）ガルデルは、ウルグアイ人の大佐の息子となる。彼女が1893年にアルゼンチンに連れて来たシャルル・ロミュアルドという子の存在がどうなったかについては十分な説明は無い。この説の根拠としてはガルデルのアルゼンチンの兵役登録証明がある。それにはガルデルはタクアレンボ生まれと記載されている。ガルデルのフランス生まれ説（原文斜体）の信奉者たちは、ガルデルが第一次世界大戦（1914-1918）の間フランスで兵役に登録されないように国籍を変更するのにこの機会を利用したのだと主張する。ガルデルのウルグアイ生まれ説については、エスカヨラのその後や、ガルデルを生んだと言う若い母親を含めて、何も語られているものはない。この説はラジオドラマから生まれたもののようにみえる。

第3章の著者はEduardo Rafael

第3章 信仰 沈黙から崇拜へ

1935年6月24日月曜日、あの寒い曇った午後、我々はコリエンテス通りナショナル劇場の向かいのカフェ Las 36 Billaresのいつものテーブルに居た。顔ぶれはカトゥンガ（原文斜体 以下同様）コントウルシ（Catunga Contursi）、エル・ネグロ モーラ（el Negro Mora）、アントニオ・マイダ（Antonio Maida）、エル・ガジェーゴ ロドリゲス・レセンデ（el Gallego Rodríguez Lesende）、フィデル・ピントス（Fidel Pintos）、エル・レンゴ タヒーニ（el Rengo Tagini）そしてマノロ・メアニョス（Manolo Meaños）だった。オーケストラ用の小さな舞台では、我々常連の集まりのアトラクションとしてペドロ・ラウレンス（Pedro Laurenz）作曲のバンドネオン演奏のための傑出した作品のレッスンが、ラウレンスの記念すべきコンフントを前にして、行われていた。我々にはとても馴染みのある大サロンでは、関心は音楽にあり、そして奥ではブエノス・アイレスの伝統あるカフェを的確に表した名前である“36台の玉突き台（36 Billares）”で、言うことを聞かない大理石の玉を転がしている常連たちの話声が途切れないでいた。そしてオルケスタはアンコールに応じてペドロ・ラウレンスのタンゴ *De puro guapo* を演奏していた。そこへ、正確には17時半、一人の新聞売り子の“*Crítica*の第5版、カルロス・ガルデルが死んだ記事が出ている”と触れまわる明らかに動揺した声が飛び込んできた。オルケスタの奏者たちは本能的に演奏を止めた。玉撞きをしていた連中は、ばね仕掛けのような動きで、大理石の玉が転がるのを停めた。完全な静寂。我々のテーブルでは全員が言葉も無くお互いをじっと見つめ合っていた。最初に舞台から降りて我々のテーブルに近寄って来たのは、当時ラウレンスの楽団のバイオリニストをしていたアルフレド・ゴビ（Alfredo Gobbi）だった。あまり

の衝撃に殆んど聞き取れないくらいの微かな声で、ようやく' ¿Qué pasó?' * (*何が起きたんだ?)と訊いてきた。誰も答えなかった。彼の苦渋に満ちた短い問いかけに全てが言い尽くされていた。何かを当意即妙に話すには、実際、余りにも長い時間が過ぎた。誰もが、あの揺るぎない沈黙の中に居続けた。暫くしてコントゥルシ (Contursi) がボーイを手招きして我々のテーブルの勘定を払った。そして我々は、気がつかないままにロボットの様な動きで立ち上がった。あのカフェに集まっていた我々ボルターニョたちは、あの動揺した新聞売り子が告げたものがどれだけのことを意味するかを知っていた。通りに出た我々と一緒に何メートルか歩いた。そして、悲しみのあまり押し黙って、挨拶もしないで別れた。カルロス・ガルデルが死んでしまったと言うことに慣れるのは、途方も無い努力が必要だった。ホアキン・モーラ (Joaquín Mora) と私はコリエンテス通りをパラナー通りに向かって歩き続けた。かなり歩いた。モーラが言った“タンゴは終わったぜ、なあ”そして我々二人が別れるまで、再び、とても緊張して厳しい沈黙が続いた。何かを当意即妙に話すには余りにも長い時間が過ぎた。ルイス・アドルフォ・シエラ (Luis Adolfo Sierra) は先の感動的な著作で要約している。ブエノス・アイレスは、声を失ったかのように沈黙することを選んだ。リセオ劇場 (Teatro Liceo) のホールには張り紙が出た。“静粛に、カルロス・ガルデルが亡くなった”。劇団が、その夜の公演が中止になることを告げるのに、この言葉以外には必要ではなかった。リベルター・ラマルケ (Libertad Lamarque) も、ティタ・メレージョ (Tita Merello) も、ラ・ネグラ・ソフィア・ボサン ('la negra' Sofía Bozán) もそれぞれの舞台からお客と共に1分間の黙祷を捧げた。フランシスコ・カナード (Francisco Canaro) はその翌日が初演の予定だったミュージカル・コメディを無期延期にした。騎手のイリネオ・レギッサモ (Irineo Leguísamo) はパレルモ競技場での当日の出走を取り消した。2日後には、ラジオが24時間タンゴを流すことを止めたが、それは全てのラジオ放送局が自らに課した沈黙であった。悲しみに沈むブエノス・アイレスを選んだものは沈黙であった。オラシオ・サラス (Horacio Salas) は言う“ガルデルの姿が、神話に固有の特徴の事実上全てに合致することは、パラダイムを超自然的なものの高みにまで押し上げるために、芸術的崇拜の念が許す狭い許容範囲を超えるガルデル信仰の起源となることでしかなかった”と。



チャカリータ墓地のガルデルの墓

メデジン空港の悲劇を知ったブエノス・アイレスを襲った衝撃は、ガルデルの母親ベルタがガルデルを葬る土地をブエノス・アイレスと決めたために、6カ月後にガルデルの遺体が戻って来たとき再び繰り返された。さらに1937年11月7日、チャカリータ墓地でのガルデル廟の除幕式の時にも同じこ

とが起きる。この日以来、祭壇に集まるガルデル崇拜者たちは、ガルデルの記憶に身を捧げる人々に変身したのだ。ガルデルへの献身は、彼を知る世代、彼の公演に拍手をした世代だけに見られるものではない。彼らの次の世代、少なくとも二世に亘るものだ。ほぼ30年の間、6月はガルデルの月だった。毎日、朝も午後も夜も、ラジオ放送局が競って放送するガルデルの声が聞こえた。ガルデルのレコードが再版され、すぐに売り切れて行った。新聞記者であり司会者である フーリオ・ホルヘ・ネルソン (Julio Jorge Nelson) は、彼の毎日の放送のテーマ曲である“El bronce que sonríe” (微笑むブロンズ像) がもはや古典と化して以来、大衆から親しみをこめてガルデル未亡人 (原文斜体) と呼ばれた。ブエノス・アイレスの中心部や街の映画館では、午後のマチネーと夜にガルデルの映画を3本上映した。モンテビデオでも、チリのサンティアゴでも、ボゴターでもメデジンでも、リマでも、プエルト・リコのサン・ホアンでも、メキシコでも、キューバのハバナでもそうなのだが、ブエノス・アイレスの映画館では、お客は椅子の上に立ちあがって“¡Otra! ¡otra!” (もう1回、もう1回) と叫んでフィルムを巻き戻させ、同じ映画を一度ならず二度までも観たり聴いたりしたものだ。

生まれ変わるかのように、ガルデルは3本の映画で再び主人公を務める。ウーゴ・デル・カリル (Hugo del Carril) (1939)、ロベルト・エスカラーダ (Roberto Escalada) (1949) および ロランド・チャベス (Rolando Chaves) (1950) がガルデルの代役の責任を果たした。これら3本の映画は、ブエノス・アイレスで受け入れられるばかりか、ラテン・アメリカ諸国で、それらの国々でもまたガルデルの想い出が偶像化から信仰へと移行していたのだが、桁外れの成功を取めた。ガルデルが死んだと言う運命論は受け入れられなかった。顔が変わってしまったガルデルが、アメリカ大陸の何処かに現れたことを伝える国際通信社の通信がしばしば飛び交った。既に1939年にCRÍTICA が伝記作者と写真家を派遣して、ボゴタ発のニュース、すなわち眼が見えなくなり顔にはやけどを負い、老けて貧しいガルデルがボゴタの町はずれに、自らの意思で名を名乗らずに隠れ住んでいると言う内容を調査させている。当然のことだが、何の証拠も得られなかった。そして30年後、1969年8月20日に同じような幽霊が騒いだ。その日のCRÓNICA の朝刊の21頁の見出しのトップは“顔が壊れたカルロス・ガルデルがコロンビアに隠れて生きているらしい”と言うものだった。



“Tomo y Obligo” を歌うカルロス・ガルデル。映画“Luces de Buenos Aires” の名場面。Youtubeより。

変わってしまったガルデルが、アメリカ大陸の何処かに現れたことを伝える国際通信社の通信がしばしば飛び交った。既に1939年にCRÍTICA が伝記作者と写真家を派遣して、ボゴタ発のニュース、すなわち眼が見えなくなり顔にはやけどを負い、老けて貧しいガルデルがボゴタの町はずれに、自らの意思で名を名乗らずに隠れ住んでいると言う内容を調査させている。当然のことだが、何の証拠も得られなかった。そして30年後、1969年8月20日に同じような幽霊が騒いだ。その日のCRÓNICA の朝刊の21頁の見出しのトップは“顔が壊れたカルロス・ガルデルがコロンビアに隠れて生きているらしい”と言うものだった。

ガルデル神話の中のご落胤譚はもう古典的なものになっている。1973年にカラカスで、ガルデルのポーズや仕草を真似て歌ったスペイン人の歌手が記者たちの前で自分はガルデルの孫でセサル・ガルデル (César Gardel) と言うのだと名乗った。これとは別にウルグアイ人女性のグラディス・ディーアス・ロメーロ (Gladys Díaz Romero) がガルデルの相続権を主張した。彼女の言うところによれば、自分はモンテビデオで1932年の或る日の、母親のマリーア・セシリア・ディーアス・フェルナンデス (María Cecilia Díaz Fernández) とガルデルとの間のひと時の情事の果実なのだと。

こうした物語は、嘘だとしても伝説を彩るものだ。今でも70歳代の祖父たちは孫に、ガルデルの顔写真を愛しみながら、それらの写真を家の中庭で大事そうに手にしたり、タクシーのフロントガラス

に張り付けてあったり、乗合バスの鏡や軽トラックの中の額に入れたものであったりするのだが、どうやって自分たちがこうした物語を組み立てるのに力を貸したかを物語る。毎年6月24日には、多分ガルデルの幽霊たちが現れて街を駆け巡り、歌いそして挨拶するのを、真夜中まで期待を込めて待ったものだ。1950年代の初期にホルヘ・ビダル（Jorge Vidal）は、勇敢にも真似をしようとするものたちを追い払うような早さで歌ったものだ。

小首かしげた鍔広帽子
胸には白いハンカチ挿して
そしたら権利があるものと
あのモローチョを押しつける
フランス風のパンタロン
いとも易しく軽やかに
ポスター観ながら真似するように
考え違いをするじゃない
たとえ千年経ったとしても
ガルデルがもうひとり生まれはしないのだから*

(*「No hay otro Carlos Gardel」 曲 Ángel Mazzola 詩 Alfredo Santos Bustamante milonga の一部)

今でも人は愛着を込めてガルデルのレコードを聴く。ガルデルの卓絶した、競争する相手のいない声を聴く。こうして神話は生まれ、育つのだ。ウンベルト・エーコ（Umberto Eco*）（*1932年 アレクサンドリア生まれ。中世美学研究者・記号論学者・小説家・ジャーナリスト。映画「薔薇の名前」の原作者。新潮社刊「ウンベルト・エーコの文体練習」カバーより）は次の様に説明する。歴史の或る瞬間に於けるひとつの地域社会全体が持つ渴望と風潮とが、その人に投影されるとき、人は誰でも神話の中の英雄になれる。我々の時代の神話の英雄は、二つの異なる世界の市民である。一面では、我々の中の誰かのように我々の住む世界の現実の存在である。街に行く人は、あたかも鏡で自分を見て認識するかのよう、簡単に自分を英雄に出来る筈だ。別の面では、ひとつの理想型として純粋に精神的な世界を共有し、そして、流れ去り、避けることのできない死へと導く時間と言うものを越えた彼方において、時間を否定する次元から輝くのだ。この定義は、実在した理想型であるガルデルに十分に当てはまる。

街に行く人は、この理想型に鏡を見るように自分を一体化する。もしかするとホセ・バルシーア（José Barcia 1911-1985 ブエノス・アイレス生まれのジャーナリスト・作家・辞書編集者・コラムニスト Wikipedia などから）が言い当てたように“人々はガルデルの声と心に一体化したように感じるものだ。何故なら、人々は自分自身を聴くために、自身の内奥をガルデルの声と心に置き換えたことを間違いなく知っているからだ”。

（以上で第3章まで了）

（日本タンゴアカデミー機関誌Tangueando en japon（非売品）第32号より）



トゥルーズはフランスのどのあたりにあるか



タクアレンボーはウルグアイのどのあたりにあるか

Filiación (1)

Color de la piel: blanca-triguena—negra.

Ojos: azules-verdosos—pardos-negros; cílios—medianos—grandes.

Nariz: recta—aguiñada—deprimida; —ethica—mediana—grande.

Talla: 1 metro y 70 ¹/₂ cms.

Seña particular: NINGUNA

Datos del enrolamiento anterior: Clase 1887

D. M. N° 2 Matrícula N° 1717 Oficina Enroladora de D. M. N° 2

y con actual domicilio en: Capital Federal

Provincia o territorio Capital Federal

Partido o departamento 10°

Cuartel, pedanía o sección 10°

Ciudad, pueblo, localidad, paraje o isla Rincón N° 157


Calle (2) Carballardel

Firma del enrolado Carballardel

Lugar y fecha de enrolamiento Capital Federal
21 Junio de 1927

Sello.

Impresión digital del dedo pulgar de la mano derecha



REPUBLICA ARGENTINA
SECRETARÍA DE DEFENSA
ENROLAMIENTO FEDERAL
CAPITAL FEDERAL
TURNO B
El día de inscripción de la firma o del nacimiento.

REPUBLICA ARGENTINA

División 1 Distrito Militar N° 2


Oficina enroladora de Sección 10°

Matrícula individual N° 236001

Clase de 1887 (el año de nacimiento).

Libreta de enrolamiento del ciudadano Carlos Gardel

nacido el 11 de Diciembre de 1887
en Tesucumbó - Río de Uruguay



SECRETARÍA DE DEFENSA

ガルデルを1887年12月11日、ウルグアイ、タクアレンポー生まれとする証明書

マヌエル・ピサロ研究 (前篇)

—リスクに挑戦し、道を切り拓き、挫折を乗り越え、成功を勝ち取ったその人生と音楽—

齋藤 富士郎

まえがき

マヌエル・ピサロ (Manuel Pizarro) は「海を渡ったポルテーニョたち」*) の中ではエドゥアルド・ビアンコ (Eduardo Bianco) と並び称される存在で、彼のレコードは戦前から我が国のタンゴファンの間では愛好されてきた。アルゼンチンでも彼の名前は知られてはいるが、活躍の舞台がパリであったので、特に研究の対象となることは無く、アルゼンチンではまとまった復刻LP/CDも無いようである。

筆者自身もピサロを愛聴しているので、興味を持って彼の生涯を資料によって調べてみたところ、これが我々にとって大変教えられることの多い人生を送った人であることがわかった。それで私の理解し得た範囲で彼の生涯とその音楽の足跡をまとめてみることにした。全体はかなりの分量になるので、前・



後編の2部に分け、今号では前篇として彼の出生から第2次世界大戦直前までを取り上げ、次号の後編で彼の後半生とその音楽、録音活動などについて取り上げたいと思う。

(1) ブエノス・アイレス時代 (1895年 - 1920年)

バンドネオン事始め

ピサロは普通、Pizarroと綴られるが、オスカル・スッキ (Oscar Zucchi) によれば本来のイタリア家名はSeria Pizzaroであるそうだ [1]。だから発音も本来は「ピツァロ」なのだろう。我が国でも元男爵の目賀田綱美氏は「ピサロ」ではなく「ピツァロ」と言っておられたということを何人かの人から聞いたが、推察するに1920年代のパリのキャバレーやダンスホールでは案外「ピツァロ」が一般的であったのかもしれない。しかしここでは勿論「ピサロ」で通す。



マヌエル・ピサロは1895年11月23日 (日本流に言えば明治28年) に生まれた。生家はブエノス・アイレスのアバスト地区ビリングウルスト (Bilinghurst) 通り877番地にあり、イタリア出身の父親のドン・アルフォンソはアバスト市場で働いていた。アルフォンソは「ドン」という敬称がつく位であるから、それ相当の地位であったと思われる。ピサロの実家は草創期のタンゴ人によくあるような極貧家庭ではなかったと想像される。アルフォンソは15人の子福者で、その内8人が男の子であり、その内5人がタンゴ人になった。ピサロは長男であったらしい。

ピサロは始めから音楽家を目指したのではない。10代の頃はある機

*) これは言うまでもなくポルテナ音楽同好会制作のCD「海を渡ったポルテーニョたち」(CD-1209) のタイトルであるが、便利な表現なのでそれをそのまま流用させてもらうことにした。

械工場で働いており、そこの熟練労働者になることを目指していた。しかし、1909年、14歳の時にフアン・マグリオ「パチョ」が近所の理髪店で弾いていたバンドネオンの音色に魅せられ、父親の強い反対を押し切って、パチョの下でバンドネオンを習うこととなった。幸いにも、祖母がへそくりをはたいてバンドネオンを買ってくれた。その価格の200ペソは当時でも大金であった。こういうことから彼の実家が極貧家庭ではなかったことが想像される。

彼の上達は早く、1年程経つと地元のパティオやカフェで演奏して、小遣い位は稼げるようになった。そうは言っても腕前は未だ未だで、当時まだ無名であったガルデルの伴奏をしたこともあったが、ついてゆくのが難しかった、と彼自身が回想している。また、この頃、フルート奏者でピアノ教師でもあったカルロス「エルナニ」マッキ（Carlos “Hernani” Macchi）の下で音楽理論を学んだ。

プロのバンドネオン奏者として

1913年頃には腕前も上がり、フアン・マグリオ「パチョ」の楽団で休憩時間やマグリオがたまたま不在の時に彼に代わって演奏した。実はマグリオは女好きで、気に入った女性に出会うと2、3日雲隠れすることがあった。「不在」とはそういう意味である。しかしマグリオのそうした性癖が結局彼の没落を早めた、とピサロは言っている。

記述を簡潔にする目的で、これ以降の彼の活動は箇条書きで示す：

- 1913年～1914年頃、フルート奏者の「エル・ターノ」ビセンテ・ペッシ（Vicente Pecci “El Tano”）、アルベルト・マスカッチーニ（Alberto Mascazzini）ともう1人名前が不明のバイオリン奏者、それに彼自身のバンドネオンによる4重奏であちこちのバイレで演奏する。
- 1915年にバイオリンのフランシスコ・カナロとギターのエル「ネグロ」オルティス（el “Negro” Ortiz）と彼自身の3人でトリオを組み、地方を巡業し多くのバイレで演奏した。カナロはバイオリンを演奏する時にその独特の動きから「カクテルシェーカー」とあだ名されたという。
- この頃、バイオリン奏者の「ティト」ロカタグリアータ（“Tito” Roccatagliata）とエルネスト・ポンシオ（Ernesto Ponzio）、ピアニストのニールス・ホルヘ・パウロス（Niels Jorge Paulos）（ペレグリーノ・パウロスの弟）、及び彼自身の4重奏を組んだが、これは大失敗だった。ポンシオは喧嘩っ早く、他のメンバーも規律を守らなかったからである。「ティト」ロカタグリアータとは別な楽団編成で演奏旅行したこともあったが、その時も「ティト」の飲酒癖とホテルのメイドとのいざこざでホテルを追い出される始末であった。
- 1916年には、ピサロはフルート奏者のカルロス「エルナニ」マッキが主宰するコンフントにフアン・カルロス・ロドリーゲス（Juan Carols Rodríguez）（ピアノ）、アルシーデス・パラベシーノ（Alcides Palavecino）（バイオリオン）と共に加わった。このコンフントは録音もしているがレーベル名は不明である。スッキは「エラ（Era）」レーベルではないかと推測しているが[1]、確証はない。
- ピサロはアローラスのオルケスタにも在籍したことがある。ピサロによればアローラスはバンドネオンの名手ではなかったが音楽性においてフアン・マグリオに優っていたという。
- 1917年～1918年、ピサロは彼自身とフアン・カナロ（Juan Canaro）（バンドネオン）、ペレグリーノ・パウロス（Peregrino Paulos）とドミンゴ・ペティジョ（Domingo Petillo）、そして後者の兄弟のライムンド・ペティジョ（Raimundo Petillo）（ピアノ）からなる5重奏団で活動した。



- 1918年には指揮者としてTelephoneレーベルで録音デビューした。また同年、ウンベルト・カナロ (Humberto Canaro) (ピアニスト) とエステバン・ロバティ (Esteban Rovati) 及びピセラ (Pizella) (共にバイオリン奏者) を伴ってコルドバを巡業し、そこでシリアコ・オルティス (Ciriaco Ortiz) に出会った。

フランス行きを決意する、そして実行

1918年、コルドバから戻ったピサロはブエノス・アイレスの「マイプ (Maipú)」というバルで5人のフランス人音楽家と共に働き始めた。ある時、1人のフランス人がフランスではどのようにタンゴを演奏しているかをやって見せてくれた。それはブエノス・アイレスで行われているタンゴとは全く違ったものであった。それでピサロは「いつかフランスに行って本当のタンゴ・クリオジョとはこういうものだということを彼らに知らしめたい」という願望を抱くようになった。そして年月が過ぎた。

1920年のある夜、ピサロはコリエンテス通りでたまたま出会ったフランシスコ・カナロから「フランスのマルセイユのプロモーターのロンバル (Lombart) の依頼を受けて現地で演奏活動をする音楽家を探している」ことを聞いた。そしてカナロは更に「興味があるなら行ってみてはどうか、もし引き受ける気があるならば同行する仲間と一緒に探そう」とも付け加えた。ピサロはその提案を受け入れた。

ロンバルとの契約条件は、毎日50フランのギャラでマルセイユのキャバレー「タバリス」1年間活動すること、であった。このギャラが結果としてピサロをパリに向かわせるきっかけとなる。

ピサロより9歳年長の「ターノ」ヘナロ・エスポーシト (“Tano” Genaro Expósito) が同行することになった。「マイプ」で働いていたフランス人の仲間からはバイオリン奏者のヴィクトル・ジャシア (Victor Jachia)*¹⁾ が通訳兼務ということで同行した。芝野 史郎氏はこの時ピサロはバイオリン奏者として参加したと記載している[6]。芝野氏がどのような資料に依ったのかは明らかでないが、恐らくその資料が間違っていたのだろう。

(2) パリ進出 (1920年～1921年)

单身、パリに向かう

ピサロ、ヘナロ、ジャシアの一行は1920年8月15日に定期船「ガロナ」号でマルセイユに向かった。航海の途中でジャシアが病気になり、薬石効なく死んでしまったので、遺体は水葬に付した。

マルセイユに到着したピサロとヘナロはフランス人音楽家を加えた「オルケスタ・ヘナロ・ピサロ」を編成し、キャバレー「タバリス」に同年9月にデビューした。

オルケスタは好評であったが、15日後に契約額のギャラを手にして、それが最低限の食費をカバーするだけのものであることに気が付いた。フランスの事情を知らないピサロが、そしてカナロも、狡猾なプロモーターにだまされていたのである。フランス人のジャシアには実はそのギャラが僅かのものであることは前もってわかっていた。しかし、彼はマルセイユにいる家族と再会したいがために同行したのであった。しかしすでに彼は死んでしまったので文句の言いようがない。

そこでピサロは自らロンバルとの談判に及んだ。この時点でまだ彼はフランス語を良く話したとは思えないが、何語で話したのだろうか？ 兎に角、ピサロはロンバルを前にして半時間に及ぶ大

*) フランス人であるので「ハチア」ではなく「ジャシア」と表記した。アルゼンチンの文献でも Yacia と表記している例もあるそうだから「ジャシア」でよいのだろう。

演説をぶった。大演説の後、ロンバルは皮肉っぽく「よかろう、1年後に話し合おう」と答えた。「賃上げ交渉」は失敗に終わった。

「ターノ」ヘナロはすっかり落胆して、乗って来たのと同じ船でブエノス・アイレスに帰ろうと言いついで出た。ピサロも帰ろうと思えば帰れたはずである。しかし彼はそうしなかった。彼は「負けて帰っても誰も扉は開けてくれないぞ。私に考えがあるから、少し待っていてくれ」と先輩のヘナロを励まし、その夜、単身パリに向かった。幸いにもピサロは当面の生活費を賄えるだけの蓄えは用意していた。ピサロは当時未だ25歳であったが、相応の経済感覚は持っていたようだ。

マルセイユーパリ間は現在ならばTGVで3時間であるが、1920年当時は汽車でまる一晩かかり、翌朝パリに着いた。1920年10月のことである。

西も東もわからない初めてのパリで、フランス語もまだそれほど話せないのに、迷いながらもフランス領事館に辿り着き、1914年に渡仏して、第1次世界大戦中もパリに居残ったピアニストのセレスティーノ・フェレール (Celestino Ferrer) とバンドネオン奏者のグエリーノ・フィリポット (Güerino Filipotto) の消息を尋ねた。2人はフォンテーヌ (Fontaine) 通りのキャバレー「プリンセス (Princesse)」で働いており、領事のビセンテ・マデロ (Vicente Madero)^{*} が「プリンセス」の経営者のヴォルテラ (Volterra) を紹介してくれたので、ピサロは「プリンセス」で2人に再会できた。

10人編成のオーケスタを組織する

「プリンセス」でフェレールとフィリポットはもう1人のバイオリン奏者のホセ「ペペ」シウット (José “Pepe” Sciutto) との3人でトリオを組み、12人編成のジャズバンドと交代で演奏していた。しかし、12人編成のジャズバンドと比べてトリオは如何にも貧相であった。その上、フェレールとフィリポットは楽譜が読めず、演奏スタイルも古い時代のものであった。

そこでピサロはヴォルテラに10人からなるオーケスタ・ティピカを編成することを提案し、マルセイユのヘナロに電報を打った。ヘナロは2日後にはパリにいた。

ピサロ、ヘナロ、フェレール、フィリポット、シウットの5人に更に5人のフランス人のバイオリン奏者たちが加わった。彼らは演奏家としては優れていたが、タンゴについては素人同然であり、ピサロは彼らにタンゴ演奏を一から教える必要があった。例えば、クラシック音楽では1本指で行うピッチカートはタンゴでは3本指でやっていた。言葉で行っても駄目なので、唯一可能な教授方法は真似させることであった。こうしてオーケスタがデビューを果たすまでに15日間かかった。

「プリンセス」改め「エル・ガロン」でのデビュー

1920年12月、マヌエル・ピサロのオーケスタは「プリンセス」改め「エル・ガロン」でのデビューを果たした。「プリンセス」の経営者のヴォルテラはオーケスタ・ピサロのデビューに先だって店の名前をパリ在住のアルゼンチン人たちにもっとアピールするように改名することを考えていた。そんな時フェレールが雑談の最中に「エリー (ヴォルテラのこと) はアルゼンチン風のキャバレーを満員にしてフランス人のgarroneを救おうとしている」と言ったことを取り上げ、店の名前をgarroneに因んで「エル・ガロン (El Garrón)」とした。Garroneとはルンファルドで「他人のお蔭で生活する人」の意味である。それは食うや食わずの貧乏人ではなく、反対に人に働かせて自分は裕福な暮らしをし

*) 参考資料 [3] には“領事”とあり、参考資料 [1] では“アルゼンチンのアミーゴ”となっている。ここでは [3] にならって“領事”とした。また、この辺の経緯は資料間で異同があるので、この記述は要約レベルである。

ている人々を指すのであろう。

デビュー当日、「エル・ガロン」には斯界の名士たちや有名芸能人たち、パリ在住のアルゼンチン人たちが詰めかけた。その中には当時のアルゼンチン大使で後にアルゼンチン大統領になるマルセロ T. デ・アルベアル (Marcelo T. de Alvear)、「ミスタンゲット (“Mistinguette”）」(これは芸名)、モーリス・シュヴァリエ (Maurice Chevalier)、ロドルフォ・ヴァレンティノ (Rodolfo Valentino) などの名前も見えた。

フランシスコ・カナロが1925年にパリ公演を果たしたとき、フランスの音楽組合保護法による規制を免れるために全員が gaucho の衣装を身に着け、アトラクションの一部という形式で出演したことは良く知られている。その gaucho の衣装は一般にはカナロがたまたま用意していったもので、それが役に立ったのだと説明されている。これに対して小林 謙一氏は音楽組合保護法といった基本的問題を何故事前に把握していなかったのだろうか、という疑問を提起しておられる (Tanguendo en Japón, No.29 (2012), p.60)。

実はカナロは前もって知っていたらしい。と言うのは、ピサロのオルケスタが「エル・ガロン」でデビューする時に、恐らくヴォルテラの発案で、カナロが言っているのと全く同じ理由で全員が gaucho の衣装を着け、アトラクションの形で出演しているのである。但し、ピサロたちの衣装は現地仕立てであった。カナロのパリ公演に先立つ4年ほど前のことである。周到なカナロはこういうことを前もって調査の上で、gaucho の衣装を用意して行ったと考えられる。そしてアルゼンチンではそういうことを誰も知らないことをいいことに、何食わぬ顔でそれを自分の発案にしてしまったのだろう。カナロの発案の当否についてはブーランジェも否定的見解を示している [5]。カナロのこういうところはいただけないが、この種の人間は私達の周囲にも少なくない。

演奏は「ラ・モロチャ」*)に始まり、「エル・チョクロ」、「ラ・カトレラ」、「デレチョ・ビエホ」と続き、同じ曲が何回も繰り返され、夜明けまで延長された。聴衆は魅了され、拍手大喝采であった。しかし、誰も踊ろうとはしなかった。パリッ子たちにとって真正のアルゼンチン・タンゴのステップは難しく、一方、パリ在住のアルゼンチン人たちもパリッ子に遠慮して踊ろうとしなかった。

2日目の夜、一計を案じたヴォルテラはピサロに聴衆の中にいた無声映画の大スターのヴァレンティノにタンゴを踊ってくれるように頼むことをアドバイスした。ピサロの頼みに応じてヴァレンティノはハリウッド風のステップではあったが、「エル・チョクロ」に乗ってタンゴを踊った。これが契機となって皆、熱狂してタンゴを踊りだした。これが電撃的成功となり、「エル・ガロン」はいつも人で溢れた。



「エル・ガロン」の現在の姿。一部を残して改築されている。(撮影：加年松城至氏 (1996年))

(3) 栄光への道、しかし第2次世界大戦勃発 (1921年～1939年)

栄光への道

「エル・ガロン」での成功を足掛かりに、ピサロは栄光への道を突き進む。「エル・ガロン」での活動を続けながら、それと並行して他の方面でも活動した。以下、それを再び箇条書きに示す：

- 1921年、アントワーヌ (Antoine) 劇場での上演演目のフィナーレに出演し、それは3週間続いた。

*) 参考資料 [4] では「エル・エントレリアーノ」で始まったとされている。

同様の仕事を「カジノ・アンピール (Casino Empire)」でも行った。

- 更に「ワシントン・パレス (Washington Palace)」、「レルミタージュ (L'Ermitage)」、ブローニュの森の「アルメノンヴィル (Armenonville)」での活動が続いた。
- 1921年6月24日、ヘナロとピサロは「オルケスタ・アルヘンティーナ・ヘナローピサロ」と銘打ったオルケスタで、ブローニュの森の「パヴィヨン・ドーフィーン (Pavillon Dauphine)」に出演した。これを最後としてヘナロとピサロは袂を分かち、ヘナロはその後自分の楽団で活動を始め、1944年パリで亡くなる。
- 1922年、ピサロはフランス大使であったマルセロ T. デ・アルベアルがアルゼンチン大統領に選ばれてアルゼンチンに帰国するための船中で演奏することを依頼され、「エル・ガロン」での活動を一時休止して依頼に応じた。この時、ピサロはデ・アルベアルに自作曲“El Estandarte(旗印)”を献呈した。彼はブエノス・アイレスに到着したら、同じ船ですぐにフランスに戻るつもりでいたが、フランシスコ・ロムートの提案を受けて、ポロニオ船長 (Cap Polonio) が率いるティエラ・デル・フェゴまでの3隻のクルージングに同行し、演奏した。結局、4か月間フランスを留守にした。
- 1923年、ピサロは10人編成の楽団を率いてベルリンに行き、高級ホテルの「アドロン (Adlon)」で夕刻はサロン・ド・テ (Salon de té) (ティー・サロン) で、夜はサロン・レストランで演奏した。



1925年のマヌエル・ピサロ楽団。バンドネオン奏者はピサロ (左) とフィリポット (右)。ギター奏者は恐らくドミンゴ・ピサロ、バイオリン奏者は恐らくミゲル・タンガ。更に資料にはゴドフレド・ミネ、エドゥアルド・ブロッツ、ダヴィラ・ミランダの名前が挙げられているが、人物の同定はされていない。
(<http://www.eltangoyusunvitados.com/2008/11/manuel-pizarro-biografia.html>)

- 1924年、ピサロは28人のメンバーからなる巨大オルケスタを編成し、パリ・オペラ座での大イベントに出演した。
- 1924年、グラモフォン・レーベルにフランスでの初録音をする。
- この頃、フランス革命記念日 (日本流に言えば巴里祭) の7月14日に、ピサロはオルケスタでパリの地区々々を巡回演奏して回り、キャバレーに集まる人々に対してのみならず、一般の民衆の間にも真正のタンゴを普及することに努めた。彼はこのことを非常に誇りに思っていたようだ。
- 1925年、オルケスタ・ピサロはパリの中心部のサン・トノレ (St. Honoré) 通りのフォーブール・ド・プレイエ音楽堂 (Faubourg de Pleyer)^{*} で演奏会を開き、またあるチェーン映画館のためにパリ中を巡演した。
- 1925年のアール・デコ (Arts-Déco) 博覧会では、ピサロのオルケスタはデザイナーのポール・

^{*} プレイエ (Pleyer) はウィーン生まれの作曲家で、パリで有名なピアノ製作所を開いたことで有名。

ボワレ (Paul Poiret) のために、セーヌ川のアレクサンドル3世橋近くに係留されていた3艘のヨットの上でのアトラクションとしてタンゴを演奏した。

- 1926年、シャン・ゼリゼ (Champs Élysée) 通りのキャバレー「エルミタージュ (Hermitage)」に出演する。
- 1927年、有名なキャバレー・レストランの「リド (Lido)」に出演。
- 1929年、スペイン、マドリッドの「マラビジャス (Maravillas)」劇場やキャバレー「エスタンプル (Estambul)」に出演。
- 1931年、英国、ロンドンの「サヴォイ・ホテル (Savoy Hotel)」で7か月間公演する。

楽団の強化

こうした演奏活動は「エル・ガロン」での活動と掛け持ちで行われたので、複数の楽団での活動も必要になった。それでピサロは以下のように、楽団の強化に努めた。

1921年にギター奏者で歌手でもあった弟のドミンゴ (Domingo) をブエノス・アイレスから呼び寄せ、オルケスタのメンバーに加えた。又、同年、アリナ・デ・シルバ (Alina de Silva) を歌手に加えた。彼女はクラシックの声乐は学んでいたが、タンゴの歌い方は知らなかったのでピサロは彼女をタンゴ歌手として訓練し、成功に導いた。

1922年、ピサロは前述のような短期間の一時帰国からフランスに戻る際に、補強要員としてバイオリン奏者のミゲルとギター奏者のホセのタンガの兄弟 (Miguel y José Tanga) と弟のサルバドル (Salvador) とアルフレド (Alfredo) (共にバンドネオン奏者) を同伴した。

1925年にアルゼンチン出身でバンドネオン奏者のホセ・レモンディニ (José Remondini) が加わった。彼は盲人^{*}) であったが、耳は確かで、ピアノも演奏出来た。彼はその後アルゼンチンに戻ることは無かった。この年はまたアルゼンチンから到着したバンドネオン奏者のアルベルト・セレンサ (Alberto Celenza)、アントニオ・ロマノ (Antonio Romano)、エウスタキオ・ラウレンス (Eustaquio Laurenz) と歌手兼ギター奏者のルイス・マンドリーノ (Luis Mandrino) がピサロのオルケスタに加わった。

後にピサロのライバルとなるエドゥアルド・ビアンコ (Eduardo Bianco) も1925年の数か月間、ピサロのオルケスタに在籍していた。

1928年にピサロ兄弟の最後の1人であるフアン・ホセ (Juan José) がアルゼンチンからやって来た。

表1はピサロ楽団に在籍したことがある音楽家のリストである。カルロス・マルクッチやアヘシラオ・フェラサーノも一時期在籍したことがあるようだ。

事業家としてのマヌエル・ピサロ

1928年頃になるとマヌエル・ピサロの楽団は単一の組織ではなく、「エル・ガロン」で活躍する自分のオルケスタの傘下に5組の子楽団を持つに至った。それぞれの子楽団のリーダーはマヌエルの弟たちが務めたが、名前にはマヌエル・ピサロの名前が冠せられていた。更に、この年には歌手のロベ

^{*}) 今日我が国では「盲人」という言葉は差別用語として公には使用できない。しかしレモンディニの場合はあだ名も“el cieguito”で訳せば「おめくらさん」である。だからといって周りが彼を差別しているかということ、事実は全く反対で、優秀な演奏者として他のメンバーと平等に遇されている。用語を制限してすべてが解決するはずはなく、行動で示すことが基本である。だからここでは敢えて「盲人」という言葉を使用した。

ルト・カルダス (Roberto Caldas)、バンドネオン奏者のフーリオ・フェルナーンデス・ファルコーン (Julio Fernández Falcón)、バイオリン奏者のエステバン・ロバティ (Esteban Rovati) がピサロの楽団メンバーに加わった。



マヌエル・ピサロ楽団。年次は不明。人物もピサロ以外は特定できないが、ギター奏者の横にいるバンドネオン奏者は目を閉じているようなので、レモンディニかもしれないが、確証はない。

1929年、ピサロは10年間働いた「エル・ガロン」からの独立を果たし、先ずモンテカルロ市の「ラ・プラントーション (La Plantation)」を取得した。ここではカルロス・ガルデルが1週間ほど出演したことがあるが、その時ガルデルは出演料を受け取ることを固辞したという。次いでパリのピガール通りに「セヴィラ (Sevilla)」、「ピガール (Pigalle)」を開店した。1932年には「ピガール」の音楽家とマネージャを入れ替え、「ビジャ・ロサ・ピガール (Villa Rosa Pigall)」として再出発させた。同年、ピガール通りのキャバレー「モニコ (Monico)」を買い取り、翌1933年に「シェ・ピサロ (Chez Pizarro)」と改名し、自らの拠点とした。同年、スイスのジュネーブにも高級キャバレー・レストランを開業した。ピサロは中々の事業家でもあった。

1932年には新たにドイツに演奏旅行し、6か月間でミュンヘン、ケルン、ハンブルグ、ベルリンを歴訪・巡業した。

1937年、ピサロのオーケスタはパリ万博でのアルゼンチン・パビリヨンのアルゼンチン・レストランで夜毎に演奏した。それは6か月続いた。このレストランはアレクサンドル三世橋の近くにあり、あるジャーナリストによると、そこでの朝食の代金は40フランであったという。それが現在の貨幣価値でどれ位になるかは見当がつかないが、「目の玉が飛び出る」ものであったに違いない。

こうして成功への道をひたむきに進んだピサロであったが、そこに第2次世界大戦が勃発した。

(以下、次号に続く)

参考資料

Oscar Zucchi, "El Tango, el bandoneón y sus Intérpretes" Tomo II, pp.764-815

http://www.todotango.com/english/biblioteca/cronicas/entrevista_inicio_pizarro.asp

http://www.todotango.com/english/biblioteca/cronicas/entrevista_pizarro_partedos.asp

Alain Boulenger, "ARGENTINA IN PARIS MANUEL PIZARRO 1924-1950" FA 5019 (CD) (Fremeaux & Associés) 付属パンフレット

Alain Boulenger, "TANGO A PARIS 1907-1941" FA012 (CD) (Fremeaux & Associés) 付属パンフレット

芝野 史郎、「欧州で活躍したタンゴの使節たち (第4回)」、TANGEANDO EN JAPÓN, No.10 (2002) pp.48-63

表1 マヌエル・ピサロ楽団に在籍した音楽家たち（姓のアルファベット順）（参考資料 [1] による）

バンドネオン奏者	José Appendino; Héctor María Artola; Eusebio Botta; Primo Corchia; Julio Fernández Falcón; Güerino Filipotto; Eustaquio Laurenz; Tito Leoni; Víctor Lomuto; Ángel Maffia; Carlos Marcucci; Rodolfo Nerone; Juan Pecci; Alfredo Pizarro; Juan José Pizarro; Salvador Pizarro; José Remondini; José Schumacher
バイオリン奏者	Emilio Armengol; Avoli; Eduardo Bianco; Coni; Agesilao Ferrazano; Juan Andrés Ghirlanda; Esteban Rovati; José Sciutto; Miguel Tanga
ピアノ奏者	Francisco Alongi; Germán Araco; Ángelo Burlí; Luis Elía Cosenza; Juan Cruz Mateo; Fabregues; Celestino Ferrer; Juan Levesque; Roberto Tammara; Telleria; Enrique Vacarezza
コントラバス奏者	Módena
ギター奏者	Celestino Ferrer; Luis Mandrino; Domingo Pizarro; José Ricardo; Rafael Ricardo; José Tanga
歌手	Roberto Caldas; Eva de Erso; Garacia del Río; Alina de Silva; Aída Galán; Celia Gámez; Juan B. Giliberti; Jorge Linares; Roberto (Domingo) Maida; Luis Mandarino; Manfredi; Marival; Domingo Pizarro; Juan Raggi; Luis Scalón; Francisco Todarelli
担当楽器不明	Eduardo Blotz; Miranda Dávila; Godofredo Minet



シリーズ・資料再見 (1)

(編集部より：このシリーズはLP・SPレコードのライナーノートや古い書物・資料のような現在では入手困難な資料の中からNTA会員にとって特に参考となるであろうものを発掘することを目的として企画しました)



フランシスコ・カナロの年表

"LA VIDA DE F. CANARO (カナロの生涯)" 第1巻～第10巻、EMI=Odeon EOS-40011～40020 (監修：蟹江丈夫) のライナーノートに基づいて編集部で作成

西暦年	事象
1888年	11月26日、ウルグアイのバンダオリエンタル州サン・ホセ・デ・マジョ町に生まれる。間もなくアルゼンチンのブエノス・アイレス市へ移住。幼時より音楽が好きで、ギター、マンドリンを習う。少年時代オリーブ油の空缶でバイオリンを手作りした話は有名。のち本物のバイオリンを習得。
1906年	友人のマルティン・アレピジャガー (マンドリン)、ロドルフォ・ドゥクロス (ギター) とトリオを組みランチョスでデビュー。
1907年	ドミンゴ・サレルノ (ギター) とサン・ペドロへ出稼ぎに出る。
1908年	サムエル・カストリオータ (ピアノ)、ビセンテ・ロドッカ (バンドネオン) とトリオを結成し、ボカの「カフェ・ロジャール」に出演。処女作のタンゴ「ラ・バーラ・フェルテ」を作曲する。
1911年	ビセンテ・グレコ (バンドネオン) とドミンゴ・グレコ (ギター) 兄弟のコンフントに参加、カフェ「エル・エストリーボ」に出演。同年コロムビア・レコードに録音。
	 <p>ビセンテ・グレコ楽団のメンバーとしてのフランシスコ・カナロ (左端)</p>
1912年	「ピンタ・ブラーバ」を作曲。
1914年	「エル・チャムージョ」、「エル・アラ克蘭」、「マタサーノ」、「エル・インテルナード」を作曲。第一回医学生祭のバイレにコンフントをひきいて出演。(第一次世界大戦はじまる)
1915年	「エル・ポジート」、「チャラムスカ」を作曲。ホセ・マルティネス (ピアノ)、ペドロ・ポリト (バンドネオン) とトリオを組み、エラ・レコードに初録音。
1916年	「カラ・スシア」を作曲。ロサリオのカルナバルに出演。カナロ楽団にオスバルド・フレセド (バンドネオン) が参加。コリエンテス街の「モンマルトル」に出演。レオポルド・トンプソン (ベース) がコンフントに加わり、カンジェンゲ奏法を創始。アトランタ・レーベルで録音を始める。
	 <p>フランシスコ・カナロ楽団 (1916年)</p>

- 1917年 ロベルト・フィルポ（ピアノ）と共同でグラン・オルケスタを結成、ロサリオのカルナバルに出演。メンバーにエドゥアルド・アローラス（バンドネオン）、ミノット・ディ・チコ（バンドネオン）、ファン・ダンプロヒオ（バンドネオン）、アヘシラオ・フェラサーノ（バイオリン）などが参加。
- 1918年 再びグラン・オルケスタでロサリオのカルナバルに出演。「ロス・インディオス」、「ラ・タブラーダ」、「スフラ」、「ノブレサ・デ・アラバル」を作曲。（第一次大戦終わる）
- 1919年 オルケスタ・カナロにアンセルモ・アイエタ（バンドネオン）、ラファエル・トゥエゴルス（バイオリン）が参加。サイネーテ「ノブレサ・デ・アラバル」上演。
- 1921年 ディスコ・ナシオナル・オデオンと契約、第一回の録音は録音番号1097（レコード番号6901番）の「エル・ウエルファノ（アイエタ作曲）」。
- 1922年 「エル・ピンチエ」などを作曲。
- 1923年 「センチミエント・ガウチョ」、「デステージョス」、「ラ・ガルソニエレ」を作曲。
- 1924年 オデオン・レコードの第一回作曲コンクールで「センチミエント・ガウチョ」が一等に入賞する。
- 1925年 「ティエンポス・ビエホス」などを作曲。出演中の「タバリス」にミノット・ディ・チコとルイス・リカルディなどを残して、第二楽団を作りパリへ演奏旅行におもむく。パリの「ダンシングス・フロリーダ」で大成功を収める。
- 1926年 「パリス」、「テ・キエロ」、「ラ・ウルティマ・コーパ」を作曲。ニューヨークに楽旅、のち、再びヨーロッパを巡演。
- 1927年 「カサス・ビエハス」などを作曲。
- 1928年 海外演奏旅行を終え帰国。（カナロ不在中のレコーディングは、ミノットとリカルディの指揮により行われたといわれる。）タンゴ・ファンタジア「パハロ・アスール」、「ヌエベ・プントス」、バルス「コラソン・デ・オロ（タンゴ「パリス」をバルスに改めた）」などを発表。この頃現役奏者を退き、指揮に専念する。



フランシスコ・カナロ楽団
(1928年)

- 1929年 バルス「ジョ・ノ・セ・ケ・メ・アン・エチョ・トゥス・オホス」、などを作曲。キャバレー「アブドゥラ」で常演、ラジオ、レコーディングなどオルケスタの活動は広範囲に及ぶ。



- 1930年 ルイス・セサル・アマドーリの詞を得て「マドレセルバ」を作曲、マイボ劇場でタニアが歌い大ヒット、「ミロンガ・カンジェンゲ」を発表する。

- 1932年 6月、コリエンテス街のナシオナル劇場でタンゴ史上初のミュージカル「ラ・ムチャチャダ・デル・セントロ」を上演する。脚本と演出をイボ・ペライ、音楽をカナロが担当し、翌1933年にかけて、地方巡演を含めて900回のロング・ランとなる。この音楽劇のために「ラ・ムチャチャダ・デル・セントロ」「ロサ・デ・アモール」などを作曲。とくに前者は大好評を得て、レコードも空前の売れ行きを示した。なお同劇には、ティタ・メレーロ、エルネスト・ファマー、ティト・ルシアルドなどが共演した。
- 1934年 再びイボ・ペライと協力して、ミュージカル「ラ・カンシオン・デ・ロス・バリオス」を制作、7月、サルミエント劇場にて開幕する。イグナシオ・コルシーニ、エルネスト・ファマー、マノリータ・ポリなどが出演、同劇の主題曲には自作の「エル・タンゴ・デ・ラ・ムーラ」「ジョ・ノ・セ・ポルケ・テ・キエロ」「エル・ティグレ・ミジャン」が使われた。ハイメ・ヤンケレビッチ、ファン・コッシオと共同でリオ・デ・ラ・プラタ映画社を設立する。第一回作品は「イドロス・デ・ラ・ラディオ」。カナロ楽団のほか、イグナシオ・コルシーニ、アダ・ファルコン、ティタ・メレーロ、ドリータ・ダビスなど人気歌手が出演、爆発的ヒットとなる、この映画は後にスペインでも公開された。
- 1935年 音楽劇第3作「ラスカシエロス」をサルミエント劇場にて上演。主題曲は自作の「カサス・ビエハス」「タンゴン」「ミ・ブエノス・アイレス」「トゥ・イ・ジョ」「コプラス・ポルテーニャ」など。楽団専属歌手エルネスト・ファマーなどのより歌われた。マルガリータ・パディン、パキータ・ガルソンなどが共演。映画「ボル・ブエン・カミーノ」を製作。監督はエドゥアルド・モレーラ。主演はホセ・ゴーラ。ほかにオリンダ・ボサン、ロベルト・マイダなどが共演している。主題曲として「パソ・アル・デポルテ」「エル・ケ・ア・イエロ・マータ」の詞を得て発表。
- 1936年 コメディ・ムシカル「ラ・パトリア・デル・タンゴ」を上演。ホセ・ゴンサレス・カスティジョ、アントニオ・ポッタ、ルイス・セサル・レンシの共同脚本にカナロの音楽を付し、ブエノス・アイレス劇場にて公開、大好評を得る。アグスティン・イルスタ、ロベルト・マイダ、ロベルト・フガソー、パキータ・ガルソンらによりカナロ作曲の「カリーニョ」「ケ・レ・インポルタ・アル・ムンド」「コモ・テ・キエロ」などが歌われ、これらのナンバーはレコードにもなり、好評を得た。なお同劇はのちウルグアイでも上演されている。映画制作も軌道に乗り、この年第3作目が封切られる。題名は「ジャ・ティエネ・コミサリオ・エル・プエブロ」、主演はパキート・ブストス。カナロ門下のアグスティン・イルスタ、ロベルト・フガソーも出演、女優のレオノーラ・リナルディ、アイダ・ルスも共演している。もちろん、カナロ作曲のタンゴが挿入曲として多く用いられた。
- 1937年 カナロたちのリオ・デ・ラ・プラタ映画社は、1934年設立以来、着実に毎年一作のペースでヒットをとばしていったが、この年第4作の「ラ・ムチャチャ・デル・シルコ」が封切られる。脚本はマヌエル・ロメーロ、音楽はカナロとアルベルト・ソイフェルが担当した。ルイス・アラータ主演。ドン・パンチョ・アルゼンチン五重奏団を結成。ファン・ホセ・カジャステギ（バイオリン）、オクタビオ・スカグリオネ（バイオリン）、“ミノット”エンリケ・ディ・チコ（バンドネオン）、ルイス・リカルディ（ピアノ）などオルケスタ・ティピカ・カナロのトップ・メンバーにより構成されるこの五重奏団は、カナロの綿密な指導のもと、1920年代の演奏スタイルで古典の復興を企図した。五重奏団はこの年、「ビエント・エン・ポパ」「ノ・カンテス・ビクトリア」「ロス・ティエンポス・カンビアン」「エル・チョコクロ」など8曲をレコーディングしている。この楽団はのちキンテート・ピリンチョと名を改め、カナロが死去する1964年まで活動を続けた。音楽劇「マル・デ・アモーレス」をポリテアマ・アルヘンティーナ劇場で上演。アグスティン・イルスタ、ロベルト・フガソー、パキータ・カルソンらが共演。
- 1938年 映画「ドス・アミーゴス・イ・ウン・アモール」が封切られる。監督はルカス・デマーレ、主演はファン・カルロス・トレイ、ノルマ・カスティジョ、ペペ・イグレシアスが共演。劇中でカナロ作曲の「クアンド・エル・コラソン」「アイ・ケ・アングラール」がロベルト・マイダなどにより歌われた。つづいて映画「カンタンド・ジェゴ・エル・アモール」を制作。ベルリータ・ムス、アグスティン・イルスタ、ファニー・ナバーロらが共演。隣国チリへ演奏旅行に出発。
- 1939年 カナロ楽団にマリアーノ・モレス（ピアノ）入団。音楽劇「エル・ムチャチャ・デ・ラ・オルケスタ」をナシオナル劇場にて上演。ペビータ・ムーニョス、テレシタ・パドロン、ミゲル・ブチーノ、エルネスト・ファマー、フランシスコ・アモールなどが出演。この劇のためにカナロは「ラ・ミロンガ・デ・ブエノス・アイレス」「エル・レイ・デル・ボスケ」「ロス・パリアス」「トード・テ・ノンブラ」「ジョ・ナシー・パラ・ケレールテ」などを作曲、みずからの楽団で演奏した。カナロのリオ・デ・ラ・プラタ映画社は「24オーラス・エン・リベルター」を制作。監督ルカス・デマーレ、主演ペペ・イグレシアス、ほかにニーニョ・ガンビエル、エンリケ・ロルダンらが共演した。つづいて映画「トゥルビオン」も制作。ここでは自作の「サルー・サルー」「ミロンゴン」が主題曲として使われている。ブラジルへ演奏旅行。
(第二次世界大戦はじまる)

- 1941年 音楽劇「ラ・イストリア・デル・タンゴ」を上演。脚本イボ・ペライ。エルサ・オコンノール、フランシスコ・アモール、エルネスト・ファマー、名舞踏手”カチャファス”ことベニート・ビアンケとカルメンシータらが出演し、懐旧調のこの出しものは大衆の絶賛を拍した。
- 1942年 コメディ・ムシカル「センチミエント・ガウチョ」を上演。脚本イボ・ペライ。デルフィーナ・ハウフレット、カルロス・エンリケス、カルロス・ロルダン、エドゥアルド・アドリアンなどが出演。古典「センチミエント・ガウチョ」を中心に、自作の「ロス・オホス・マス・リンドス」「エル・チーノ・パンタレオン」「ラ・ミロンガ・デ・ロス・ペロス」「コラソン・エンカデナード」「パハ・ブラーバ」などが劇中で演奏され歌われた。
- 1943年 音楽劇「ブエノス・アイレス・デ・アジェル・イ・オーイ」をプレシデンテ・アルベアル劇場にて上演。制作・音楽はフランシスコ・カナロ、脚本・演出はイボ・ペライ。主役は女優歌手として高名なティータ・メレーロ。トマス・シマリ、マルーハ・パベルナート、カルロス・ロルダン、エドゥアルド・アドリアンなどが共演した。この劇で「レファローサ・フェデラル」「セ・ディ・セ・デ・ミ」「タンゴ・ブルーホ」などの新曲を発表した。同劇はその後ウルグアイのモンテビデオでも上演され、総計600回以上のロング・ランとなった。
- 1944年 前縁に続いてイボ・ペライとの共作による音楽劇「ドス・コラソネス」をプレシデンテ・アルベアル劇場にて上演する。主役は前年と同じティータ・メレーロ。女優歌手のチョーラ・ルーナのほか、カルロス・ロルダン、ペドロ・クアルトゥッチなどが共演。この劇のために「ドス・コラソネス」「ナウエル・ウアビ」「ミ・カリーニョ・ジャ・ムリオー」「ブエナス・ノーチェス・コラソン」「トード・エス・メンティーラ」「ケ・タール」「シン・コンパシオン」「フエ・ポル・ウナ・ムヘール」などを作曲し、これら挿入曲の多くはすぐにレコードにもなった。
- 1945年 音楽劇「タンゴ・エン・パリ」をイボ・ペライと共作。前年と同じテアトロで上演。アリア・ピグノリ、ギジェルモ・リコなどが出演。
- 1946年 コメディ・ムシカル「ラ・カンシオン・デ・ロス・バリオス」をプレシデンテ・アルベアル劇場にて上演。本劇は1934年にカナロがイボ・ペライと共作し、ヒットしたもので、12年ぶりの再演である。ビルヒニア・ルーケ、マリア・エステル・ガマス、エクトル・カルカーニョ、エンリケ・ルセロなどが共演。この劇のために「シ・トゥ・メ・キシエラス」を作曲。同劇はウルグアイのモンテビデオでも公演を行う。
映画製作を再開、「エル・ディアブロ・アンダーバ・エン・ロス・チョコロス」を3月に封切る。監督はマヌエル・ロメロ、ルイス・サンドリーニが共同で、出演はルイス・サンドリーニ、シルバーナ・ロス、アリタ・ロマン他。音楽はもちろんカナロが担当した。
- 1947年 音楽劇「ルナ・ミエル・パラ・トレス」をプレシデンテ・アルベアル劇場にて上演。メキシコのスターであるホルヘ・ネグレーテを中心にグロリア・マリア、トリオ・ロス・カラベラス、ペドロ・クアルトゥッチ、アマンド・バレラなどが共演。脚本はシスト・ポンダル・リオス、カルロス・オリバル。音楽はカナロとマリアノ・モレスが共同担当し、「サン・ペドロ・デ・トラケパケ」などメキシコをテーマにした曲を作曲、「パンパ・デ・ベラクルス」「ノーチェ・デ・ベラクルス」などを新編曲で披露した。このほかタンゴで「ヌエストロ・カミーノ」「ジョ・ソロ・セー」、カルナバリートで「エル・ノルテーニョ」など新作を発表。
- 1949年 コメディ・ムシカル「コン・ラ・ムシカ・エン・エル・アルマ」をカシノ劇場で上演。脚本オメロ・マンシ、ペドロ・ブルーノ、アントニオ・デ・バッシ、制作・音楽フランシスコ・カナロ、出演トスカニート、フェリクス・ムタレージ、ペルラ・グレコ、フランシスコ・アモールそしてフランシスコ・カナロ。この劇では「ポリーチェ・デ・バリオ」「パレーセ・メンティーラ」「ラ・ラスパ」「シンフォニア・ガウチョ」「ボラーチョ」「パハロ・アスール」「センチミエント・ガウチョ」など新旧の自作曲が使われた。同劇はその後モンテビデオでも上演された。映画「イストリア・デル・タンゴ」に出演。
- 1950年 映画「コン・ラ・ムシカ・エン・エル・アルマ」を製作。これは前年上演された同名の音楽劇にもとづき作られたものである。カナロ自身は楽団指揮者と俳優を兼ねた。共演者はアンドレス・ポヒオ、ティト・ルシアルド、アルベルト・アレーナスなど。封切は翌年1月10日であった。この映画の中でカナロは40人編成のオーケスタでタンゴ・メドレー「レリキアス・ポルテーニャス」「パハロ・アスール」を演奏した。
- 1953年 ブラジルのリオ・デ・ジャネイロへオーケスタとともに演奏旅行。歌手のアルベルト・アレーナス、マリオ・アロンソに加えダンスの名手フリャとラロ・ペジョを伴い「ナイト・アンド・デイ」に出演。かたわらラジオ放送の仕事もする。つづいてサンパウロの「ポイチ・ロード」に出演。
- 1954年 前年に引続きブラジルを訪問。
- 1956年 タンゴ生活50周年を迎える。これを記念して自伝「タンゴとの金婚式とわが思い出“Mis bodas de oro con el tango y mis memorias”」の執筆にとりかかる。翌年完成し、セーサ・タジェーレス・グラフィコス社より刊行される。
タンゴとの金婚式を記念して「ボーダス・デ・オロ・コン・エル・タンゴ」「カフェ・パラ・ドス」を作曲。
オデオン社より「黄金のレコード」を受ける。

1957年

コメディ・ムシカル「タンゴランディア」を思い出のプレシデンテ・アルベアル劇場にて上演。かつてカナロ楽団に20余年在籍していたピアノ奏者ルイス・リカルディも招かれて共演、久方ぶりのコメディ・ムシカルはこの年の大きな話題となり、大成功を収める。この頃のカナロ楽団のメンバーは次の通りである。

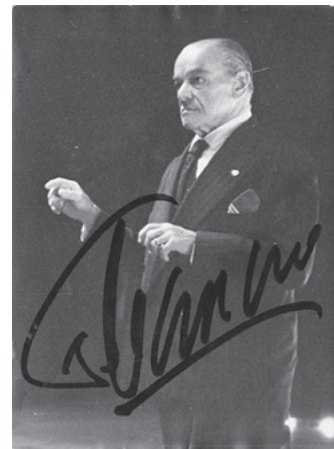
指 揮：フランシスコ・カナロ
 バンドネオン：ミノット・ディ・チコ
 エルネスト・ディ・チコ
 オスカル・バシル
 クリストバル・ラモス
 バイオリン：オクタビオ・スカグリオーネ
 アントニオ・ダレサンドロ
 アルマンド・アンヘレッティ
 ホセ・サルミエント
 ベース：ホセ・アレグレ
 歌手：アルベルト・アレーナス
 フアン・カルロス・ロロン

1961年

楽団・歌手・踊り手を伴い日本へ演奏旅行を行う。

●訪日メンバー

指 揮：フランシスコ・カナロ
 バンドネオン：オスカル・バシル
 ドミンゴ・フェデリコ
 ドミンゴ・スカボラ
 アントニオ・ヘルマーデ
 バイオリン：オクタビオ・スカグリオーネ
 アントニオ・ダレサンドロ
 ホセ・サルミエント
 ベルナルド・ベベル
 ピアノ：オスカル・サビノ
 ベース：アリエル・ペデルネラ
 歌手：エルネスト・エレーラ（男声）
 イサベル・デ・グラーナ（女声）
 踊り手：グロリア（女性）
 エドゥアルド（男性）



●演奏旅行の記録

- 11月27日 日本へ到着する。約1ヵ月間滞日。
- 12月1日 東京・新宿コマ劇場にて演奏会
- 2日 〃
- 3日 〃
- 4日 京都会館にて演奏会。
- 5日 大阪・大劇にて演奏会。
- 6日 〃
- 8日 名古屋・愛知文化講堂にて演奏会。
- 9日 静岡・駿府会館にて演奏会。
- 12日 東京・新宿コマ劇場にて演奏会。
- 13日 〃
- 14日 〃
- 16日 富山市公会堂にて演奏会。
- 17日 金沢女子短大ホールにて演奏会。
- 19日 新潟市体育館
- 23日 仙台・電力ホール
- 26日 東京・新宿コマ劇場にて公演。

(一般公演以外のものは省略)



●主なレパートリー

エル・チョコクロ、フェリシア、カナロ・エン・パリシ、ケハス・デ・バンドネオン、コラソン・デオロ、センチミエント・ガウチョ、カミニート、ジューラ・ジューラ、アディオス・パンパ・ミア、デ・ミ・バリオ、ラ・クンバルシータ、オルガニート・デ・ラ・タルデ、エル・エスキナーソ、トルタ・フリータ、ムンジンガなど。



イサベル・デ・グラーナとエルネスト・エレーラを両脇に「ムンジンガ」を歌うフランシスコ・カナロ

1964年

12月14日、ブエノス・アイレスの事務所にて76歳の生涯を閉じる。

映画に見るアルゼンチン・タンゴ模様

～そのアーティスト、タイトル、バイレなどをめぐって～

その3

飯塚久夫

前回、本格的トーキー・タンゴ映画の嚆矢、「タンゴ」(1933)の内容や背景について述べたところであるが、そうした個別映画の紹介に入っていく前に、今回は、タンゴ映画のハイライト・シーンを集大成した映画「アル・コラソン AL CORAZÓN」を見てみよう。

■映画「アル・コラソン」の概要

この映画はかつて中南米音楽社からDVDが発売されていたものである。

年代は1931年から74年にわたり、実に26本の映画からタンゴが登場する場面を集めている。

監督は有名なドキュメンタリー作家エルネスト・サバトErnesto Sábatoの息子マリオ・サバトMario Sábato。映画の案内役として俳優のセルヒオ・レナンSergio Renánと女性歌手アドリアナ・バレーラAdriana Varelaが出演している。脂が乗りつつある頃のバレーラだけにはち切れんばかりの魅力が存分に発揮されており、ディセポロE.S.Discépoloの「CAMBARACHE」を歌っている。伴奏はセステート・マジヨールSexteto Mayor。

エルネスト自身も登場して解説を行っている。加えてあのエンリケ・カディカモEnrique Cadícamoが思い出を語る。カディカモは1900年生まれであるから、この映画がリリースされた96年6月には96歳であった。カディカモの孫娘モニカ・カディカモMonica Cadícamoもフリオ・ダビラJulio Dávilaのトリオ伴奏でCobián-

Cadícamoの「VENÍ, VENÍ」を披露している。

プロデューサーはアルベルト・ゴンサレスAlberto Gonzálezとカルメロ・サンティアゴCarmelo Santiago、プロデュース会社はサンミゲル・スタジオESTUDIOS SAN MIGUEL(スポンサー会社はIMAGEN SATELITEL)。

脚本は監督のマリオ・サバトであるが、資料調査などはタンゴ関係の著作を書いている若手女性評論家イレーネ・アムチャステギIrene Amuchástegui。彼女は“10Tango”の解説でも活躍している。

上映時間は92分である。

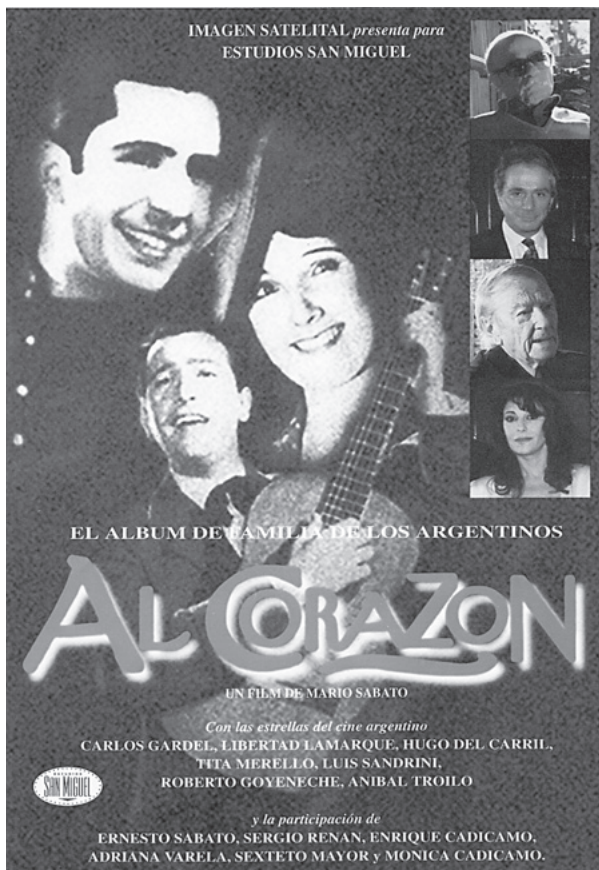
■映画「アル・コラソン」に登場する作品

それではこの映画に登場する作品を順番に見ていこう。

冒頭はリベルタ・ラマルケLibertad Lamarqueの歌う「MALDITO TANGO」で始まり、セステート・マジヨール演奏の「HOTEL VICTORIA」にオスバルドとグラシエラOsvaldo Ciliento & Graciela Garcíaの踊りで最初のクレジット。

そしてテーマ毎にセルヒオとアドリアーナらのコメントが入る。

最初のテーマはタンゴ女性の悲哀が絡む「ミロンギータMILONGUITA」。Enrique Delfino-Linning「MILONGUITA」をサビナ・オルモスSabina Olmosが歌う。39年の映画「LA VIDA ES UN TANGO」からである。40年の



映画「CARNAVAL DE ANTAÑO」、33年の映画「TANGO」でティタ・メレージョ Tita Merelloが歌うDelfino「NO SALGAS DE TU BARRIO」と続く。49年の映画「HISTORIA DEL 900」ではチャルロCHARLOがリカルド Ricardo-Floresの「MARGOT」を歌う。再び映画「CARNAVAL DE ANTAÑO」ではアルベルト・カスティージョ Alberto Castilloがやはり「MARGOT」を、そして47年の映画「ROMANCE MUSICAL」のラマルケが「MILONGUITA」で締める。

次のテーマは「バロンVARÓN」。男らしさの象徴か、喧嘩どんちゃん騒ぎの連続である。ウーゴ・デル・カリルHugo del CarrilがVisca-Cadicamo「COMPADRÓN」を歌うのは47年の映画「LA CUMPARSITA」。1949年の映画「HISTORIA DEL 900」、37年の映画「LA VUELTA DE ROCHA」では女優ソフィア・ボ

サンSofía Bozánも登場。そして51年の映画「LA BARRA DE LA ESQUINA」。47年の映画「LA CUMPARSITA」でカスティージョがCollazo-Fontaina-Soliño「GARUFA」を名唱。同じ作者「NIÑO BIEN」をデル・カリルが1948年の映画「POBRE MI MADRE QUERIDA」で歌う。メルセデス・シモーネMercedes SimoneはDelfino-Romero「GUAPO Y VARÓN」を歌う。ここでカディカモが登場し、34年の映画「CUESTA ABAJO」でガルデルが殴り合うシーン、併せてデル・カリルはJovés-Romero「PATOTERO SENTIMENTAL」を歌う。

3番目のテーマは「妖しき接吻BESOS BRUJOS」。ラマルケを筆頭に接吻シーン・オンパレードだ。まず何と言っても45年の映画「LA CABALGATA DEL CIRCO」である“エビータ”ことEva Duarteが出演している。ラマルケもこの映画に出ており、二人の確執はこの頃から始まっていたのかと想像したくなる。47年の映画「ROMANCE MUSICAL」ではラマルケと人気男優ファン・ホセ・ミゲスJuan José Miguez。51年の映画「BUENOS AIRES, MI TIERRA QUERIDA」でカスティージョ。37年の映画「BESOS BRUJOS」と続く。

4番目のテーマは「愛の苦しみPENAS DE AMOR」。ラマルケによるMores-Cadicamo「UNO」。48年の映画「POBRE MI MADRE QUERIDA」ではMores-Discépolo「SIN PALABRAS」をラマルケが歌う。34年の映画「CUESTA ABAJO」、35年の映画「NOCHES DE BUENOS AIRES」ではティタ・メレージョ Tita Merelloが、そして36年の映画「AYUDAME A VIVIR」でシモーネが歌うDelfino-Romero「EL CLAVEL」、ラマルケが

歌う Malerba-Artola-Sparo 「AYUDAME A VIVIR」と続く。

5番目のテーマは「哀れなわが愛しの母 POBRE MI MADRE QUERIDA」。タイトル通り48年の映画「POBRE MI MADRE QUERIDA」からデル・カ ril がタイトル曲を。37年の映画「LA VUERTA DE ROCHA」ではデル・カ ril が、51年の映画「BUENOS AIRES, MI TIERRA QUERIDA」ではカステイジョが歌う。ここでエルネスト・サバトが登場し、50年の映画「EL ÚLTIMO PAYADOR」では大きなラッパに José Betinotti の「POBRE MI MADRE QUERIDA」を吹き込むシーンが見られる。アコースティック時代を描く貴重な映像だ。35年の映画「EL DÍA QUE ME QUIERAS」ではガルデル＝モレーノ (Rosita Moreno) のあの記念碑的なシーンが登場する。

6番目のテーマは「PARA CANTARLE AL AMOR」(愛のために歌う)。Pontier-Expósito 「BIEN CRIOLLA Y BIEN PORTEÑA」をラマルケが、「CANTANDO」をシモーネが、Soifer-Romero 「CADENA DE AMOR」をメレージョが、Radrizzani-Cadícamo 「EL LLORÓN」をデル・カ ril が歌う。34年の映画「EL TANGO EN BROADWAY」でガルデルが Gardel-Le Pera 「SOLEDAD」を歌って締める。

7番目のテーマは「パリに根づく ARACA PARÍS」。33年の映画「TANGO」で二枚目俳優のルイス・サンドリーニ LUIS SANDRINI。39年の映画「LA VIDA ES UN TANGO」では『タンゴなんか踊るのか?』というシーン



もある。そしてカステイジョが Barbieri-Cadícamo 「ANCLAO EN PARÍS」を歌う。

8番目のテーマは「場末、その郷愁 EL ARRABAL, ESA NOSTALGIA」となる。De Caro-Sábato 「AL BUENOS AIRES QUE SE FUE」でセステート・マジョールにアニバル・アリアス Aníbal Arias のギターが加わる。35年の映画「TANGO BAR」でアンヘル・バルガス Ángel Vargas の歌う「TRES ESQUINAS」、ガルデルが歌う「ARRABAL AMARGO」と続く。Piana-Castillo 「ARRABARELA」をメレージョが歌い、ロシータ・キロガ Rosita Quiroga も登場し Tagle Lara 「PUENTE ALSINA」。34年の映画「CUESTA ABAJO」からガルデルの「MI BUENOS AIRES QUERIDO」となる。

9番目のテーマは「休憩INTERVARO」。ここで早川真平とオルケスタ・ティピカ東京、藤沢嵐子のMores-Contursi「CRISTAL」、阿保郁夫Canaro-Caruso「LA ÚLTIMA COPA」のアルゼンチン録画が登場する。セステート・マジョールの伴奏でバレエラのE.S.Discépolo「CAMBARACHE」で閑話休題。

9番目のテーマは「下り坂CUESTA ABAJO」。ラマルケの歌う「CUESTA ABAJO」に続きアスセナ・マイサニAzucena Maizaniの歌うFiliberto-Vacarezza「BOTINES VIEJOS」。作者のフィリベルト自身が伴奏指揮をしている。シモーネがDelfino-Romero「NAUFRAGIO」を、ラマルケがMalerba-Manzi「DONDE VAS ILUSIÓN」を歌う。34年の映画「CUESTA ABAJO」でメイン・タイトルをガルデルが、そしてロベルト・ゴジエネチェRoberto GoyenecheがMores-Manzi「CAFETÍN DE BUENOS AIRES」で締める。

10番目のテーマは「交わす盃TOMO Y OBLIGO」。50年の映画「EL ÚLTIMO PAYADOR」と31年（画面では30年）の映画「TOMO Y OBLIGO」とを合成し、デル・カリラの歌うDelfino-Vacarezza「LA COPA DEL OLVIDO」とガルデルの歌うテーマ曲を巧く組み合わせている。

最後のテーマは文字通り「TANGO」。33年の映画「LOS TRES BERRETINES」で19歳のアニバル・トロイロAníbal Troiloが登場する。39年の映画「ASÍ ES LA VIDA」では有名な踊り手エリアス・アリッピElías Allippiがオルモスにダンスを教える。33年の映画「LOS TRES BERRETINES」ではDelfino-Rada「ARACA LA CANA」を題材にタンゴ曲の作成過程を模倣する。そして74年のトロイロが演奏するFiliberto「QUEJAS DE BANDONEÓN」によって歴代の踊りの名手Ovidio José Bianquet“エル・カチャファスEL CACHAFAZ”らが登場し、ガルデルとラマルケの踊るシーンでフィナーレとなる。

最後はセステート・マジョールの演奏するPiazzolla「INVIERNO PORTEÑO」でエンド・クレジットとなる。

■終わりに

ということで、この映画は主なタンゴ映画を総当たりして、ハイライト・シーンを見事に編集している。「アル・コラソン=心に…」とタイトルされているだけあって、タンゴ史を飾る映画の中から文字通り“心に残る”必見シーンが集大成されていると言ってよいであろう。



数に関するタンゴを拾い出す

～横浜プーロ・タンゴ同好会レコード・コンサート例会のプログラムから～

小林 謙一

永年同好会を主宰してきて企画・選曲に携わって思うことは、手持ちの音源で常時聴いているのは恐らく2割にも満たないのではと思う。このことは埋もれている名曲、名演が如何に多いかを物語っている。昔に比べると格段に多くの音源に接する機会が増えて、それは大変に有難いことなのだが、反面聴き方に真剣味が薄れてきて、何時でも聴けるという安心感が為せる業なのだろうか、かつての集中心が稀薄になって来ていると思う。昔はもっと真剣に耳を澄ましたものだった。。と反省する次第である。

今回のテーマが普段あまり聴く機会の少ない曲についてということなので、このところ気になった曲を挙げて見たい。

これについては当会のプログラムの編成について述べないと話が進まないのでは、若干冗長になる点をお許し頂きたい。

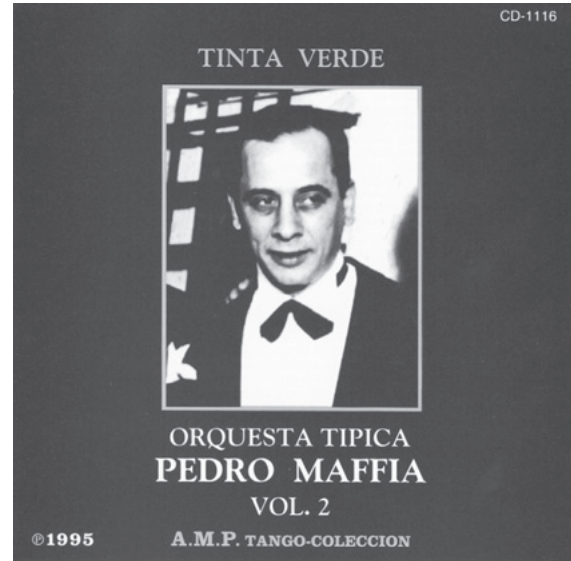
当会のプログラムは「作曲家シリーズ」を頭に、「古き佳き時代の演奏」をメにして、その間を4つ程のプログラムを入れ替えて構成、選曲をしている。例えば、「歌のタンゴ＝歌手別、曲名別」、「小編成楽団シリーズ」、「同名＝異曲」、「名曲＝競演」、「人に関するタンゴ」などを随時組み入れた企画を続けている。昨年フト思いついて「数に関するタンゴ」を1回あたり6曲づつを企画した。単にUNOから始めてゆくのでは芸が無いので、種々と無い知恵を絞っている。1から10、11～18と進んで眺めると大体聴いている曲は限られてくるし良く聴かれているものが多い。20、30、40、50も、またその間の数字の曲も似たりよったりで、もう少し面白い曲は無いかと探しているうちに、意外な曲、演奏にぶつかるケースが出てきて、選曲に楽しみが出てきたし、数の意味するところを調べるのも大変な作業にはなるが、この苦しみも又楽しいものとなってきている。この中にはそれぞれ今回与えられたテーマに相応しく、普段あまり聴く機会が少ないのでは無いかと思えるものもあるので、これ等を列挙するのでお目通し願いたい。

4=VALE CUATRO (Ernesto de la Cruz)

Pedro Maffia (1930) AMP CD-1116

作曲者の名からして古典曲の息吹に満ちていると思ったが、Maffiaの演奏はその期待を裏切って実に滋味が深くて癒される。CDのライナーで故石川浩司さんはタイトルは「4ペソの値打ち」を意味するようだがこの演奏は4ペソどころのものではないと書かれている。まさに至言であると思う。





10=DIEZ DE MAYO (Juan Carlos Caviello) =milonga

Roberto Firpo Cuarteto (1949) CTA-6021, DL-129, AMP CD-1222

FirpoのNuevo Cuartetoでバンドネオンを弾いた作者の軽快なミロンガで自作自演と言えるが、誕生日を祝われたマエストロFirpoの嬉しいような、面映ゆいような顔が目に見えて来るような好演奏である。他にもボスの誕生日を祝って捧げた曲、演奏はあるが、これ等もこれと同様他の楽団が取り上げてないのは当然のことかも知れない。

11=CALLAO ONCE (Javier Mazzea)

Osvaldo Pugliese (1976) EOS-81178

FresedoのEL ONCEはあまりにも有名で、他のONCEを見ても、MISA DE ONCEとかEL ONCE GLORIOSOは良く知られているしEL TREN DE LAS ONCE, MUÑECA DEL ONCEなども、まあ結構聴くところか。。。と見ているうちにこのCALLAO ONCEに出会った。種々と調べてみるとBs As市内Callao通りにあったカフェテリアの名前のように結構有名な歌手などが常時出演していたらしい。

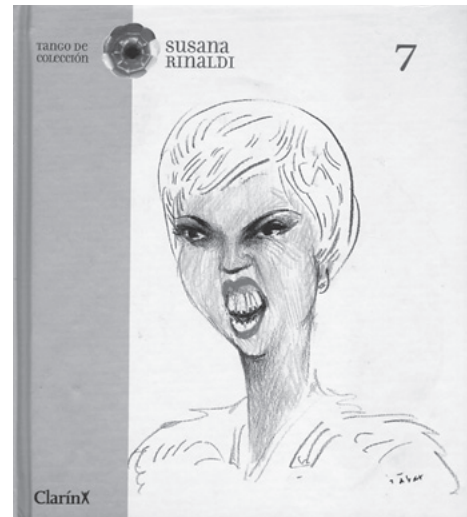
他の録音にFulvio Salamanca Sexteto TK-28149もある。



45=EL CUARENTA Y CINCO (María Elena Walsh)

Susana Rinaldi (1983) CLARÍN-7

Julián Plazaの伴奏でRinaldiが歌っている。作者のWalsh (1930-2011) は十歳代前半にして自らの詩集を上梓するなどの天才少女だった。彼女が我々と同年代であるのと、1945年にまつわる思い出を偲ぶ詩の中に広島原爆の悲劇に思いを寄せているところに共感を覚えた。それまであまり好きではなかったSusana Rinaldiだがこの歌で私に聴き方を変えてくれた一曲でもある。



76=VERANO DE SETENTA Y SEIS (Rodolfo Mederos)

Daniel Binelli y Hugo Romero (1987) CANYON C28R-0144

作者のMederosも演奏のBinelliも1969年には共にPugliese楽団で肩を並べた仲であり、また1974年にはÁstor PiazzollaにJuan José Mosalini, Arturo Schneider等と参加して共に活動する。さらにこの二人は1978年にはConjunto Generación Ceroでその存在を世に問うなど言わば互いに知り尽くした、息の合った仲間である。この曲は1976年に作曲されたものとある。これも普段聴かない演奏だと思うがBinelliのバンドネオンとRomeroのギターのコンプが絶妙な味わいを見せた好演だと思って取り上げた。



999=NOVECIENTOS Y NOVENTA Y NUEVE (Mario Frers)

Orquesta Típica Víctor (1927) AMP TC-1051, AMP CD-1264M

全く無名の作者の曲だがO.T.V.の演奏が素晴らしく、将に感動の一枚である。大きめの数の曲を模索しているうちに全く偶然に出会った一曲だったが、見つけて聴いた時は将にビンゴ！ 私にとってはそれまでに意識して聴いたことは無かったが、今回の企画・テーマに相応しい1曲と言えるのではと思う。タイトルの意味するところは残念ながら解らないが、企画中に発見するこの醍醐味は言うべくも無かった1曲だった。



以上6曲、編集部からの要請で種々な企画の中で出会った中からあまり聴く機会の少ないと思われる曲、演奏を列挙してみました。また何れかの機会に、他の企画で発見したものにも触れてみたいと思います。

「註」数：曲名：作曲者：演奏：録音年：収録盤名の順に記載しました。

全国リレー随想（12）

函館の空の下、タンゴは流れる

上村 要（函館市）

①私の音楽歴

私は昭和7年（=1932年）函館生まれ。

小学校3年生のころ、近所の先輩がいつも「ラ・クムパルシータ」のメロディーを口ずさんでおりました。ある時、その先輩から（実演があるから行かないか？）と誘われ、連れて行ってもらいました。その時の楽団の名前は記憶にありませんが、唯「ラ・クムパルシータ」の冒頭のメロディーだけは、ハッキリ記憶に残りました。以来、“楽団の実演”には親にねだって見に行ったものです。

当時、楽団の主流はアコーディオンかバイオリンでした。

“小泉幸雄とその楽匠”“長内 端とその楽匠”“桜井 潔とその楽団”と並び後年、“和田 肇”がピアノで加わります。

中学生のころジャズ・ギターを入手、ギターの教則本により「ラ・クムパルシータ」が弾けるようになり、この時の感激は忘れられません。

昭和20年、市内の中古レコード店で、「日本コロムビアのアルゼンチン・タンゴ・アルバム第2集」を見つけ、お目当て「ラ・クムパルシータ」が収録されておりましたので是非ほしいと思い、父親にねだって入手、この時のうれしさは例えようがありません。因みに、このS P盤6枚組は当時20円でした。翌、昭和21年父が急逝。

昭和24年、高校在学中、担任教師の許可を得て市内のキャバレーにギター奏者として入団、この楽団の編曲を担当するようになりました。

昭和28年、北海道で初めて「中南米音楽研究会函館支部」を立ち上げ、以後約30年間レコード・コンサートを開催、現在は、大野定夫氏に継承。又、この年開局した函館H B Cラジオ放送に招かれ「中南米音楽」のディスク・ジョッキーを担当するようになりました。

この間、クラシック・ギターの教師、ハワイアン・ブーム、エレキ・ブームに乗り講師として招かれ、昼はサラリーマンと、正に「二足のわらじ」履きっぱなしでした。昭和63年、定年退職により「二足のわらじ」解消。

平成7年「函館S Pレコードを聴く会」を立ち上げ、コンサート報告と投稿記事を、雑誌「S Pレコード誌」19号より掲載、断続的に100号までで終了。

平成10年、地元のラジオ放送“FMいるか”のディスク・ジョッキー開始、平成25年5月まで619回まで終了、現在なお継続中。

②S P盤収集の事

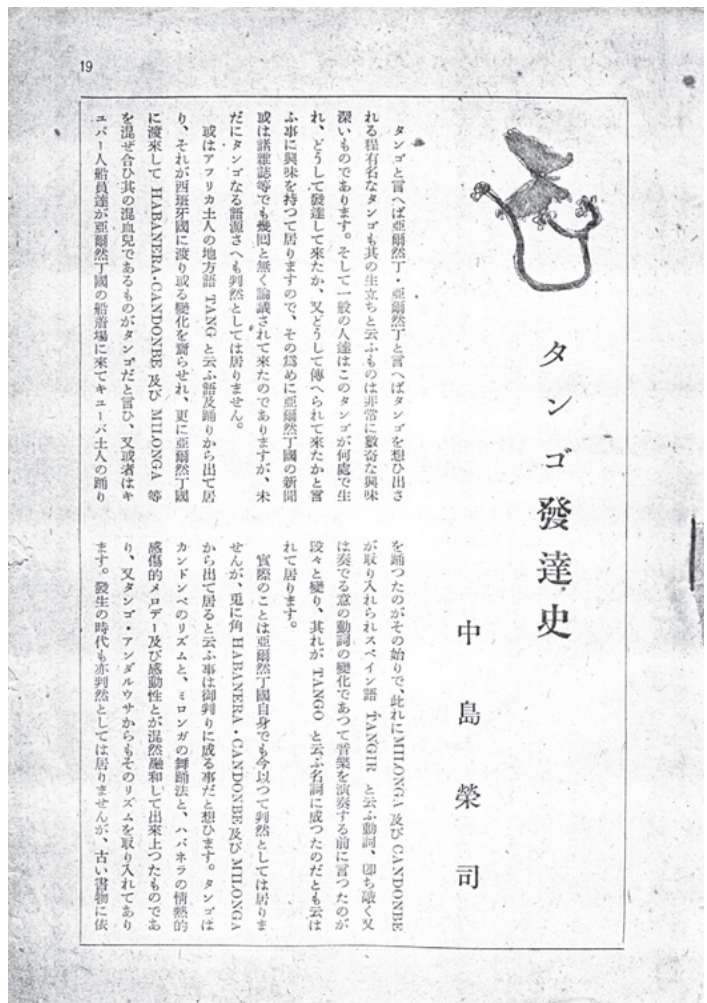
前項で紹介しましたように、私の音楽の原点は「ラ・クムパルシータ」にありました。当時、音楽はNHKラジオとS Pレコードしかありませんでした。

「ラ・クムパルシータ」のレコードで手に入るものは全て集めました。資金面は「二足のわらじ」のお蔭です。資料は、NHKの高橋忠雄氏のラジオ放送です。タンゴについての唯一の文書は、中島栄司著の「タンゴ発達史」、8ページに及ぶ一文で高橋忠雄さんの紹介文も掲載されております。この記事の時期について問い合わせたのですが、ご本人から確たる記憶はないとのことでした。が、このお手紙のなかに次の記事がありました、“昭和29年12月「新興楽譜社」から高山君の名前で出版した「タンゴ」は上巻・下巻として二冊出版するはずでしたが、高山君一人の名前で出したため下巻は中止しました”とのことでした。なにせ、中島さんはカルロス・ガルデルの歌を直に聴いた日本人なのでありますから。

私は戦後の昭和23年に、初めて日本のアルゼンチン・タンゴ楽団のSP盤を入手しました。楽団名“オルケスタ・ティピカ・ビクトル”編曲・ピアノがジャズ畑の松井八郎、曲目は「鈴懸けの径」、タンゴで「君は刺ある薔薇なりき」=歌：藤原亮子V-40077。続いて高橋忠雄作・編曲、歌：平野愛子、タンゴで「幻の港」V-40328、なかなか素敵な作品。等、数枚ありますが、最も気に入ったのが、早川真平作・編曲の「甘い溜息」V-40477でした。早川真平とオルケスタ・ティピカ・トウキョウ、藤澤嵐子の最初のレコードは3年後の昭和26年になってからです。①の項でふれました雑誌「SPレコード誌」=（主幹 直原清人）はクラシ

ックから民謡まで全ての分野の音楽を扱っており、タンゴについては島崎長次郎氏が執筆され、ヨーロッパ・タンゴについては故大森茂氏から、多くをご教示いただきました。私の投稿も、タンゴの記事が一番多いのですが、最初は「バックキー白片と幻のSPレコード」でしたし、アコーディオンのことも書きました。題材は自由でしたので色々な分野に及びました。

SPレコードの収集につきましては、戦後LPレコードが出始め、新しいタンゴのレコードが聴か



1967年5月30日。函館市内の鮭屋にて。左より、上村氏、中島氏、石橋氏、長田氏。

れるようになりましたが、戦前の演奏と比べますと、先ずピアノの使い方に大きな飛躍がありました。それまでの中音でのリズム中心から、ピアノ全域に亘る使い方、バンドネオン・ピアノ・ベース等の飛躍的演奏技術の向上に目を見張りました。“もう、SP盤は聴かなくなるのかなあ”と、一時期、思ったものです。NHKもSP盤を放出、一般の人も同様に、私は却って集めやすくなりました。

③次に、放送関係をご紹介しましょう。

私が初めてラジオ放送したのは高校生のときで、函館NHKラジオ放送局の専属“シエネ・ハワイアン・バンド”に招かれ、ギター奏者として参加、テープレコーダーが無い時代でブツケ本番でした。

昭和28年、函館HBCラジオ放送開局にあたり、招かれて「中南米音楽」と題してタンゴ中心のディスク・ジョッキーを担当、局ではレコードをもっておらず、全て私のレコードで放送しました。この時初めて、局持参の「東京通信工業」＝（後のソニー）のテープレコーダーを拝見、私の話とレコードをテープ録音して放送したものです。又、局主催のタンゴ中心のレコード・コンサートを局の大ホールで開催、200名以上の参加者には驚いたものです、

平成10年、地元ラジオ放送“FMいるか”にディスク・ジョッキーで参加。この放送ではクラシックから歌謡曲まで、時には邦楽もとりあげ、この5月で619回を終了、未だ首にならず継続中。

今年になってから方針として、“音楽の原点を聴こう”を標題に進めています。

6月は「戦後の日本ラテン界」として、②で紹介した「オルケスタ・ティピカ・ビクトル」を中心に放送予定です。



“FMいるか”の放送中。左：橋本 孝アナウンサー、右：上村氏

④モダン・ジャズとピアソラ

2013春の「Tangolandia」の、大澤 寛氏紹介のジャズ史との対比表（山本幸洋氏作成）は大変有意義なものです。戦後のビーバップを始めとする一連のモダン・ジャズへの動きはコンボ・スタイルを招き、結果としてフル・バンドを崩壊せしめた、と私は見ているのです。

ピアソラの初期の作品は素晴らしいものが多いのですが「ノニーノ」辺りまでかな、次第に大衆から離れて専門家の音楽になってコンフロント・スタイルが定着し、オルケスタ・ティピカを必要としない音楽になった。つまりオルケスタ・ティピカを崩壊せしめた男のひとりとしています。

しかし、私はいい時代に生きたと思っています。「ラ・クムパルシータ」によってタンゴを好きになり、その初期から絶頂期までを聴き得たことに満足しています。我々の青春時代は音楽の時代でした。しかし、あるとき“ハッ”と気が付いて辺りを見渡すと、かつてのジャズは無くなり、シャンソンもハワイアンもウエスタンもコンチネンタル・タンゴもどこへいった？ 今は踊りの時代だ、といっても社交ダンスではない。“ヒップホップ”時代になった。

⑤ “函館SPレコードを聴く会” について

平成7年、8年間の東京生活を終え帰還しNHK函館放送局でSPレコードの展示会を開催したのがきっかけで、会員を集めて自宅でコンサートを開きました。クラシックから歌謡曲までオール・ジャンルでした。幸いなことに、会員のなかにクラシック専門、歌謡曲専門の方がおり、私はポピュラーを担当することになりました。毎回、大体20名位でのコンサートでした。2ヵ月に一回開催600回で最終回でした。投稿の方は、雑誌「SPレコード誌」の最終100号まで続きました。



函館市内NHKギャラリーでのSPレコード展示会（平成10年1月13日～18日）。写真は上村氏ご夫妻。

次のリレー走者は東京都武蔵野市の笠井正史さんです。よろしくお願ひします。



“函館SPレコードを聴く会” コンサート終了後の集合写真。前列左端が上村氏。

以上

（編集部より：前号で予告したように今号の「全国リレー随想」の執筆者は田原陽次郎氏を予定しておりましたが、田原氏のやむを得ない事情で執筆不可となりましたので、急遽、上村 要氏にお願いして執筆していただきました。）



東京・春・音楽祭
—東京のオペラの森 2013—

アルゼンチン・タンゴの夕べ

～哀愁漂うタンゴの名曲を集めて

2013年3月21日東京文化会館小ホール

鈴木 一哉

上野の森を中心に毎年3～4月に開催されている「東京・春・音楽祭 — 東京のオペラの森 —」で恒例となったタンゴ楽団の東京文化会館小ホールでのコンサートは、2010年オルケスタ・アウロラ、2011年小松真知子&タンゴクリスタル、2012年タンゴアンサンブル「アストロリコ」と続いたが（2009年には別企画でミュージアム・コンサート「京谷弘司 plays ピアソラ」が開催されていた）、本年はオルケスタ・アウロラが再登場を果たした。

2008年の結成以来、会田桃子と青木菜穂子を双頭リーダーとして独自の音楽性を開花させてきたオルケスタ・アウロラは、2枚のアルバムの発表、アルゼンチン、ウルグアイへのツアーなど、ここぞというポイントで活動を活性化させて進化を遂げてきたが、そのライヴは頻繁に開催されているというわけではない。各メンバーが自身の活動で多忙なスケジュールを抱えていることもその一因だろうが、ライヴが日常化していないことで聴衆の側としては楽団に対して常に新鮮な気持ちで緊張感を持って接することができるという利点はあるかもしれない。そして、3枚目のアルバム『ピアソラ…愛』のまさに発売日に開催された本コンサートは、アルバム発表を契機として、そのアウロラが新たな活性期へと突入していくのではないかと予感させるものだった。

さて、オルケスタ・アウロラの会田桃子（ヴァイオリン）、青木菜穂子（ピアノ）、吉田篤（ヴァイオリン）、北村聡（バンドネオン）、鈴木崇朗（バンドネオン）、東谷健司（コントラバス）というラインナップは現在では不動のものであるが、本コンサートはボーカルの小島りち子がゲスト参加したことにより通常のアウロラとは異なるプログラム構成がもたらされていた点で特筆された。実際、当日の演奏曲目は、以下のようなものであった（*は小島の歌入り、青は青木編曲、会は会田編曲）。ただし、aは『プエルト・ア・プエルト』（MUSAS-6006）、bは『ブエノスアイレスのアウロラ』（MUSAS-6009）、cは『ピアソラ…愛』（MUSAS-6014）という、それぞれの曲が収録されているアルバムを示す（a'などは歌入りやゲスト参加という点でアルバムとは異なるバージョンの演奏であることを表す）。

前半 (A) :

- ①私の希望のすべて（会田桃子a）
- ②グリセール（マリアーノ・モーレス＝ホセ・マリア・コントゥルシ、青a）
- ③ナーダ（ホセ・ダメス＝オラシオ・サンギネッティ、会b）
- ④デカリシモ（アストル・ピアソラ、会c）
- ⑤*忘却（アストル・ピアソラ＝アンヘル・デニア・タレンシ、シモン・ルーカ、デビッド・マクニール）
- ⑥*想いの届く日（カルロス・ガルデル＝アルフレド・レ・ペラ）

- ⑦ラ・プニャラーダ (ピンティン・カステジャーノス=セレドニオ・エステバン・フローレス、青b)
- ⑧マロン・イ・アスル (アストル・ピアソラ、青c)
- ⑨亜麻の花 (エクトル・スタンポーニ=オメロ・エスポイト、青a)
- ⑩*私はマリア (アストル・ピアソラ=オラシオ・フェレール、青b)

後半 (B) :

- ①ラ・サリーダ (会田桃子c)
- ②天使のタンゴ (アストル・ピアソラ、青c)
- ③悲しい街 (オスバルド・タランティーノ、青b)
- ④ロス・マレアードス (フアン・カルロス・コビアン=エンリケ・カディカモ、会a)
- ⑤*最後のコーヒー (エクトル・スタンポーニ=カトゥロ・カステイージョ)
- ⑥*君偲ぶ夜 (シリアコ・オルティス=マリア・テレサ・マルケス)
- ⑦マラ・フンタ (フリオ・デ・カロ=ペドロ・ラウレンス、会b)
- ⑧セーヌ河 (アストル・ピアソラ、青c)
- ⑨首の差で (カルロス・ガルデル=アルフレド・レ・ペラ、会a)
- ⑩*チキリン・デ・バチン (アストル・ピアソラ=オラシオ・フェレール、会b')
- ⑪ブエノスアイレスの夏 (アストル・ピアソラ、会b)

アンコール (C) :

- ①リベルタンゴ (アストル・ピアソラ、会c')
- ②*ラ・クンパルシータ
(ヘラルド・ヘルナン・マトス・ロドリゲス=エンリケ・マローニ、パスクアル・コントゥルシ、会a')

アウロラの元来の持ち味の一つは会田、青木のオリジナル曲にあるわけだが、今回は前半と後半のそれぞれ冒頭にグループのテーマ曲と言える名作A①と「出発口」を意味する最新作B①を据えるにとどめていた。これは、クラシックの音楽祭の一環として名曲を中心とするという今回のコンサートの企画方針による影響もあろう。一方で、アウロラのもう一つの持ち味は会田、青木の独創的なアレンジによる名曲の再構築にあるわけだが、名曲なら何でもよいというわけではなく、選曲について独自の好みを反映していることは上記のプログラムを見ていただいても明らかであろう。ピアソラを中心とするモダン派タンゴ、ダメス、モーレス、スタンポーニなどのロマンティックな歌曲のインスト化、デ・カロ派とタンゴ・ロマンサなど、いくつかの特徴的な線が見えてくると思う。そして、今回発売となったアルバムのテーマがピアソラであることも反映して(昨年の没後20年で企画されたが発売は本年になった)、今回はやはりピアソラ作品がコンサートの重要なポイントを占めていたと言ってよいだろう。

ピアソラ作品としては、50年代の弦楽オーケストラのレパートリーであるA⑧B②⑧(A⑧はオクタート・ブエノスアイレスでもとりあげられた)が注目された。いずれも青木の編曲により新アルバムに収録されていたタンゴで、現在のモダン・タンゴ界でも群を抜く完成されたアレンジ技術を駆使してまことにアウロラらしい再解釈を安定した演奏力で実現していた点で傑出していた。多くのピアソラ作品において、自演のアレンジの完成度があまりに高いために新編曲を試みる余地が少ないという問

題があるわけだが、アウロラでは編曲に新たな試行の余地が残されている作品を中心に選曲がなされていると思う。特に、C①での会田の奔放な編曲は、表面上タンゴ性からは離れて、ピアソラと会田の個性が半々に融合した全く独創的な世界を提示しようという冒険心に溢れていた（アルバムでのパーカッションのゲスト参加は今回のコンサートでは不在）。

演奏面ではやはり青木が東谷とともに楽団の基盤をしっかりと支えているという点が今回も実感された。随所で力強いぶちかましを炸裂させつつ楽団を音楽の底部から強靱な進行感で動かしているようにするピアノだ。その上で、多様な音楽性に開かれた会田のスケール感に溢れると同時に強い表出性に満ちたソロ、躍進著しい北村のテクニカルな閃きが輝くソロなど、メンバーの個性が滲み出てきており、今回はオリジナル曲が少なかったとはいえ、アウロラの個性がますます深まりつつあることが確信された。そんな中、渋い歌唱で彩りを添えた小島の歌唱は、音楽性のクラシカルな佇まいが今回のアウロラとホールの響きにもマッチしており、アウロラの通常のコンサートでは取り上げられないレパートリーを聴かせてくれた点でも価値が高かった。

通常はアンプを入れることが皆無で、生音が基本の東京文化会館でのコンサートということもあって、サウンドの音響調整は、特に開演当初はバランスを模索していた感があったが、演奏の進行とともに、普段着のもっと鋭角的なアウロラ・サウンドとはやや異なるしっとりとした感触で安定していった。筆者としては、より先鋭なサウンドをアウロラには期待していたが、クラシックの音楽祭の一環として開催された当夜のサウンドとしてこれはこれで美しく楽しめるもので、特にロマンティックなレパートリーに関しては、この音響で聴くアウロラも素晴らしいなと感じた。

6月11日には六本木・STB139にてアルバム発売ライブを開催したアウロラは、7月には九州公演も予定しており、このまま今後の活動のさらなる活発化を期待したいと思う。異ジャンルの音楽ファンの若い世代の聴衆へとタンゴの聴き手の裾野を拡大していく上でも、アウロラには自分たちのスタイルに忠実な歩みを進めていってほしいと思う。





タンゴ「港横濱・世界を結ぶ夢」

齋藤 富士郎

2013年5月5日、このところ恒例となっている春の芸術祭を銘打ったオルケスタYOKOHAMAの演奏会がこれも恒例となっている横浜市開港記念会館で催された。今回のテーマは「~平和の風にのせて~タンゴ「港横濱・世界を結ぶ夢」という壮大なものである。プログラムについては囲みの中を参照していただきたい。

私はこのオルケスタの演奏を聴くのは一昨年、昨年に続けて3回目であるが、その間の進歩は真に著しいものがあり、今回は大変充実した内容であった。今後、更に一層の高みを目指しての精進を期待したい。

プログラムの第一部は「港横濱・世界を結ぶ夢」というタイトルで、タンゴを通した東西文化交流をテーマにアルゼンチン・タンゴ、ヨーロッパ・タンゴ、日本と中国（実際には「夜来香」で代用）の曲を取り混ぜた構成になっている。兎角、このような構成はゲテモノに陥りがちであるが、今回の場合は全くそのようなことは無く、すべてについて大変立派な力のこもった演奏と歌い振りであった。

本来はロック歌手である藤田 翔が日本語で歌った“Para Dos”は始めどうなるかと思ったが、意外なことにこれが中々の歌い振りで、なるほどこういう行き方もあるのかと思った。13歳の南川 紘子さんが歌った“Caminito”も、歌詞がはっきりと聴き取れる歌い振りで皆を感心させた。ただ、やむを得ないことであるが、スペイン語の発音についてはまだ勉強が必要で、例えばFue「フエ」が「フェ」に聴こえる点などは早く直した方がよい。

バンドネオン陣は平田 耕治氏と池田 達則氏が加わっていることで、安心して聴いていられた。バイオリン陣の中ではやはり専光 秀紀氏のビルトゥオーソ振りが光っており、「ジェラシー」のバイオリン独奏パートで皆を唸らせていた。

飯泉 昌宏氏のギターも従来は音が聴き取れず、何のために居るのかと思ったこともあったが、今回は氏のギターを聴かせるための編曲もされており、大変良かったと思う。

齋藤 一臣氏による曲の合間のコメントも、軍事政権時代のアルゼンチンを訪れた時の経験談などを交え、それに最近の国際情勢などにも言及した大変興味深い話が多かった。特に軍事政権が引き起こしたマルビナス（フォークランド）紛争について、この紛争がアルゼンチンと英国の両国に深い傷跡を残したこと、当時アルゼンチンではタンゴが聴こえて来ず、ただ“A mi madre”のみが流れており、それが軍事政権に対する暗黙の批判になっていたこと、その時代の影響で今日のアルゼンチンでは50～60歳代のタンゴ演奏家が見出せないこと、など中々勉強になる話であった。

第二部はがらりと変わり「これが、タンゴだ!」という昔どこかで聞いたようなタイトルで、アルゼンチン・タンゴ（厳密にはタンゴ・リオ・プラテンセ）の名曲・名演となった。

興味深かったのは“El Amanecer”をそれぞれディサルリ、プグリエーセ、レケーナによる3種類の編曲で聴かせてくれたことである。こういうことをやると大体においてオルケスタの腕前がわかっ

てしまうものであるが、よくも挑戦したと思う。3種類聴いた感じでは、意外なことに、というかやはりというか、ディサルリの編曲によるものが一番難しそうに感じた。齋藤 一臣氏が本号に「タンゴの音作りは“基本が違う”」という文章を寄せられており、その中でディサルリの「禁欲的演奏」の難しさについて述べておられるが、この演奏を聴いていて「なるほどそうか」と思った。ディサルリ・スタイルは自由裁量の余地がないのである。それとディサルリ楽団の写真を見てもわかることだが、あのスタイルを実現するにはバイオリン奏者がやはり6～8人くらいは必要ではないかと思う。しかしそれは実際上無理であろうから、それならいっそのこと6重奏団時代のディサルリから入るのも一案ではなかろうか。

もう一つ気が付いたのは、ディサルリ、プグリエーセ、レケーナの3人ともピアニストである。ピアニストはその楽団の演奏を俯瞰できる立場にあり、編曲の基本を担っていると考えられる。だからダリエソ、カナロ、デ・カロのようにピアニスト以外の演奏者がマエストロになった楽団ではサラマンカ、リカルディ、フランシスコ・デ・カロといった優秀なピアニストが陰で楽団を支えている。それで、これはお願いだがピアノ担当の齋藤 晶さんも今後ピアノの腕前を磨くのに加えて、編曲の勉強もして、将来はオルケスタYOKOHAMAの編曲を一手に引き受けるようになって欲しいと思う。

オルケスタYOKOHAMAは曲のエンディングに特徴があるが、第二部について言えば曲ごとにエンディングに少々バラツキがあったように聴こえた。この辺はまだ改善の余地がある。

第二部は歌の曲が少なかったが、グロリア米山さんによる“ラ・クンパルシータ”は歌詞がはっきりと聴き取れる立派な歌い振りであったと思う。



春の芸術祭～平和の風にのせて～タンゴ「港横濱・世界を結ぶ夢」

第一部「港横濱・世界を結ぶ夢」

- (熱い鉄のように)
Meta Fierro がんがん行こう
- 夜のタンゴ
- Languera* タンゲーラ
- 水色のワルツ
- Mucho Mucho* もっとたくさん
- 夜のプラットホーム
- A Mi Madre* わが母へ
- Para Dos* 二人のために
- 夜来香
- La Cumparsita* ラ・クンパルシータ
- Celos* ジェラシー
- Caminito* カミニート

第二部「これが、タンゴだ！」

- Sequime Si Podés* できるものなら
- El Amanecer* 夜明け (ディサルリ編曲)
- El Amanecer* 夜明け (プグリエーセ編曲)
- El Amanecer* 夜明け (レケーナ編曲)
- La Racha* 突風
- Gallo Ciego* 盲の雄鶏
- Don Agustin Bardi* ドン・アグスティン・バルディ
- Morena* 麦わらの山
- Recuerdo* 思い出
- La Cumparsita* ラ・クンパルシータ
- 9 de Julio* 7月9日
- Un Placer* 喜び



演奏するオーケストラYOKOHAMA。上からの照明だけで、フラッシュが使えず画面が暗くなってしまったことをご容赦願いたい

会場となった横浜市開港記念会館は本来は音楽会場ではなく、横浜港に関する諸々の記念品や写真が展示してあるミュージアムである。音楽に関係なくとも見学に訪れる価値は十分ある建物である。



←横浜市開港記念会館 正面入り口

内部のステンド・グラス



Piazzolla ... Amor

CD紹介

Orquesta AurorA

吉村 俊司

アカデミー会員諸氏には既におなじみと思われるオルケスタ・アウロラだが、まずは簡単に彼らの紹介をしたい。結成は2008年、バイオリンの会田桃子とピアノの青木菜穂子の2人をリーダーとし、バンドネオンの北村聡と鈴木崇朗、バイオリンの吉田篤、コントラバスの東谷健司という6人編成のグループである。年齢的には30代が中心だが、既にタンゴ界では十分キャリアを積んだ有望なミュージシャンが揃い、抜群のチームワークで素晴らしい演奏を行なっている。2009年の「プエルト・ア・プエルト」(MUSAS 6006)、2010年ブエノスアイレス録音の「ブエノスアイレスのアウロラ」(MUSAS 6009)と、これまでに2枚のアルバムをリリースしており、また国内での数々のライブに加え、ブエノスアイレスでの公演や東京・春・音楽祭への出演など演奏活動も活発。現在、日本の若手タンゴグループの中でも人気、実力とも最高レベルにあるのが彼等である。

さて、この3月に彼らの2年半ぶりの新作がリリースされた。テーマはアストル・ピアソラ。前作のリリース後から、次のアルバムは何かコンセプトを持ったものにしたという気持ちがあり、メンバーで話し合っぴてピアソラに取り組むことに決めたのだそうだ。折しも去年はピアソラ没後20周年で、本当はそれに合わせて昨年中にリリースする予定だったが、諸事情により今年にずれ込んでリリースされたのが本盤「ピアソラ…愛」である。

収録されているピアソラの曲は、一般にはあまり知られていないものが多い。加えて2人のリーダーの自作も4曲収められている。これらは直接ピアソラとは関係なく、強いて言えばピアソラに影響を受けた自分たちが今この時点で書いた曲、ということになるようだ。以下、まずはピアソラ作品から見て行きたい。

- ①「栗色と青色」(編曲・青木菜穂子)はパリに留学したピアソラが改めてタンゴに目覚め、現地で弦楽オーケストラと録音した曲(1955年)。ここではオリジナルよりもトラディショナルなタンゴに近いリズム感やフレージングを取り入れており、アウロラらしい躍動感にあふれた演奏となっている。
- ③「リベルタンゴ」(編曲・会田桃子)は、既に多くの人に演奏されてきた超有名曲だが、思い切って大胆にアレンジ。ゲストにパーカッション奏者の大儀見元を迎え、アフロ＝ラテン的にグル



ーヴしながら、即興も交えた非常に熱い演奏が繰り広げられている。

- ④「セーヌ川」(編曲・青木菜穂子)は①と同様パリで弦楽オーケストラと録音された曲で、楽曲の持つ美しさを素直に表現。前曲の動から静への対比も見事である。
- ⑤「天使のタンゴ」(編曲・青木菜穂子)はパリから帰国後のピアソラがブエノスアイレスで結成した弦楽オーケストラで1957年に録音した曲。青木は自身の名義のアルバムでもこの曲を録音しており、思い入れが深いようだ。冒頭の見事なピアノソロから息もつかせぬ展開は見事。③と並ぶ本作のハイライトと言えるだろう。
- ⑨「デカリシモ」(編曲・会田桃子)はピアソラ五重奏団のレパートリー。この辺りの曲は編曲まで含めてあまりに完成度が高いため、会田はオリジナルを尊重して六重奏へのトランスクリプションにとどめている。期せずしてデカロ・スタイルの六重奏によるデカリシモということになるが、ピアソラの味、デカロの味を残しつつも聴こえてくるのはアウロラの音。
- ⑩「チキリン・デ・バチン」(編曲・会田桃子)は幻想的な美しい演奏。アルバムを締め括るにふさわしい余韻を残してくれる。

続いて自作曲について見ていくことにする。

- ②「出発口」(作曲・会田桃子)は韓国の携帯電話の着メロ用に依頼されて作った曲なのだそう。本作の自作曲の中ではこの曲が最もピアソラの世界に近いかもしれない。新たな世界へ突破する勢いのようなものを感じさせる曲。
- ⑥「新緑のワルツ」(作曲・青木菜穂子)は対照的に古風なワルツ。シンプルで愛らしく、ダンスにも好適であろう。
- ⑦「水脈をなぞり揺蕩いし白蓮の炎」(作曲・会田桃子)は元々はピアノ三重奏(ピアノ、バイオリン、チェロ)のためにクラシック的に書いた曲なのだそうだが、六重奏でタンゴ的に演奏してもぴったりとはまる。不思議な題名とも相まって聴く者の想像力をかき立てる曲である。
- ⑧「サウセ・グランデ」(作曲・青木菜穂子)は、青木の人生の師匠にして大切な友人である女性とそのパートナーに捧げた曲で、彼女らと訪れた海辺の美しい町の名前が題名になっている。曲の構成を明確には決めず、メロディーの流れに任せて作った曲とのこと。

アルバムを通じて、グループとしてますます一体感が強まり、充実していることが伺える。ピアソラについては、単によく知られた曲を取り上げるのではなく、自分たちがこだわりを持つ曲を自分たちのものとして演奏することにより、アウロラを通じてピアソラの新たな魅力が発見できるアルバムとなっている。

オルケスタ・アウロラ / ピアソラ…愛 (MUSAS 6014)

- ①栗色と青色
- ②出発口
- ③リベルタンゴ
- ④セーヌ川
- ⑤天使のタンゴ
- ⑥新緑のワルツ
- ⑦水脈をなぞり揺蕩いし白蓮の炎
- ⑧サウセ・グランデ
- ⑨デカリシモ
- ⑩チキリン・デ・バチン

原稿募集

タンゴに関する随想・研究・資料・書評・コンサート評など、会員からの寄稿をお待ちしております。ご執筆の内容によって「タンゲアンド・エン・ハポン」または「タンゴランディア」のどちらかに掲載いたします。「タンゲアンド・エン・ハポン」の次号の締め切りは11月末日、「タンゴランディア」は9月末日となります。なお、原稿（図・画像を含む）は可能な限り電子化して電子メールの添付ファイルまたは外部メモリーの形で送ってください。やむを得ず手書き原稿になる場合は、編集部で電子化する作業が必要ですので、早めに送っていただくことをお願いします。また、原稿の内容によっては掲載できないことがあることをご承知置き下さい。

本誌に掲載の見解その他は、あくまでも執筆者個人のものであり、必ずしも日本タンゴ・アカデミーを代表するものではありません。なお人名のカナ表記については執筆者の表記のままを原則としますが、Juanを「ファン」と表記されたものについては、表記の流儀の問題ではないと考え、編集部の方で「ファン」と改訂いたします。

編集後記

タンゲアンド・エン・ハポン第32号をお届けします。いよいよ今号から「カルロス・ガルデル〔大澤 寛（訳）〕の連載が始まりました。ご期待下さい。また以前に発表されたが、今日では入手困難な資料を発掘・採録しようという考えに基づいた新企画「シリーズ・資料再見」も始まりました。皆様のお役に立てば幸いです。

（齋藤 富士郎）

日本タンゴ・アカデミー主機関誌 **TANGUEANDO EN JAPÓN**

第32号 2013年7月発行（非売品）

発行：日本タンゴ・アカデミー

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤 2-32-14-104

飯塚 久夫方

TEL/FAX 03-3324-1989 iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編集部：齋藤 富士郎（編集長）

〒195-0072 東京都町田市金井 6-17-2

TEL/FAX 042-736-7445 f-saito@mjq.biglobe.ne.jp

島崎 長次郎、大澤 寛、弓田 綾子、佐藤 進、西川 薫

דה